

川柳塔

昭和四十七年一月九日創刊
平成十八年四月一日発行
創刊大正十三年 通卷九四七号



日川協加盟

No. 947

特集・薫風名誉主幹の思い出

四月号

『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会のご案内

川柳塔社では『川柳塔』九五〇号を記念して誌上川柳大会を左記の要領により実施いたします。同人、誌友にかかわらず広く皆様のご応募をお待ちしております。

題・選者（各題2句）

「途中」

田中新一（一番傘）共選
西出楓楽（川柳塔）共選

「カード」

平山繁夫（時の川柳）共選
高瀬霜石（川柳塔）共選

「ひびく」

福島直球（ふあうすと）共選
小島蘭幸（川柳塔）共選

「魚」

今川乱魚（一番傘）共選
政岡日枝子（川柳塔）共選

締め切り 四月二十五日

発表表 『川柳塔』七月号誌上。同人、誌友以外の参加者

には発表誌送付

投句料 一〇〇〇円（定額小為替）

賞 各選者秀句に呈賞

用紙 『川柳塔』四月号に添付。他に「希望の方は川柳

塔社事務所へ」請求下さい。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六二〇二

川柳塔社誌上大会係

電話〇六一六六二九一六九一四

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

「壁」

河内 天笑

およそどの道歩いても「壁」という魔物が立ちほだかつて一歩も前に進めぬ時があるようだ。目に見えぬ壁だから始末が悪い。これまでずいぶん多くの仲間から「思うように句が作れん、壁に突き当たった」という「悩み」を打ち明けられた事があり、現に今も身近な友人からも聞いている。病氣と違つて観念的な代物だけにこれに対処するのは甚だむずかしい。

そう言えば私にも一度、ある題に限つて句が作れない「壁」に墮ちた経験がある。それは昭和四十年代の半ば、東大阪市の秋の大会で当時、常任理事をされていた(脚)本多柳志先生の選で「屈辱を握りつぶしている笑顔」が秀句に選ばれ市長賞をいただいた——のはよかつたが、嬉しくて自分その句が頭から離れない。そのため「笑う」とか「顔」という題が出るとその句が邪魔して句が出来なかつた。壁と言えるかどうか怪しいが、それくらいで済んで良かったし、その時はこれは「壁」だなどとは思ひもしなかつた。

こんな時人様に告げても助けてくれる訳ではなし、自

分ですらにかするしか方法はない。つまり脱出する工夫が必要なのだ。そんなジレンマを煩つて居られる御仁に一つだけ提言がある。どなたにでも当て嵌るかどうか疑問だが「原点に戻る」という一つの方法で工夫と言へるかも知れない。

それは一旦作句する作業から離れて自分の尊敬している何人かの句集を選び、精読し、その作家の優れた作品や自分好みの作品を選出するという作業である。これを少なくとも10冊程度熟読、そして共感を得られた作品やその作家独特の作品などを選出してノートに書き揃え、何度も味わい、それらの作品のいいリズムと心を修得する。こうして或る種の充実感と「やる事はやつたぞ」という達成感を味わつてほしい。それだけで十分価値のある事だし、然るべき収穫は十分期待出来る。これは私がかも実行している「壁」脱出法である。

自選句

見つけよう自分に合つた覚え方

天笑

雨の日の階段滑らないように

〃

無意識に洩らしたことは突きささり

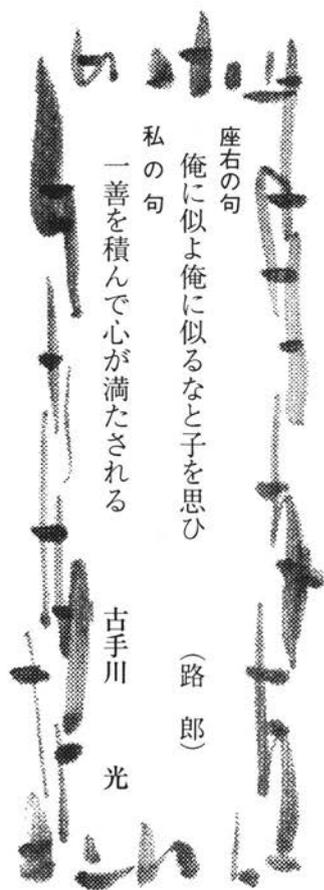
〃

何遍もおんなじ穴に嵌りこむ

〃

蒟蒻を遊ばせてたら舌を噛み

〃



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

一善を積んで心が満たされる

古手川 光

川柳塔 四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「岩城島の春」

■巻頭言「壁」

わが痛恨の回顧半世紀

河内 天笑 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

早川 棲世 …… (2)

川柳塔の川柳讃歌 (16)

河内 天笑 選 …… (4)

自選集

木津川 計 …… (51)

水煙抄

板尾 岳人 選 …… (52)

特集 薫風名譽主幹の思い出

板尾 岳人 選 …… (56)

都倉求芽・安藤寿美子・前たもつ・桜井千秀・江見見清・瀬戸まさよ

正畑半覚・海老池洋・榎本舞夢・恒松町紅・宮崎シマ子・大内朝子

根岸方子・園山多賀子・新家完司・太田 昭・田岡九好・高瀬霜石
柿花和夫・小西雄々・米田恭昌・西村哲夫・井上照子

わが痛恨の回顧半世紀

早川 棲世

今月号の本欄を担当させて頂いたことに因縁めいたものを感じている。まず私が路郎門の不朽洞に入らせて頂いたのが昭和三十一年の四月、今月でまさに五十年目になる。当時の不朽洞は中島生々庵、西尾菜、須崎豆秋、市場没食子、正本水客、丸尾潮花、北川春葉、後藤梅志、清水白柳、西森花村、その他個性ゆたかな多士濟々、まさに梁山泊の趣で、薫風さんもその後、こうした雰囲気をぜひ川柳塔に再現したいと念願しておられた。

黒川紫香、小西雄々、阿萬萬的、森下愛論など各先輩も大活躍で、そのお句のいくつかは今も覚えている。門下三百余人だったが

てつちりや路郎門下の生き残りで、今もご健在なお方は十指に満たない。

薫風さんが川柳雑誌の一般投句欄である近作柳樽に登場されたのもこの年で、たしか二月号からだったと思うが、すぐ巻頭を争う常連になり、あとずつと上位を占めておられた。不朽洞に入られるのも早かった。その頃は新人といえは、白馬に跨った王子さまが颯爽と現れる感じで、ついでに言えば、社会情勢の変化から、最近は熟年になってから短詩型の道に入られる方

愛染帖	新家完司選	(93)
誹風柳多留一一篇研究	8	(96)
檸檬抄「机」	仁部四郎・藤田泰子共選	(98)
「希」	村上直樹選	(100)
一路集「ともだち」	榎本日の出選	(100)
「花びら」	榎本舞夢選	(101)
初歩教室「揺れる」	三宅保州	(102)
秀句鑑賞「同人吟」	太田扶美代	(104)
「水煙抄」	福島万年	(106)
三月本社句会	(108)
各地柳壇（佳句地十選／西川更紗）	(112)
柳界展望	(129)
四月各地句会案内	(130)
■編集後記（ひとこと／井伊東吉）	楓葉・朱夏	(132)

座右の句

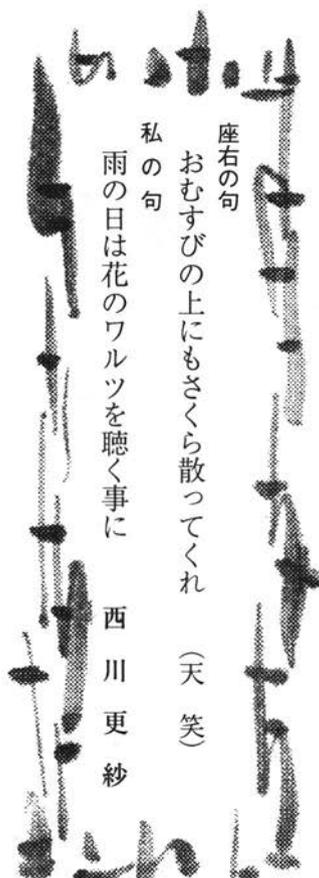
おむすびの上にもさくら散ってくれ

(天笑)

私の句

雨の日は花のワルツを聴く事に

西川更紗



がふえている。文芸の他のジャンルに比して、川柳にその傾向が顕著なのは、川柳がより思索的であるのと、会員相互に肌のぬくもりをより感じ合えるという思いがあるからであろう。

路郎師は指導のきびしさが有名だが、私にはそのような記憶がなく、厚遇を頂戴していた。たとえば毎月の投句欄「川柳塔」でも、始めての合同句集「私達」でも、他の方々をさしおいて多くの句をとって頂いた。作品批評の「新川柳鑑賞」や「川柳名句と難句」では例句にたくさん採用頂いた。このことを西内朋月さんに話したら、彼「人間、合う合わないですな」と。もう少し何とか言つてよ。

炎天に寒疣立てて師を送葬る 薫風

昨年この月、その薫風さんを送った。哀切きわまりない。本号に「思い出」が掲載されているが、多くの人に敬愛された薫風さんは、それぞれの人の心の中に、それぞれの形で生き続ける。薫風さんが川柳雑誌に「新進作家を語る三窓・新子・清生」という文章を載せてくれたことがあった。まだ薫風子と号し、みんなが若かった頃だ。薫風さんを含めて三氏はその後薫風さんが期待した通り柳界を支える存在となったが、ひとり私は敵前逃亡に似た姿をさらした。叩頭百遍、慙愧の思いに堪えない。

今回、幸い残っていた川柳雑誌二十冊を再読した。何度もレクイエムが聞こえた。



河内天笑選

米子市 林 瑞 枝

かんざしを挿して句集を嫁がせる
女神とのホットラインか絹の糸
太陽に恋して可愛らしい発芽
おしゃれ眼鏡わたしは春の狩人に
奥深いやさしさ秘めた医師に付き
桜咲き鏡の奥でははに逢う

弘前市 高 橋 岳 水

療原の炎に乗って春が来る
サバイバル誓えば道は見えてくる
脱皮して蟹は力を蓄える
父は今語り継ぐべき岐路に立つ
おしなべて井戸掘る人の寡黙癖
言い訳をしない男の肩の幅

堺市 加 島 由 一

出来ちゃった婚でいいから許すから
創業者の意志が生きてる現場主義
筋書きのない結婚というドラマ

子を思う親の眼鏡にある曇り
道行きも死語恋愛は自由です
満月が飲めよ飲めよと顔を出す

堺市 志 田 千 代

蟹ツアー旅人らしき人はない
一番に年始まわりに来た雀
食欲のない妻がする厨事
甘えたくなりそう労りの言葉
拾われた一円玉がうれしそう
斎場のカサブランカが鼻をつく

京都市 高 島 啓 子

始めからおしゃべり芍薬の新芽
ネクタイの渋さは愛人からのもの
組しやすいと思われる顔らしい
シャネル持ち少し崩れている鼻梁
働いた証すきまのない手帳
ひとり居て小皿に聞かす胸の内

静岡県 田 藤 杏

談合の洩れが告発組に居る
銭を貯め人を疑い犬と住み

二世帯の同居はもろい砂の城

じっくりと考え過ぎて乗り遅れ

波風の立たぬ話に背を向ける

悪筆は俺だけでない安堵感

寝屋川市 森 茜

焼き芋のそろそろ焚火かき分ける

百点をとったことない人気者

つやつやと櫛の青に咎められ

深夜便始まる母のしまい風呂

明日は明日今日の迷いと寝てしまう

大寒や夏のポスターできあがる

米子市 政 岡 日 枝 子

私を彩るものが薄れゆく

歳月をのせてまあるくなつた背な

深呼吸かすかに春の音を聞く

温度差はあるが姉妹の仲はいい

うつらうつらと油断する間に春がきた

遊びぐせ一度に湧いて出る春だ

富田林市 藤 田 泰 子

チャンスさえあれば私もスカイダイビング

ゼンマイが切れないほどに捻子を巻く

お薬を飲まないことにして元氣

老人力空気を丸くしてくれる

乗せられて十人分のちらしずし

柿の木に実がなるまでは生き延びる

海南市 三 宅 保 州

明日がある限り光彩陸離たり

真相は得てして闇がお好きなり

騙されてみたい気もする昼の月

着物売った過去には触れぬ母である

もう本気出してもかなわない息子

金に糸目つけぬと言うてみたいもの

大阪市 大 川 桃 花

オドオドとするのも手口かも知れぬ

証人台汗もかかずに嘘をつく

大鍋が活躍してた頃の幸

諦めて歩けばバスが付いてくる

昨日まで選った日向を今日は避け

宝くじごときに運は使えない

豊中市 安 藤 寿 美 子

大阪の雪ははんなり雪見酒

どこもかもコマーションですテレビ切る

ともかくも戦線縮小して生きる

八十路坂ゆるゆるゆるり下り坂

雨音に寝返り打ってまた打って

おどけてるピエロの背中寒そうな

倉吉市 野口節子

許したらほどよい風が吹いて来た
浄土とはあんな色かな茜雲
こじ開けて下さい頑な扉

鋼鉄の扉も開く銭の音
盛りすぎてシャボンのように消えた夢
甘い言葉をくれなくなつた鏡

吹田市 山本希久子

転んでも春を掴んで放さない
哲学を持ち一週間で散るさくら
春のまなざしに心を開く花

悪徳業者の狙い目は弱者
この先を思う臉の重たさと
誤解されやすい無口も饒舌も

羽曳野市 徳山みつこ

霧まといきのうの景が水墨画
ほめられて諭吉そわそわ出ていった
髪型はほめずおでんが賞められる

筋道を立ててケータイセがむ孫
多事多難週刊誌よく売れそうだ
参拝をしてご近所の鼻つまみ

大阪市 神夏磯典子

路のとうこんな嬉し春序曲
フルコースわくわくしてる腹の虫
ほどほどに医者と仲良くして楽し

喋り疲れ心の捻子が弛み出す

花吹雪友は地球の裏側へ(本間満津子さんブラジル水住 2句)
ブラジルで再会約す指切りよ

和歌山市 喜田准一

ひとつずつ敬語が増えて距離を置く
ごつごつとしてるが余韻ある言葉
置き物にされたくはない意地を持ち

萎んだが消えてはいない志
なるようになっていつもの朝が来る
いつどこで誰かと畳み掛けて来る

鳥取県 澤裕子

生きている実感風が心地よい
群集の中でけじめは試される
身軽さに慣れて気ままになる怖さ

善悪のけじめが胸で揺れている
探れたての匂が客呼ぶ道の駅
ひよつとことおかめの面で仲直り

西宮市 門谷たず子

追憶の絵の中にある海鳴りよ
テトラポッドが聞いているのは波の愚痴
余計だった一言枕にうとまれる

ふっ切れず納豆の鉢かきまぜる
妬心かな墨になるまで葱を焼く
仲よしも奥のおくまで追いかけぬ

松山市 高橋宏臣

この握手地獄に落ちるぬくみかも

悩まないように打つとく句読点

仲良しでないが一緒に熱を出し

性善をノーにしているドアチェーン

一球を真つ直ぐ投げて締めくくりに

松山市 古手川 光

冬はいいなおでん寄せ鍋うどんすき

その謂れどうあれ寿司の丸かぶり

マネキンのはや春着てる寒の入り

先例に学び税金無駄遣い

病院へ通い病人らしくなる

松山市 宮尾みのり

庇うのを止めて母鳥素っ気ない

感性のするどさ傷を深くする

父母の子だ原点を恥じるまい

昭和史が私の生きる背骨かも

ちっぽけな打算へちっぽけな迷い

西予市 黒田茂代

降りしきる桜母へのレクイエム

詩人になる特效薬だろう恋は

裏切ったひとを今でも憎めない

気の緩みだろう不調が続くのは

夕御飯くらいゆっくり食べさせて

大洲市 中居善信

洗っても洗っても指土匂う

古希過ぎた頃から父がよく笑う

磯の上此処が私の小宇宙

哲学を持たず詭弁が多すぎる

しっぽ振る犬にはとても叶わない

東かがわ市 成重放任

木の香る新居に余生送る夢

大雪に泣く人 陰で笑う人

浴室の鏡が笑うこの脂肪

岩のりの香りが飯をはずませる

今さらに妻の鎖の太さ知り

東かがわ市 池内かおり

倅から手解き受けてメル友に

錆びた脳分解掃除して欲しい

腰痛が手抜き覚えて2キロ増え

病院の帰り地卵一夜干し

起きてこぬ夫ひやひやして覗く

東かがわ市 原賢

酒飲んで明日の夢を組みたてる

生き残りかけて頼れる風を待つ

一言が過ぎて旗色悪くなる

人間の愚かさ見てる丸い月

風ぬるみ靴が弾んで回り道

東かがわ市 川崎 ひかり

悪役がいるからドラマ盛り上げる
酒とろり口のチャックが緩みだす
二ヶ月の風に冷たい鬼の首
年毎に活字大きくなる辞典
戦いの地にも陽が出て陽が沈む

東かがわ市 伊勢 八重子

不眠症話相手は窓の月
誰よりも頼るあなたが居てくれる
散る利那ちろり未練な寒椿
胸の荷を絵馬に託する青い風
さりげなく今来たと言いう待ち合わせ

東かがわ市 清川 玲子

臘梅が老いの快癒を待つて咲く
紅白の幕に老舗の着物展
うつの日も酒が味方をしてくれる
口紅のついたグラスについてくれ
勝つ自信あるが先輩たてておく

東かがわ市 神保 坊太郎

難聴のポーズでみんな聞いている
白のような重石で今は庭の隅
チャン付けが未だ居たりして同級会
気が付けば我野次馬の側に居り
春雪の降った後から消えてゆき

高知市 小川 てるみ

心にも紅をひとはけ春鏡
温かい言葉が欲しい冬最中
春を呼ぶ祭りへ福を買いに行く
あれこれと心配しては嫌われる
品格も品位も落ちて来る日本

高知県 赤川 菊野

欠点を笑窪が隠す好い笑顔
土壇場になれば鬼とも手を結ぶ
つまずいて他人の心が見えてくる
一時の至福ひとりのティータイム
春一番昨日のうつは吹っ飛んだ

高知県 小澤 幸泉

あちこちに曇り残るが真珠婚
残り火を集めて春を待っている
精いっぱい妻をほめてる酒の席
席順にまだこだわって老いつづけ
悲しみと怒りを胸に聖書読む

高知市 北川 竹萌

老いの会九十四歳が大関か
エンドレスわしが切れるは何時だろう
古里の祠目につく数柑子
ふるさとの温い言葉よ里言葉
初恋の墓をななめに墓参り

砂川市 大橋 政良

どの蔓ものぞきの好きな癖がある
生年月日僕のアジトがここにある
無い知恵を出すより金を出してやる
走らねば回らぬ僕の風ぐるま
宿泊費水も空気も入れてある

青森市 小寺 花峯

金はなく暇がありすぎ陽は落ちる
追う雲へ疲れ果てたか昼の月
よく焦げる玉子で錆びたフライパン
陽が沈み影が大きくなる猫背
涙拭く森にささやく風の声

十和田市 阿部 進

ほめ上手人のやる気を湧きたたせ
大嫌い裏の裏まで見るお方
手を引いて歩いた孫の世話になり
亡き夫の夢を追いかけて歩む日々
体調がよくてハードル低く見え

弘前市 福士 慕情

一番でないと貰えぬ金メダル
鳥になる風を待ってるジャンプ台
努力より結果求める棒グラフ
左遷地でやる気おこした力瘤
老人会国を支えてきた戦士

弘前市 宮崎 ヒサ子

ピーピーと雪の向こうの焼芋屋
二車線が一車線へと雪ずしり
雪どんどんどんな話も後回し
じゃっば汁二人フーフー温かい
カタログで春爛漫を浴びてみる

弘前市 相馬 銀波

災難の大雪でした奥津軽
半分は荷をわけてます二世帯で
難題は児の進学と塾えらび
真冬日を誇張している虎落笛
忘れたい雪にうもれていた二月

弘前市 櫻庭 順風

起床してその日の雪を確かめる
落し行く除雪車に腹立てぬこと
排雪も除雪も日常茶飯事
だんだんと戸の開閉が渋くなり
新雪のスキーの雪庇踏む度胸

弘前市 須郷 井蛙

耕運機不安覚える竹の花
核の国誕生地球咳をする
人間誕生ここから地球狂い出す
満点を囲み夕食ハヒフヘホ
捕殺する名人がいて無農業

弘前市 岡本花匠

生き延びて春の息吹を聴く大地
アスベスト禍懸念しながら生き延びる
度忘れにまたかと笑うオシドリで
かりぼりと沢庵齧る生活の譜
朝の水五臓六腑に活を入れ

弘前市 今 愁 女

京都議定蹴ったアメリカ恨めしい
春を待つ早めに飾る雛人形
少子化で先細りする未来地図
寒明けも雪に閉ざされ春遠し
使わずに錆びた針をも供養する

黒石市 相馬一花

手応えのない恋人に業煮やす
禁じられた遊びは君も僕も好き
嬌声にずんずん伸びてくる鼻毛
忽然と来るあの女に一目惚れ
凡人が駄犬と歩く並木道

さいたま市 星野育子

肉野菜輸入は買わぬ愛国心
性格は不一致のまま銀婚式
近くで見引いてまた寄りピカソ展
根回しの上手い男は裏も読む
自分史のラストシーンを考え中

さいたま市 八田 敏

豪雪に埋もれて耐える過疎の老い
退院につづき施設へ妻送る
頸椎の手術へ医者も及び腰
痛み止め注射も効かぬ手の痺れ
年明けて腹立つニュース目白押し

佐倉市 岡井 やすお

末っ子の暮らし御覽に両陛下
改革もこうのとりに突つ張れず
キャンパスに桜咲かす子散らせる子
時間外に背負い投げ業出す男
外交は一枚二枚上の敵

日高市 根岸 方子

風邪予防ありとあらゆる手をつくす
花粉症やむなく変える通学路
子を産まぬ女が論ずる老後論
一病がベジタリアンに変えさせる
減量に膝のピンチを救われる

東京都 岸野 あやめ

あみだくじ女の運に似てないか
婚約のそれからあとの山と谷
これやはり要るのよ読まぬ本の山
値下げしたドレス見に行く気がしない
そんなもん平気と食べる賞味切れ

東京都 清原悦子

一枚を脱げば四月の風に会う
取り急ぎ用件と書く義理堅さ
添削のひと筆文字が生きてくる
今更と思う鏡を拭いてみる
強敵があちこちにいる大自然

東京都 小川賀世子

おばさんの笑い袋が壊れてる
美しい笑顔で飛ばす鬱ひとつ
春一番噂話もふたつみつ
目覚め良い朝のクリームよく伸びる
やんわりと効いて来ました褒め殺し

八王子市 播本充子

東京の冬空に描く胡蝶蘭
然り気なく先生役が出来る人
体重を減らすよく噛みよく歩く
焦らない事だと言われ落ちつかず
ケータイを持たない女史で今日も留守

武蔵野市 亀井円女

大好きな字は夢愛そして絆です
孫の十人翔ぶ子光る子落ちる子も
不器用で舌は一枚顔ひとつ
次の世も女にそして母親に
呆けてないホラこのアクション見ておくれ

横浜市 菊地政勝

平等にある運だけど掴めない
ぼた餅が落ちて来そうな棚探す
不真面目に生き自打球に攻められる
情けない顔の抜歯が恨めしい
モラルなど見えぬ企業の儲け主義

横浜市 小野句多留

平日をすこすニートの山手線
いつの間に妻のペースになる喧嘩
乳飲児の知るよしもないお年玉
家中にお金隠してかしまる
たらの芽が春呼んでいるカクレンボ

富山市 島ひかる

チンドン屋恋しい深い深い雪
目を閉じて観る美しい小宇宙
川筋の都は過疎の村になり
鉋毒も流れたことがあった川
豪雪に耐えた姿で咲いた花

京都市 都倉求芽

赤い実が懸命に雪振り払う
分水嶺にいるのは月か雪女
恋しさは女神だろうが鬼だろうが
春風へ記憶装置がややもどる
風船のように地球もはずむ春

亀岡市 井上森生

餅を搗く杵珍しと列が出来
湯たんぼの効用今に平成に
燦然と聖火トリノは美のお国
掌を揉んで元氣な朝の膳
春を待つ心は二月堂の下

長岡京市 山田葉子

まだ語り尽せないのに夜が明ける
脇役にはまりたくない福寿草
目標を失い蟻の列乱れ
乱雑で狭い書齋がくつろげる
四コーナーどうにか曲り滑りきる

大津市 中宗明

家運かけここで一発勝負する
不安な世カリスマ頼るほかにない
我慢にも限度あります生活苦
マラソンを卒寿で駆ける意気のよさ
夢実現ここで一発ジャンボくじ

愛知県 早川盛夫

出来ることなら現金で古稀祝
中心で父の楔が利いている
両親の居ないふる里他人めき
人間の腸視く縄ノレン
職安へ昔をみんな捨てにくる

大阪市 前たもつ

いつの間に気合いのつもりどっこいしょ
郵便ポスト近くに三ついい街だ
歳重ねやつと世間が見えてきた
私は死ぬなど思ったことがない
音信のつもりで柳誌読んでいる

大阪市 川端一步

先ごめん言えておいしい酒となる
腹の立つことも一緒にシユレッダー
またあした花の香りがする言葉
お見舞いは皺の笑顔も喜ばれ
九条の花咲かせよう春だもの

大阪市 鶴田遠野

男氣を無造作に出し縛られる
尾を振らぬ覚悟の酒は軽く受け
いじりなやボクその顔が好きやから
胡坐組み息子の話聞く深夜
痛飲を覚悟で誘う故郷の友

大阪市 川原章久

メモ帳に想定外が書いてある
怪物が落ちてきそうな屋根の雪
風邪引くと薬のせいか寝てばかり
増税なら意地でも止めぬ酒煙草
久々に銭湯で会う富士の山

大阪市 榎 本 日 出

大阪 市 古 今 堂 蕉 子
路上ライブせめて一人と立ちどまるときめきを感じる心なくすまい

ずばずばと言ってる人が楽しそう
ありがとう一人暮しも楽と知り
口止めをしたからすぐに伝わるよ
背もたれがあると無いとで大違い
足の裏ほっと安らく夜があり

大阪 市 清 水 絹 子

大阪 市 岩 崎 公 誠
訳もなく愚痴を並べてはやく癖
よめはんの操る糸で楽に生き

失敗も明るい嫁に救われる
貸借なく年金だけと子に明かす
自己弁護老いに昼寝も健康法
はや立春買ったも買ったすのし袋
叩かれた毬ほど強く跳ね上がり

大阪 市 板 東 倫 子

大阪 市 中 村 叡 子
孫が来る新札入れて待つ財布
新聞屋勧誘激し困り果て

わが子なら泣いて叱ろうホリエモン
セレブの家に高慢ちきな猫が居る
泣いても淋しい笑窪見せる女
里の母悲しいまでにお人好し
過ぎたるは及ばぬと知る老婆心

大阪 市 川 久 保 睦 子

大阪 市 岡 本 久 峰
シベリアの寒さに耐えて来た五体
コマーシャルとうとう耳がタコになる

怖さなど知らぬトマトはまだ青い
女の意地真綿にくるみ生きてます
まだ意地があるから開けぬ玉手箱
余波少しかぶり利口になりました
もう一度逢いたい人の写真抱く

チルドレンに続き偶像まで担ぐ
恢復の喜び土を踏みしめる
日本の基礎がらに小泉よ

大阪市 近藤 正

大阪市 熊代 菜月

九条が政治の潮目読んでいる

一言が遅れたために仲違い

いさぎよくノーと言えない日本人

反対を言うにも度胸少し要る

煽てられついうかうかと落とし穴

大阪市 奥村 五月

チャルメラの知らぬ子供とカッパ麵

試食して試供の化粧して帰る

導火線チラチラ見せて妻の乱

ああしんど大丈夫かとフルムーン

下取りのきかぬ夫を持て余す

大阪市 井丸 昌紀

オチのない嘘は許さぬ浪速っ子

聞こえない振りしてしまう母の愚痴

犬の目は従順という思い込み

水炊きを鶏か豚かで揉めている

菓子折にしてはいささか重すぎる

大阪市 星野 きらり

泣き笑い歩いた道も今ひとり

本当は聞いて欲しいの独り言

子育てが手抜き割に親孝行

寒に耐え陽の匂い乞うシクラメン

すんなりとハウスで笑う冬いちご

春待たず声もかけずに星になり

呆けまいとカルチャー通い西東

決別を自分で決めた朝の水

燃えるものまだ持っている喜寿の春

岩肌の母によく似た石仏

大阪市 西川 更紗

まだ人のお世話が出来有難さ

鍋囲む機会も減って子は育ち

一人湯にゆずの香りと戯れる

夜逃げした人の話で日が暮れる

金欠をものともせず妻太り

大阪市 伊藤 博仁

待つ妻の所為にして立つ負け将棋

嫁姑垣根がとれた煮染め味

せせらぎの子ら格好のモトクロス

しみのでた右手にペンが震えだす

穴あきのジーンズで来る初対面

大阪市 榎本 舞夢

今年から禁酒禁煙嘘ばかり

散歩道小鳥さえずりハイになる

たのしくて食事するのも忘れてる

読書せずとろりとろりと日なたほこ

プレゼント開けるたのしみメッチャ好き

大阪市 渡部 さと美

お弁当作らぬ花見何度でも
寒風に慣れた頃には春兆す
お化粧の一つよ春の髪を染め
アメリカ肉は見せびらかしただけ
嬉しいこと重なり高いたかい空

大阪市 小泉 ひさ乃

明日よりも今日大切に生きて
目隠しの小さな手には陽の匂い
干されてる雑魚が見ている青い空
苦勞まだ足りぬ馬鹿にはなりきれず
決断に孤独の道を選ぶ意地

大阪市 安達 はじめ

豪快に父のラッパが鳴った過去
遺言の絆が切れる通夜の席
弔電で遠い従兄弟と縁が切れ
冷蔵庫開けて下さい置き手紙
粗大ゴミ言われる父が柱です

大阪市 津村 志華子

湯豆腐が軽いリズムで踊ります
ひとり居の自由気ままな芝居小屋
明暗のはざまに絵馬がゆれている
Eメール深い情けはわからない
ロソクがゆれると母が目浮かぶ

大阪市 小糸 昭子

新鮮な野菜を買った道の駅
胎児が出て来た新鮮な感動
居酒屋で議論交流して握手
交流はふとした縁で結ばれる
病床で花一杯に包まれる

大阪市 小谷 集一

豪雪の里で温暖化を憂う
昇進と転勤セットで来る辞令
まだ当てにされてるらしいほっとする
リサイクル出来ぬ同士の夫婦愛
呆けてない証拠へそくり持っている

大阪市 津守 柳伸

手作りの妙味麵棒のひとりごと
雑用に追われりハビリ足りている
信念を貫く頑固風邪知らず
ボランティア趣旨はき違え肥やす腹
酔うほどに本音飛びかうクラス会

大阪市 津守 なぎさ

行楽にあわせ蓄も作動する
雪解けの春待ち遠しランドセル
行楽の予約景気は上昇中
食べて寝て女性ばかりのバスツアー
紀子さまがごうのとり呼びさわがしい

大阪市 松尾 柳右子

申告の同じ間違ひ歳のせい
間違ひも堂々とする永田町
この人生間違つてないと言いきかせ
紅を引き今日の始動に弾みつけ
机上では生きて行けると言う年金

大阪市 町田 達子

飛行機が低く飛んでる音しずか
寒いけど二月の青い空が好き
あれこれと忙しい私の日課表
まだ少し遠い春だが弾んでる
無理でない程度に汗をかきながら

大阪市 中村 れんげ

猛犬に注意それよりこわい人
のら犬をうらやむ檻の血統書
長寿国大ばあちゃんに中ばあちゃん
肩一つたたきどうするあの話
喫茶店ここで散る恋実る恋

大阪市 升成 好

打開策見え二度目の茶が出され
ほっとけば戻る機嫌と読まれてる
嘘つけぬ人で小鼻がすぐ動く
ひよっとして俺のことかと鼻をさし
汗ほどに庭の仕事がはかどらず

大阪府 初山 隆盛

偽りの活気に株の乱高下
老監督に夢は再び還らない
番犬が主の顔で吠え立てる
カキフライ朝昼晩と拒まない
百円で神に欲張る願ひごと

大阪府 米澤 俣子

雑魚なりのポリシーを持つ人間味
ハイテクの世でもお祓いする不思議
咽元を過ぎた話は時効にしよ
家計簿にも哲学あつた無駄遣い
理解出来ない若者の省略語

大阪府 澤田 和重

封筒の厚さはきつといい返事
七輪で焼くと秋刀魚の味が出る
七分粥毒舌すこし顔を出す
これからの余生遊びも学ばねば
招待券二人でないと弾めない

大阪府 野田 栄呼

障害者見捨て儲けに走る宿
陽と月とゴツタ煮したよホリエモン
買う前に再確認をする値打ち
ほころびの繕いあせる小泉さん
金遣うチャンス迷う老いの坂

大阪府 前田 ゆい

和泉市 横山 捷也

水仙を近所に配るほどの幸

気がつけば亡母に似て来たひとり言

来客の増えて威勢を推し計る

退院のしらせ待ちわび来た計報

ひとり言増えて痴呆の入り口か

大阪府 桑田 ゆきの

ミリオネアしつかり脳トレさせてくれ

薔薇風呂でようやく波長合わす妻

一喝の梵語天衝くお水取り

幾千の花びらつなぐ万華鏡

花びらに包まれ黄泉路船出する

池田市 栗田 久子

千年のみやび京都は花嵐

路地裏を抜け嗅覚が冴えてくる

言葉よりふりで笑わせてる落語

春の野の香りかタンポポの芽吹き

残るのは主を無くした椅子ひとつ

和泉市 西岡 洛 醉

どん底を知った男の潔さ

散歩道夜露しつかり花も葉も

葉草に頼る老いにも日々が有る

すれ違う香水片足ふと止まる

前進の歩幅で今日も辞書を繰る

妻伏して出番なくしたバスポート

二次会に本音のはける友と居る

一芸も持たず多趣味で老いました

饒舌な女同士の日向ぼこ

それぞれにナマリの違う五人部屋

和泉市 中川 楓

草餅の大き目が好き粒の餡

水仙の一輪にして濃く香る

逃げているのにきつちりと誕生日

夫婦してネジが甘めになつてきた

ペット犬鬼退治など知りません

泉佐野市 山本 蛙 城

枯れてなお落葉は群れになりたがり

少子化の担当相という美人

頭が高い下がりおろうをしてみたい

手の届くようにまああるいお月様

マスクしてなおさらしけた顔になり

茨木市 藤井 正雄

小遣の前借りで乗るスキーバス

潮騒の詩も織り込んで旅日記

後輩に大兄と書く依頼状

リュックから絵本を出して孫泊まる

産声にときめく神と待つ廊下

交野市 田岡九好

愛子様在す数奇な星の下
花が咲く今は西暦何年ぞ
要らんもんつい買わされた二割引
晩酌にプラスチックの缶ビール
忘れぬよう置いた所をまた忘れ

交野市 森本弘風

子が医者で親の病氣を知る因果(義兄死去)
また一人兄姉の減るお葬式
悲しみは葬儀の後に押し寄せる
まだ熱い愛した人の骨拾う
父母に抱かれて眠れ墓の中

交野市 山川日出子

子を守る防犯ブザーのランドセル
戦時中探照灯が故郷の山
潜水艦見学できた呉軍港
御主人の本心分かる盲導犬
番犬に泥棒の絵を見せておく

大阪狭山市 矢野 梓

胎内で聞いていたかなシューベルト
喧嘩などしたくはないが腹は立つ
納得はいかないけれど顔を立て
世渡りに時たま使うかくし球
ぬるま湯につかった脳が動かない

河内長野市 山岡 富美子

春おぼろゆったり歩く影法師
パスポート抱いて私の膝栗毛
路地裏を歩き昭和を探してる
しわくちゃのお札に長い物語
苦労した皺は映さぬ姫鏡台

河内長野市 水谷 正子

風邪の尾根越えてようやく春四月
ゆっくりと時代の端へ押し出され
自分史を埋める穴を探してる
携帯もいけど葉書味がある
ユートピア求めて余生海外へ

河内長野市 坂上 淳司

笛吹けど聞く耳持たぬパラサイト
古希にまで高校入試落ちる夢
答案を白紙で出した怖い夢
無理難題託された絵馬風に揺れ
高枕そのうち付きまもわるだろ

河内長野市 植村 喜代

もう二月老いの月日は早く経つ
美味しい物食べると怒ること忘れ
優しい日もありましたのよ夫にも
一日が大事と思う歳になり
喜寿祝頂いたのは市友会

河内長野市 井上喜醉

岸和田市 原 さよ子

天寿まで生きるつもり
の髪を染め
ちよん髻でソフトなサンバ
大当り
限界と盃伏せて席を立ち
寒そうに立ってるポスト
過疎の駅
自己主張おさえる利口な喉仏

河内長野市 村上直樹

猫にまで八つ当りする負担増
膝すばめ席を譲れよお若けえの
本心を晒せば傷を負うふたり
心ぶらの波に揉まれて
いる安堵
惜しまれて散るかやつと
と言われるか

岸和田市 岩佐ダン吉

病気ですニコチン依存症
と言う
九条が危いあなた今出番
体裁をとりつくろつて
軽くなる
ケータイは捨てたひとり
にある時間
核戦争未来は凍りつく地球

岸和田市 井伊東吉

雪降ろし済めばお次は
花粉攻め
眠りから覚めて飛来
の元気蜂
マイナスのイメージ
ご法度次期総理
増税のポディーブロー
が効いて来た
あらためて知る日本語
の幅と奥

威厳さが邪魔で申カツ誘えない
挨拶は下手だが情のあるお人
迂回して小さな花を見つけた
不養生いの一
番に風邪を引く
底冷えの今朝も
怠ける水仕事

岸和田市 林 力子

なんば誉めてもおかめひよつとこ
変らない
おはようと大声で呼ぶ今日の幸
衣食住足りて挨拶知らぬ女等
迂回して法の裏ゆく悪い奴
絵ハガキの犬が張子の虎に見え

岸和田市 土橋房枝

同じ趣味娘と競いハッスルす
義理チョコに妻の嫉妬がほろ苦い
都合主義いつかバランス崩れそう
神様にそつと告白今日の嘘
使い捨てもう捨て場所をくれぬ神

岸和田市 森元ふみよ

夕暮の母子の会話弾んでる
亡き人の法事をだしにグルメ旅
画面より世界遺産に引き込まれ
日本中欺瞞だらけで絶句する
古稀過ぎてナツメロとても好きになり

岸和田市 雪 本 珠 子

瘦せたいと言ってるわりに良く食べる

流行の陰で泣いてる懐古趣味

半額を待ってデバ地下ウォーキング

人生はドラマ人間皆役者

ありがとう言って言われて和んでる

堺市 神 原 文

一年は駄足野球幕開け焦れつたい

生きている手応えお腹空いてくる

怒らなかつた亡母を手本に生きている

腑甲斐ない自分に腹を立てている

寒い朝フオーと叫び庭仕事

堺市 村 上 玄 也

妥協する裏にしたたかなる打算

温室の野菜に四季を乱される

伴奏に乗らない父のマイウェイ

間違つたままで覚えてる漢字

散らかつているから安らげるわが家

堺市 西 村 りつえ

包丁も春を奏でる若ごぼう

アバウトで陽気に生きるスイトピー

顎で使わずけけ言うが淋しがり

三 四日まとめて前後する日記

駆け引きが延延続く拉致の国

堺市 矢 倉 五 月

残つた老舗にほつとしたミナミ

土曜日の楽しみ川の字で眠る

先輩が今までありがとうなんて

不機嫌を病気病気と躲す知恵

こんな字が思い出せずに出る冷汗

堺市 奥 時 雄

鼻柱向い風には折れやすい

眼鏡越し信用しない目で見られ

外国の旅券審査は気味悪い

時差のない近場のカニに切り替える

口げんか以上のことはもうできん

堺市 石 堂 潤 子

曖昧に聞ける話で無くなりし

鬼も内二人暮しの豆を撒く

お仏壇だけは手抜きが無い掃除

口づけの形で梅の香を愛でぬ

公園の鳩に好かれた毛糸帽

堺市 國 見 蘭 香

初旅に石の箸置き海のやど

時折りは切り捨てるのも生きる知恵

血が騒ぐから口出して疎まれる

真っ赤に見る十五夜の月知らなんだ

深呼吸大樹のオゾン独り占め

堺市 柿花和夫

四條畷市 吉岡修

いつわりの夜をネオンに導かれ
頭から暖簾を分けて冷えますな
勝ち組の転落劇で酒二合
本心をテストしに来たチョコレート
病室に元気をくれる明烏

堺市 和田つづや

妻という真綿みたいな同居人
母の忌に海ほおずきをなつかしむ
遺書風の父の自分史読んでいる
快晴の朝だ休みだ野に出よう
悩み事あるね洗面器のきみも

堺市 源田八千代

春うらら布団干す間の梅見かな
梅見客で賑わっている路線バス
年甲斐もなく緊張の発表会
脇固め引き立て役に甘んじる
酔ごぼうもビミョーに違う母と嫁

堺市 齋藤さくら

孫いない寂しいようでもまだ気楽
ジョギング機偶で埃をかぶってる
服着てる犬は迷惑かも知れぬ
昼ごはん済んだらこくりお婆ちゃん
消しゴムで消したい傷が二つ三つ

吹きだまり春にはきつとここを出る
パチンコに軍艦マーチいう魔法
見つかればどんと買いたいわたし色
キリストにアラーにマナー聞かせたる
やめてから好調らしい元の店

吹田市 早川棲世

両替はボロ札長びいてる不況(旅の思案 その十二)
テロに武器売ってる国がきつとある
日本文化紹介なんで太鼓やねん
シシカバブ醤油が日本味にする
石の廃墟の果てなるエーゲ海の青

吹田市 瀬戸まさよ

マイセンでコーヒーを飲むゆつたりと
お手本は若さへ努力森光子
愛なんて口にせずともわかります
キンカンの匂いで風邪も退散す
どきどきは怖いが好きなのサスペンス

吹田市 太田昭

まだ歩く老いの靴紐締め直す
核心を突かれ釦を掛け直す
電子辞書叩き辞典を引き直す
アングルを変えて本音を覗き込む
使い捨てに謀反を起こす紙コップ

吹田市 穴 吹 尚 士

大臣の記憶にないという話

遺言をこっそり書いてみる病後

失敗の手品が受けたポランティア

来し方をばやく男の下り坂

釣り糸にぶら下げてある袖の下

吹田市 大 谷 篤 子

おはじきで孫と心が通じ合い

月青く電話の誤解とけぬまま

胸さわぎ好きなお菓子でお茶にする

インコにはなれぬ雀に自負がある

真つ直ぐな坂道疲れどつと出る

吹田市 木 下 敏 子

うかうかと節分も過ぎ歳をとる

金婚の節目頭を切り替える

過去未来今を大事に振る手足

しようもないことをおぼえていた頭

コーヒーで本心なんか話せない

吹田市 須 磨 活 恵

国会議員の年金聞いておったまげ

国民のための政治をしてほしい

これ以上あがると困る消費税

年金が減ると白髪が増えて来る

我慢した不平が洩れる春の蛇口

吹田市 岩 屋 美 明

いつまでも若くありたい玉手箱

空回りばかりしている老いの知恵

算盤の合わぬ肩書背負わされ

少子化の森で迷って手をつなぐ

臍の傷明日ばかりに賭けている

高石市 浅 野 房 子

この歳で心うきうき春を待つ

捨てるにはもったいないが着ない服

無いようである気が付く世間の目

白旗をあげているのにまだ攻める

善と悪いたちごっこを見えています

高槻市 井 上 照 子

親を看て生きる教科書見当らぬ

高枕雪国の友思いやる

単純に制服好み試験受け

大安の拳式暦のいたずらか

ウオーキング心に決めた寒い朝

高槻市 執 行 稲 子

怪し気な人相不安なアンケート

多数決に地団駄を踏み臍を嘔む

足踏んだ人があいたつとはせつかちな

おとほけもおつとりの娘に勝てません

睨み利く鰯吊して鬼は外

高槻市 瀧 本 きよし

高槻市 西 谷 治三郎

無口でも優しさ掌から零れでる
金の無い月に孫たち会いに来る
鬼の面時々はずし人になる
過疎の村青空だけが眩しすぎ
手に負えぬ子どもに今は介護され

高槻市 傍 島 克 治

母からの絵手紙はもう初夏の景
除夜の鐘払いし煩惱纏いくる
落着けと言った父さん落着けず
ひよっとして月下美人は私かも
磯の波のたりと寄せて春告げる

高槻市 生 田 義 一

久々に大和男子が賜杯抱き
拒否ばかり国会権威丸つぶれ
答弁の巧さ流石だ詐欺社長
想定外だっただろうに塀の中
もて余す吹雪の宿の昼下り

高槻市 富 田 美 義

一人だけ味方いるから頑張れる
もしこころ見えたら人は気絶する
負けた日の涙はそっとして置こう
許すこと許されること有りいのち
悪人も同じ答の母を持つ

どうぞ見てと言うているよう胸の谷
婦人消えおばはんママさん元気です
ラブレターワープロ使ってイヤミ聞く
おしゃべりは健康法と言うししゃべり
伸ばしても叩いてみても皺はある

高槻市 江 原 秀 夫

賞味期限切れた男は奴風
情報がさらさら落ちる掌がこわい
禁断の木の実に触れた手のしびれ
アンケート見えない顔が取りしきる
思い出は死ぬまで三日の旅疲れ

高槻市 指 宿 千 枝 子

越して来て荷物に埋まる四十日
さあどんな旅になるやら古希の春
住み心地いい町ですと言いつけ
窓越しの日射し寒さを忘れさせ
せて傘寿まではと部品大事がり

高槻市 乙 倉 武 史

ご懐妊紀子さま宛にコウノトリ
少子化の世にサボテンの子だくさん
額に汗稼いだ金は宝もの
何もかも信頼出来ぬ世と変り
税務署が算数急かす申告期

高槻市 左右田 泰雄

それなりの役目は果すくすり指
軽い口よりは重たい口がいい
親しみを込めて会釈の目が笑う
ぐったりと疲れた服を壁に吊る
自分でも読めないメモの走り書き

豊中市 吉田 あずき

やわらかい雪が凶器になろうとは
生と死が紙一枚と思う日も
縛られた足枷のごと掘ごたつ
トリノ五輪他国の成長振りを見る
本番に強いことこそ実力だ

豊中市 山門 タミ

節分で豆八つぶを食べた老い
シクラメン部屋の中には春を呼ぶ
善人も鬼も仲よく鍋つつき
冷凍食面倒い時の虫おさえ
家計簿に粉飾決算出来もせず

豊中市 江見 見清

憧れた方に言われるあなた誰
悔しくて奥歯をギョツとでも入れ歯
ほどほどのトラブル旅のアクセント
招かれたのは夫婦ではなくひとり
お雑煮の餅は小さめお年寄

豊中市 水野 黒 兎

風花は天から友がくれた文
納税の相談室の親切さ
シナリオを書きメガホンも妻がとる
堂々と妻にケチつけ子は強い
菜の花がビルの谷間に生む浄土

豊中市 藤井 則彦

孫の描く似顔絵髪が足してあり
スケッチの旅で張り合うベレー帽
予報士が薄着で示す雪マーク
細い字で重い言葉のある賀状
間違いの電話にしては艶な声

豊中市 岸田 知香子

残す物無いけど子には過ぎた嫁
孫二人親のふところ知りつくし
損得はいらぬ余生の八十路坂
重なつた慶事涙の母子家庭
八十路坂我が身守るで精一杯

豊田林市 片岡 智恵子

言葉は音符投げかけかたが違うだけ
花だより春の鼓動が速くなる
受かっても落ちてでも忘れられた絵馬
高騰の灯油温さは変らない
ときめきのないチョコ夫に買ってくる

富田林市 中井アキ

仁丹のにおい振り撒き嫌われる

食卓で孫さんすうに祖母ぬり絵

招待の靴はまっ赤に弾んでる

試着室のカーテン開けるときおんな

耳底で鬼をペットにしています

富田林市 稲川惠勇

妻ぐちるたびに財布が軽くなる

喧嘩するたびに熟してくる絆

正直に生きて出世と遠く居る

一徹な雑魚の主張を持てあます

女房にはいつも頭を下げている

羽曳野市 吉川寿美

あうんのかたちに夫婦茶碗が伏せてある

化野の月よ何れひとり風の音

いくつになっても子のため母の襷がけ

真相をみていた猫が伸びをする

白を白と言うて吹き矢が飛んで来た

羽曳野市 三好専平

安売りのスーパー玉出よありがとう

占いの名でニッポンを叱りつけ

あれあれというまに年をとりにけり

追いかけてやがて空しいお金かな

売り買いのミスをネットは見逃さず

ライブドア錬金術の裏操作

飼いだに噛まれた傷がなおらない

妥協した心の傷は消え失せぬ

仏にも夜叉にもなれるペン握る

もうだめと思つた頃に来るチャンス

羽曳野市 安芸田泰子

初場所はテレビ棧敷の炬燵守り

どこにでも馴染んでゆけるこぼれ種

矢継ぎ早庶民何度も騙される

一言がささつたままの傷痛む

小走りに黄昏れて行く六十路坂

阪南市 森村美花

メンバーが揃うと美味しくなるお酒

赤ちゃんの澄んだ瞳のテレメール

医療費の負担に気持病んでくる

デパートの弁当買って旅に出る

すき焼の好きな夫の体脂肪

東大阪市 谷口義

呼び水をしなないと脳が働かぬ

横顔はくたびれはてて旅終る

それがしは愛想の悪い生れ付き

ああ言えばこう言う人の下がり眉

価値観の違いお金のことらしい

東大阪市 西村哲夫

檸檬から共に語らう人と居る(名聲主幹を思う)

仏道を見向きもしない政

本命は何があつても胸の中

顔洗ひ別人となるのはおんな

足洗ひ別人とならぬはおとこ

東大阪市 安永春

プラネタリウム輝く星のラブソング

タイムング縁は異なるもの味なもの

初産に姑の鯉こく忘れまい

時効でもこころの傷は癒せない

途中下車出来ぬカルテに睨まれる

東大阪市 米田水昇

福引きで一等となり舞い上がる

笹酒の酒千年の味がする

お洒落してもえたつ心蝶となる

ときめきの火種をおこす冬の朝

膝に穴あけてジーパンさっそうと

東大阪市 北村賢子

始動する春へいっぱいネジを巻く

ネクタイをキリリ エリートゴキも出し

嬉しい日悲しい日にも花を買おう

時折はわき目もふって夫婦なり

たそがれてまだ前向きに生きている

富田林市 池森子

レシピから溢れる父のタマゴやき

本心を一つ見抜いた昼の月

プライドはプライドとして雑魚の群れ

たっぷりの不平不満を言うて寒

営業が下手で熟年離婚など

富田林市 大橋鐘造

リフォームに老いのふところ狙われる

火も風も抱いた記憶のある昔

前例を我が身にさせて子を論す

鍵握る妻に一目置いている

順風の私を試す向い風

寝屋川市 籠島恵子

言訳の口から唾がとんでくる

それぞれにまごの手持っている夫婦

いつまでが新米こめは恥ずかしい

台所梅酒ちびちびやりながら

大根の菜っぱがおいしそうに買う

寝屋川市 富山ルイ子

母植えた三宝柑が今たわわ

母植えたキンカン陽に映え黄金色

大根干す我が家で出来たのを掘って

手間暇を惜しまず手作りが好き

ハッサクを貰う蜂蜜漬けにする

寝屋川市 平松 かすみ

枚方市 海老池 洋

あれこれと公德積んで黄泉の国(義足)

デスマスク心残りがひとつあり

白髪に苦勞が滲むお見送り

大家族耐えて忍んで独りなり

遺された畑一面に梅の花

寝屋川市 太田 とし子

骨肉の争いもする爪を切る

翔んでった部屋に残した子の匂い

寒の水吞めばすつきりする美人

焼もちのふくらむあたり火の加減

積雪に命のばした雪ダルマ

寝屋川市 坂上 高栄

栃東苦節つらぬく十余年

日本人賜杯の重さじーんと来る

床山も額の汗をねぎらわん

臍の穴深く沈んだ体脂肪

改革のテンポ惑わすライブドア

枚方市 寺川 弘一

身の内にときめき沁みる御来光

死ぬ間際まで生きるってこと考える

せめてせめてを押し付けてくる目標値

二次会がなければ参加せぬ会合

梅ひらく初恋に似たときめきで

童謡のムードで伸びるつくしんぼ

大きな手してるが欲のない夫

盲導犬人より信号よく守り

考える時間をくれた風邪の床

暇そうに車庫にたむろの消防車

枚方市 宮川 珠笑

聞いてない言うたの果ては笑い合う

事故起きるたびに専門評論家

初恋に逢えば妻より老けている

急に酒止めておかしゅうなりはった

雪こんこん合格通知まだ来ない

枚方市 丹後屋 肇

虫干しのページに論吉顔を出す

大寒波横なぐりする東経図

露天風呂まさかを演出する雪崩

救急の親に付き添う脅え顔

刺青に見習生が注射打つ

枚方市 森本 節子

湯たんぼが主役になつて二月の夜

警官にまもられ広場で遊ぶ子等

お誘いがあってカレンダー丸つぶく

菜の花のほろ苦さは春の味

あちこちにシールを貼ってひ孫帰る

枚方市 安達 忠央

いつまでも終章のない恋心
下町に吹く風いつもひとくさい
老いてなお捨て切れてない名誉心
妻旅行我が家に集う飲み仲間
どれ着てもおしゃれに見せるいい笑顔

枚方市 二宮 山久

ハイビジョントリノ迫力増す画面
里帰り母は元気な九十三
結婚式若き力をもらう場所
オリンピック世界をつなぐ顔と顔
幸せは妻と二人でつなぐ旅

藤井寺市 高田 美代子

温かくなったら少しガンバロウ
バレンタインもホワイトデーも済んで春
好きだからすこし油断をしてあげる
お手洗いにっこうか長いコマージュナル
強制撤去青いテントに無情な日

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

照明に指輪どれもが競ってる
酔うこともなく甘えるすべ知らず
雨の日のファッションまでも用意して
母からは懺悔も聞いた恋のこと
異国にて旅のつれづれ書く手紙

藤井寺市 楠 昭子

ライバルが笑う迎りにきつと罨
つじつまを合わせたうそがはね返り
くやしさを声に出さぬが音に出し
この傷もこの苦も生きていればこそ
それぞれの愚痴を地蔵は受け止める

藤井寺市 若松 雅枝

嫌な事みんな忘れて春うらら
花便り傘寿も友と翔んでいる
若草の感触愛でる足の裏
友と来て足湯で癒やす花の旅
どん底でオアシスとなる友がいる

藤井寺市 中島 志洋

出会いから弾む二人のセレナーデ
あの時の出会いがあつて今の幸
始めから計算された落し穴
堅物の仮面外して花の宴
お金では買えぬ幸せ噛みしめる

藤井寺市 太田 扶美代

冗談の中にいささか毒がある
体中ネジを弛めて露天風呂
妻を泣かせたとでも小さいプレゼント
シクラメンの赤と乗り切れそう真冬
苦手な人へ嫌な言葉を吐いちゃった

藤井寺市 鈴木 いさお

湯豆腐を奴に替えて春四月
寒い冬よく耐えたねと豌豆褒め
妻に借り多分返せぬままだろう
よく似てる息子可愛く恐ろしく
異常ナシまた酒飲めるこれでよし

守口市 井上 桂 作

教えてるはずが何時しか教えられ
自分との対話に絶えず反省し
だんだんとその気にさせるお仲人
当て字誤字人には言えぬ国語力
見知らぬが目礼交わす山登り

八尾市 高杉 千歩

お得お得とNTTが喧ましい
新聞代払いひと月無事過ぎる
退き際の美学余力のある内に
生きてまたさくらに出会おう要介護
波乱万丈大正の影うすくなる

八尾市 宮崎 シマ子

身を守る刺あり柵雪を越す
小泉さんに弾かれそうな傘寿です
母もその母も一豊の妻でした
働いて出来た手の皺顔のシミ
お先にどうぞ三途の川は貴方から

八尾市 村上 ミツ子

節分は豆撒かないで食べるだけ
株を買うへそくりもなく恙無い
国会を動揺させたコウノトリ
始まるとやっぱり観てしまつトリノ
鏡から少しやせると叱られる

八尾市 吉村 一風

朝の水先ず仏だんにさしあげる
陽を吸った枕たつぷり夢をくれ
八十路ふみやつと自分の顔となる
柿すだれ母の笑顔の出できそう
朝市でやっぱり無駄を買うてくる

八尾市 生嶋 ますみ

好きなどこ伸ばせと孫の背中押す
大雪を降らせて天のヒステリー
昨日のこと捨てたくなつて爪を切る
惚けたならどんなわたしが出てくるか
噂話お好み焼きを食べ残す

八尾市 長谷川 春蘭

持って来て読まぬ書物や日向ぼこ
七草の二つ三つは垣の内
誰彼と道づれになる恵方かな
独りとは淋しきものの雑煮食う
歳なりの顔をすなおに初鏡

八尾市 山本 宏 至

神戸市 山口 美穂

嘘ついた本人とうに忘れてる

のせられて墓穴を掘った勇み足

三世代仲よく暮らす小宇宙

マネキンとの違いがわかる試着室

クラス会嘘と見栄との火花散る

神戸市 山口 光久

まっすぐに歩くと影が指図する

福は内逃げないように守る鬼

手作りのチョコに愛情乗り移る

パレンティン嫁がお酒をくれましたた

素うどんを引き立てているお葱の香

神戸市 木村 貴代子

羞恥心丸薬にして飲ませたい

自立支援言葉だけは美しい

日本を支えた恥の文化消え

持ち上げてけなしてメディア忙しい

捨てられぬあなたと買ったあれやこれ

神戸市 伊勢田 毅

六法の行間ぬった黒い金

チルドレン次のボスはと思案する

パソコンが友で若者すぐ切れる

正面の欠伸を雑魚が見逃さぬ

妻の尾は切ってもすぐに生えてくる

仏壇へ水仙お庭で咲きました

黙祷をしてからはじめる同窓会

健康法次々聞かされすぐ忘れ

物忘れ友と慰め合っている

一周忌母とよく似た四姉妹

相生市 中塚 礎石

八十路坂古びた仮面灰にする

皺一つない奥様で冷たい手

雑炊のうまさに過去を振り返る

認知症のはしりと分かるペン止まる

献体の友の棺は大学へ

芦屋市 黒田 能子

平常心こめかみ動くピクピクと

無になろうとすればするほど無になれず

ロボットが人に優しくしてくれる

椅子浅く掛けて合図を待っている

脱ぎやすいラフな服着て旅カバン

尼崎市 長浜 美籠

続編にあつてはならぬミスキャスト

あの頃はあの頃賽は投げられた

どの顔を見ても一癖あり楽し

一年もこと無く過ぎた鬼は外

肉づきの良い掌だ頼ってみたくなる

尼崎市 松下比ろ志

湯豆腐の湯気ゆらゆらと冬の顔

名画展時空の溝はすぐ埋まる

客同士席譲り合う良い笑顔

事終る未練心に封をする

ゆつくりと吐いて吸うよなわがテンポ

尼崎市 田辺鹿太

一万歩歩けた足にありがとう

気がつくと身内で僕が年長者

一円を落して悔やむ偉い妻

お彼岸を過ぎると水も春の味

人形も歳を取ったか覇気がない

尼崎市 春城 武庫坊

赤い糸縫れず八十路半ば越え

寒椿目を楽しませ地に還る

暖房完備やつと人間とり戻す

朝が来た腹は空いてる調子よし

五輪開幕やつと覚えたまちトリノ

尼崎市 春城 年代

山茶花の垣根に愛がこぼれそう

パレンタインデー少し浮かれて老いふたり

粉雪にもくれん固い蓄して

甘酒もおはぎも作って来たむかし

あの世など無いと思つた頃がある

尼崎市 軸丸勝巳

朝ドラに古里想う国訛り

どこかいなハイハイと行く電子音

眼が悪いのか目薬を注し零す

暖冬に馴染んだ肌を刺す寒気

匂い立つ巨悪に忙し特捜部

尼崎市 林昭三

箱口令出した三役よく喋る

標札を掛けて引越し完了す

解けにくい舐い結びで船眠る

折角の祝辞二十歳の群れ聞かず

余寒など要らぬ越後に春よ来い

伊丹市 山崎君子

アルバムと若返ります冬日和

春ま近さお竹売りの声がする

寒餅届く身内の温み雪降る日

トリノ五輪夢を楽しむ老眼鏡

ブリ大根ほど良く煮えて娘の帰宅

川西市 西内朋月

肩凝つてしょうがおまへんウオームビズ

受信料いることぐらい知っている

映画館せんべいの音うるさすぎ

混浴の入口だけは分けてある

楽しくてやがて侘しい同期会

川西市 米原雪子

友の訃報を木枯らしのように聞く
久し振り抱いた曾孫はずっしりと

寒暖の差忙しかろう温度計

腰すえてトリノ情報待つテレビ

着ぶくれた私を笑う三面鏡

三田市 堀 正和

充電と言つてはコタツ抱いている

アドリブで生きて一本筋がない

敵のない人ばかりで頼りない

ときどきは妻へ仕掛ける負け戦

還暦の子をまだ叱る母がいる

三田市 北野哲男

質問に医者 of 切り札お歳です

黙祷の一分間のあれやこれ

セールスは犬に好かれる人が得

熟れすぎと言われています物忘れ

コンパスで描けないうちの家族の輪

三田市 久保田千代

コーヒーが休め休めと鼻誘う

花の香が散歩の足をひきとめる

闇の中男は風の匂い嗅ぐ

内にある鬼に豆打つ昨日今日

その内に私も祖母になるつもり

西宮市 亀岡哲子

現代アート何やわからんけど楽し

いつの日も同じ歳の差姉妹旅

桃の花娘のなまままの雛飾る

語り継ぐ言葉探してみかん剥く

生きてゆく工夫いろいろあり飽きぬ

西宮市 山本義子

自分史の修正加筆きりがない

姥ですがときめきはまだ忘れてぬ

仮面に馴れほんとの顔は伏せたまま

迷いつつ化粧してますいま暫し

愛だつて日々温度差がございます

西宮市 井上松煙

子離れができワン公と旅つづく

子供より犬猫多く国憂う

格好より着心地で選る歳となり

好奇心老いてもじつとしてくれぬ

成人式振袖に親泣いている

西宮市 牧 潤 富喜子

孫でさえあれは演技と言っている

不器用でいいよころりと変るでない

ほめられて少し居心地わるくなる

猫の声いつも聞こえてくる電話

傘立てにもつたいないが林立す

西宮市 菊池 トミエ

生きてゐる戦争地震耐えて今日
割切れぬ願いを抱いて神参り
迷惑を掛けず老いゆくこの願い
若さつていいなりンゴを丸かじり
梅咲いて玄関少し開けておく

西宮市 秋元 てる

里帰り一番はしゃぐお父さん
残り福ならば僕にも脈がある
物入りと歎いて見せる孫の数
米寿までよくぞ動いてくれる足
水仙の秘密ひとつもない白さ

西宮市 西口 いわゑ

主役の座守り続けているばらよ
こめかみを押さえ怒りを静めてる
何もかも知った笑顔が怖くなる
騒がれて太く短くそれもよし
一言が音符のように心地いい

西宮市 坪井 孝一

容赦なく時流を変えるハイテク化
笑顔の下ちやっかり打算底に秘め
夕焼けがきれいであす今日のこと
コーヒーが飲みたくなつた御堂筋
もうボクを起こしに来ない朝である

西宮市 緒方 美津子

父の忌に語り部となる床柱
秋の雲六十路のように走り抜け
あちこちのでこぼこに春光り出し
離婚するエネルギーまだかくしてる
さすが梅小雪舞つても人を呼ぶ

姫路市 古川 奮水

島の丘水仙香る春の風
押し花の手紙病気を慰める
金婚へ振子時計がとき刻む
天守閣夫婦で登る捻子を巻く
ふる里に土地カン狂いそうな道

兵庫県 大谷 幸次郎

鬼もまた仏の面をつけたがる
一夜明け鬼追うた豆ごみになる
年金を狙うしつこい鬼に豆
大輪の花咲くように笑う女
合格で明るく響く雨の音

奈良市 米田 恭昌

久久の煙草やっぱり旨すぎる
関白もおむつする日がきつと来る
自己過信墓穴を掘つたホリエモン
朝市の釜茹でを待つ鱈場蟹
支笏湖の雪と氷のファンタジー

奈良市 天正千梢

それなりのロマンを抱いてちぎれ雲

雲水の美学托鉢の足の跡

熱爛へひとり合点が多すぎる

人間の掟破って火のだるま

泣きながら叱ってくれた母だった

生駒市 飛永ふりこ

無理をした付けか鼻風邪暴れ出す

久々に桜の知らせご懐妊

メールから孤の影ふっと浮き出てる

本当を耳傾けて突き止める

ほんもののパッションにおうピカソ展

香芝市 大内朝子

ぱっと春急にお洒落がしたくなる

ひとり居に慣れた鏡にある悟り

ワンカップ遊び心に火をつける

人生の道案内が欲しい時

コチョココチョコと春がくすぐる恋ごころ

橿原市 安土理恵

振り切れぬしがらみ抱いて生きるとは

父母の矢印無視をして迷う

体裁はどうあれ全部わたしです

添いとげるつもりあくまでもつもり

とんがってみてもお笑い系である

橿原市 居谷真理子

いそいそと女が仕切るおままごと

ボケぬよう感動しろと言われても

短足でたいした損はしていない

間引き菜の膳貧すれど鈍はせず

君に会う以前のことよ昔とは

大和郡山市 坊農柳弘

無になれるその一瞬にある祈り

咲く時期を知ってる花と語り合う

やさしさに触れる人間だと思ふ

朝の露草木の命そっと抱く

二度焚きの風呂で溺れている夫

奈良県 渡辺富子

逢えばまた心が揺らぐ花の下

紀子様へ男児期待の声高し

箸は右ケータイ左食事中

少しづつ愛を間引いて揺らぐ仲

赤い服こんなにボクをしゃべらせる

和歌山市 牛尾緑良

心豊かに命育む雪の白

リセットで明日が明るくなりました

ぬるま湯へ誘ってくれたのは誰だ

ピエロって私だったのか祝辞

お袋の味芋粥に行きついた

和歌山市 桜井千秀

齒のリフォームで五つ六つは若返る
太巻きずし届く節分隣保班

他人の批判なさる貴方は如何です

節々の痛みも生きている証し

ほいほいと従いてくるのは影ばかり

和歌山市 福本英子

いい加減生きてきたのに医者通い

広辞苑もう手に負えぬ重さです

撒いた豆食べてしまった庭の雪

腹いせに混ぜると納豆よくのびる

金儲けのものけばかり大手振る

和歌山市 川上大輪

回れ右しても何にも変わらない

仕切り直しへため息一つついておく

仕方なく一人で作る晩ご飯

生きるつて結局食べる事なんだ

夫婦だね泣いて笑って喧嘩して

和歌山市 松尾和香

残されたひとりのひと世趣味に凝る

煮凝りに母を偲んで寒の川

食事作り家族の笑顔生きがいに

薬湯に浸る心身リフレッシュ

寒の月湯豆腐熱いひとり酒

和歌山市 細川稚代

暗黙の了解息子の助手席で
きつかけをつかめばとけたわだかまり

十株が百株になる錬金師

独り者同士ではずむ電話口

あちこちの不調誰にも負けません

和歌山市 堀畑靖子

春なのに花粉ガードのマスクして

社会見学と歩いたスラム街

ラッキーも運んでくれた年賀状

いつかまた会おな十年たちました

男とはそんなものやと逃げ腰だ

和歌山市 田中みね

ほつぺたを振り朗報たしかめる

やるじゃんと自分に拍手する知らせ

海鼠よなまこ君はなんともグロテスク

住む世界ちがうと悟る日の釣書

メルヘンの世界を覗く万華鏡

和歌山市 木本朱夏

父さんがハタチのころの武勇伝

母さんがハタチのころの愚痴を聞く

一合の酒に老女の艶話

手折らねば未練を残す花だらう

追伸の一行匂う梅便り

和歌山市 武本 碧

黒猫を抱いても夢二にはなれぬ

介助犬愛は手となり足となり

大安というメニユーがあつて恙ない

頂上に遠い裾野で安らげる

楽勝と見てた兎の或る誤算

和歌山市 玉置 当代

風説の流布うっかりと墓穴掘る

虚と実の狭間で生きる難しさ

夢いっぱい詰めて重たいランドセル

理屈など言わぬあなたの恵比須顔

行く先は年金手帳拝むのみ

和歌山市 宮本 三喜夫

世の中が何か狂うてる怖いこと

みつともないお金で揉めてなすり合い

私欲だし議員失格笑えない

耐震も裏工作が見えかくれ

罪のない子殺める馬鹿な若者が

和歌山市 福井 桂香

夜空見上げると師匠に会える冬銀河

節分の鬼が可愛い虎の服

考えたものだピーナツで鬼は外

ヒラメキが欲しくてココア飲んでいます

手帳には食べたメニユーも書き込んで

和歌山市 山口 三千子

心の籠緩み病と道連れに

キャンバスに一筆入れるまで迷う

ど忘れが重なり不安つきまとう

わたくしが病めば鉢花力無げ

振り向かず未来思考に切り換える

和歌山市 楠見 章子

お久し振りなんてばったり逢いたいな

悪いけど見た目で決める時もある

目が合つて寂しい顔をしてあげる

駆け引きのポーズ楽しい差し向かい

漁り火と星キラキラと会話中

和歌山市 上地 登美代

目標があるから辛さ耐えられる

ど根性の大根になろう私も

花と私語出来る小窓を開けておく

身の内に鬼もいるから頑張れる

バイタリティーあつても痛む五十肩

和歌山市 古久保 和子

和箏笛を開け一面の冬景色

還暦の顔とじっくりにらめっこ

大根を持つと素振りをしたくなる

バス停に冬が溜まっているらしい

綾取りは夫以外の人とする

海南市 堂上泰女

近道をした子がうまく風に乗る
運がいいだから信じる星まわり
絶望を希望に変えてくれた師よ
張りきった若葉マークがかしましい
侘助を活けて閑人呼ぶ茶会

鳥取市 宮脇道子

冬ごもり友の情けも携帯で
裸の顔盛んに見せて老いの面
イライラを掃除機に当て元氣出す
ありがとう口ぐせにして生きるの
少しづつ世を去る準備呆けぬ間に

鳥取市 福西茶子

目覚めたら両手宇宙へ突きあげる
義理通す哲学曲げることほせぬ
二次会も猪口でいただくウーロン茶
老人も払えと控除奪いとる
爪に火を灯して明日も生きてやる

鳥取市 春木圭一郎

ありがとう身近なひとにます言おう
聞き上手うなずき上手まだなれぬ
ともかくも相手の立場考える
時々は駄目な自分をさらけ出す
もう少し大人になろう日本人

鳥取市 田中瞳子

求めれば愛はするりと抜け落ちる
雪投げをする子も居ない冬休み
輝きを見極め母は芽を伸ばす
百均で時には高い物も買う
年金が貰え年寄りくさくなる

鳥取市 吉田弘子

親ごころ名前に託す子の未来
山陰が好きと居座る寒氣団
あれやこれ百円シヨップくすぐられ
一言へ十の苦言が飛ぶ夫
夫より永いえにしの友が逝く

鳥取市 埜寛子

ウォームピズきめてストープ消してみる
合併症物差し違うマチとムラ
良くも悪くも画面いつもの人の
ケータイが鳴るのはいつも交叉点
トシトシと意識し過ぎていいのかも

鳥取市 山本益子

気分転換旅のプランに夜は更ける
古い二人年金で足る暮らし立て
老境のセピア色にはドラマある
恥ずかしがりペルシャ猫ちゃんすぐ隠れ
最高の自信を持って前向きに

鳥取市 福島庸二

春の宵おぼろ月夜にゆらくがけ
満天のきらめく星にメッセージ
カンバイに溢れる思い杯の音
短くてキラリと光るいい祝辞
雨上り歩いて見たい虹の橋

鳥取市 上田俊路

信心には遠い拍手音は好し
もぐらでも木にのぼる夢持つている
転ぶのも上手になってまだ生きる
散歩から徘徊までの老い之道
誕生日八十歳といいきかす

鳥取市 杉本孝男

葉の落ちた庵に男はつり住む
葉桜の季節恋しい春の雪
教育ママに点取り虫の子が育ち
泣いて別れた女が点となる広野
腰痛も加齢と軽くあしらわれ

鳥取市 林露杖

誕生日スパーからのチューリップ
どっこいしょ薄氷跨ぐ裏の路地
星凍てる音の玻璃戸に冴え返る
漫才のようなやりとり老いふたり
古い愛し惚けと正気が聞き合い

鳥取市 田村邦昭

浅知恵でうっかり乗った泥の舟
人生の道には大きな穴もある
幸せが隣の庭に咲いている
名水に生きてる川を愛したい
失敗を経て底力発揮する

鳥取市 鈴木一弘

空き缶を挨拶がわり蹴つ飛ばす
こっそりと逢うつもりだが明るすぎ
次世代のドラマあるから夢がある
潮満ちてドラマの幕が開く月夜
旅帰り母との別れ雨だった

鳥取市 有沢せつ子

返せない恩へ感謝を忘れない
老いの部屋ドライフラワー飾らない
過去の悔い眠らせ前を向き生きる
玄米や麦を食べてるお金持ち
年齢を十歳引いて服を選ぶ

鳥取市 西村黙光

死線越え傘寿の峰へ辿りつき
胃袋も年に一度は掃除する
生命線灸が手厚く修理する
徳利が竹馬の友を連れ帰り
幸せは毎夜女房と酌み交わす

鳥取市 平尾菜美

どんでん返し涙を吞んで決める腹
オイというベルも交えて六十路坂
打ちどころない向日葵の雨しらず
ぶつけ合う裸父子の深い愛
新境地開くあなたと傘の中

鳥取市 富山 檳榔樹

桜花爛漫花の下より鼻の下
匂作りに飛耳長目の精を出す
雛祭り女性上座で美酒を酌む
なごり雪そろそろ春を待つ蕾
高砂や息子は嫁の言うがまま

鳥取市 植田 一京

胸の戸を開けに絵手紙やって来た
説明が過ぎてますます怪しまれ
一呼吸置こうポーズが決まらない
人も花も明るい方へ向きたがり
鳥の来る庭にしたくて木を植える

鳥取市 倉益 一瑠

鳴り物入りの合併熊が出て困る
発芽中枯れ木も恋をするらしい
ふっ切れた迷いさらさら茶漬食う
一杯のスープが解かすわだかまり
封印の口がムズムズしてならぬ

鳥取市 永原昌鼓

保険屋がもしもと脅しかけてくる
人間もふとんも春の日ざし恋う
平均点とれば上出来わが家系
玄関で仮面脱いだりかぶったり
美しい百年生きた皺の顔

鳥取市 武田帆雀

かあちゃんの靴を揃えて機嫌とる
妻よりも肉じゃが旨く煮て済まぬ
お爺ちゃん大好き孫の二枚舌
生まれつき喧嘩が好き甲虫
商い上手になりはった眼鏡屋の奥さん

鳥取市 土橋睦子

J Aも喜寿の祝いとペア茶碗
穏やかな春に芽吹いた梅の鉢
主義主張ゆつくり聞いた春炬燵
物忘れという逃げ道がひとつある
底抜けに笑わせ帰る侘び住まい

鳥取市 夏目 一粹

留守電の息子の声を消さずいる
神様が遊びほけてるような雪
キセルタバコを吸ってみる懐古趣味
日溜まりの野良猫脅し日向ぼこ
つかず離れず喧嘩せず生きている

鳥取市 中村金祥

一発にかける意地なら持つている
氷上のカリスマ嬢に酔っている
明日の風信じて御籤結わえてる
検診値ソフトな声で知らされる
スマイルに救われやる気湧いてくる

鳥取市 近藤佳子

星くずの囁き届く露天風呂
田圃道みな舗装され子も居ない
日本海を見渡す未来見えそうで
雪の日は童謡聞いて冬籠り
男爵がほくほく母の忌が巡り

鳥取市 奥谷彩子

すり硝子ほっこり幸せ温める
生きるよろこび大地に二葉顔を出す
古希にまだ女残して紅をはく
まだ少し生きるつもりのおおよぎ
いい風を選つて翔びたい風見鶏

鳥取市 西川和子

大雪を凌ぎ花ばな咲き競う
春風にどっぷり畑の人になり
ライトアップの城跡の花に誘われる
後れて咲いた花も慌てて散っている
町中をどっぷり酔わす祭り笛

鳥取市 加藤茶人

幸運の女神はいつも横を向く
ハチャメチャな人生だった福笑い
鼻くそが目くそを笑う民主党
時は金半額シール貼るを待つ
賢母ではあるが良妻とは言えず

鳥取市 録沢風花

健在をアピールしたい食事会
宝くじ夢まほろしと消えていた
久し振り冬の陽射しに背を温め
そつとしておくのも深い思いやり
冬ごもりしてもお腹空いてくる

鳥取市 福田登美

幸せな顔が溢れる春の街
老いながらバレンタインの義理を買う
春の花淡く夢見てときめいて
夕焼けに今日のゆとりを感謝する
病院の外で静かに深呼吸

鳥取市 山宮愛恵

ひとりがいい二人が良いと言う勝手
風の音を心のままに聴くひとり
頼む雪に玄関開けず香を焚く
読書三昧ひとりの今日が満たされる
負の思考前に行くから苦勞する

鳥取市 岸 本 宏 章

倉吉市 松 本 よしえ

雪道を行くペンギンの真似をして

銀行の名前寿限無に近くなる

久し振り会って白髪を笑い合い

不揃いの野菜農家は食べている

缶詰の消費期限に油断する

鳥取市 岸 本 孝 子

ブティックへ春の足音聞きに行く

少子化を寂しがつてるお雛さま

見納めと思う雪なら苦にならず

雪ダルマ芽吹く花芽に嫉妬する

髪切ると他人が理由を聞きたがる

倉吉市 山 本 玲 子

小豆雑煮食べて七十有余年

早春賦帽子が脱げぬ猫柳

ビルが建ち里の景色も様変り

たこ焼き屋素通りさせぬ団子鼻

わかめ入荷店主の力強い筆

倉吉市 最 上 和 枝

対策が無いと戸惑う末期癌

ほろ酔えば軍歌十八番のお爺さん

お開きの後で幹事は飲み直す

体脂肪お腹の辺り好きらしい

雪積る灯油の値段かけ上る

髪も梳きデイサービスの車待つ

週三日ばあちゃん達の幼稚園

傷ついた人を慰め過ぎぬよう

地下鉄の入口何となく嫌い

地下街を出て青空にホッとす

倉吉市 淡 路 ゆり子

晴ればれと鏡の奥に居るわたし

高望み次の一步に落し穴

夜通しのラジオが癒す夜が明ける

カーテンを開けてびっくり雪三尺

鮎持つて夫のホームへ急ぐ足

倉吉市 牧 野 芳 光

信号の赤を守って背を伸ばす

鍬振るうたびに地面が息をする

あつさりと負けて夕日が美しい

妻よりも弱いお酒に腹立てる

からし菜の明るさ土手に満ちて春

倉吉市 山 中 康 子

たがやせば母の大地はよく笑う

ため息は不調のきざしだったのか

やせ細る枯木の痛み半分こ

点滴の長さに首が張ってくる

もう少し言いたいところで終う口

倉吉市 猪川 由美子

逆ギレて煙に巻いては世を渡り

鏡見ぬ怠慢祟り急に老け

生鮮モノは一番奥を探し取り

大関へ郷土凶柄の綱贈る

妃を守る殿下の苦惱尽き果てず

倉吉市 米田 幸子

やり残すことがあるのでまだ散れぬ

若くなる努力忘れて居りました

消毒の酒が切れたか荒れている

優等生のポーズ崩せぬままに老い

万能な人でないから温かい

米子市 木村 春枝

雪の下すみれしつかり冬を越し

名残り雪私一人の喫茶店

立春でやっと今年の顔になる

春風に気になり出した身嗜み

一病を抱え傘寿のバースデー

米子市 光井 玲子

未来図は計り知れない霧の中

打明けた内緒話に釘を刺す

ほろ酔えば民謡うたう父が好き

千差万別織るにおれない人模様

事あるごとにやさしい母を恋うている

米子市 青戸 田鶴

生きてゆく今をかばって深呼吸

迷いばかり反省ばかりひと日過ぎ

いい事のあと落とし穴ご用心

笑ったり泣いたり先が見えてこぬ

役立っていると自分に言い聞かす

米子市 野坂 なみ

簡素だが光りつづけたサーヤの婚

斐伊川に流れた箸が神話産む

ジnkスを破って村を出ていった

平和ほけ次つぎ油断のつけがくる

最後には光るわたしのかくし芸

米子市 白根 ふみ

大寒もおだやか妻がよく笑う

オリオン座あなたの方を見えます

こんなにも田圃にカラスほつたらかし

新わかめ緑が透ける淡い海

坪庭に客がとどまる雪景色

米子市 永井 三津子

どっぷりと日が暮れてから見合する

入口が正面だけじゃ無いこの世

三十年甘え忘れた寡婦で生き

ああ日本 人も自然も朽ちて行く

方々で嫌いなお人よく見かけ

鳥取県 鳥羽直市

許す気になってころも晴れてきた
突き放す事も一つの思いやり

決めてからどうだこうだと愚痴こぼす

ありがとうたったの五文字気分変え

まだ解けぬ謎に迷うて生きている

鳥取県 山下節子

輪を組めば全部仲間の顔になる

祝い膳蟹よりやはり鯛がいい

正論を吐いて仲間を外される

仏壇にもしもしもと問いかける

わたし凶ああなたは吉でヤジロペー

鳥取県 谷口次男

鳥離るスクリユーの泡胸を打つ

地の果てのゲームのような戦争だ

ていねいな言葉遣いが持つ毒素

鮮やかに保険に誘う有名人

雪国のハンデイみんな分かるうよ

鳥取県 下田茂登子

己れの分知らぬカラスが先走る

正直は神もなかなか目につかぬ

一発が効いたか嫁が解けてきた

どの辺で一釘打とう狭い奴

泣きごとを笑いに変えて生きて行く

鳥取県 太田幸枝

星の降る夜は詩人にしてくれる
温泉にどっぷりつかり泥おとし

どしゃ降りに相合傘がしつぱりと

鼻葉効いたか風の向き変わる

くず繭できれいな着物母が織る

鳥取県 蔵本悦子

いよいよになれば色気で勝負する

平均値越えて今夜も酒を飲む

半々に鬼と仏が胸に住む

日本がブッシュと肉に裏切られ

牛肉にけじめを付けて魚食う

鳥取県 山本正光

温もりのある忠告が身に沁みる

事故現場ふえてお地藏さんふえる

折り折りの大山絵巻見て欲しい

靖国の思い総理に最敬礼

年ごとに減り続けるクラス会

鳥取県 国森武子

しょうがない八十近いこのわたし

川柳がなかったらもっと落ちこんだ

誰一人不足もいわずくらししてる

三夫婦で十年くらしした日もあった

子と孫と私で六人くらししてる

鳥取県 石谷 美恵子

ちっぽけな意地でけじめがつけられぬ

法に触れ悪のカリスマ裁かれる

飯の世に生きてもしもの悔いばかり

ほろほろと口に広がる春の味

不束な妻のまんまで黄昏れる

鳥取県 福永 ひかり

だんまりがたった一つの意味表示

熟年の離婚ドラマを二人して

イエスマンばかりになった奥の上

この人を置いて死ぬぬと思う愛

渡したら後はゆっくり眠られる

鳥取県 佐伯 やえ

三寒四温柿剪定の手がおどる

おとなりの犬がきらいで相すまぬ

子や孫と命の重さ語り合う

手作りの愛干し大根に干しわかめ

草を生やすな父の哲学守る畑

鳥取県 竹信 照彦

立春の朝ころと豆の音

降る雪に忍耐力を試される

守り役が寒くて困る雪遊び

女ならいいが追うのは孫の尻

雲の上雷走るように鳴る

鳥取県 小谷 はるみ

オレオレと言えなくなった午前様

人生が火の輪くぐると変わるはず

人間のおいを消して闇に棲む

歯止めさえ効かぬ恋路をひた走る

ふる巢には戻れぬ女ひとり生き

鳥取県 盛田 夢路

終わるのが怖くて出来ぬプロポーズ

折り紙で偽装建築まねて見る

青空をまるごと映す水たまり

三寒四温春の匂いに胸おどる

マイルドな言葉を信じ油断する

鳥取県 深田 俱久

傘寿坂押し上げられて迷う日々

駆け巡るご懐妊の報秋津島

三八の豪雪俺は若かった

四月馬鹿俺は一生ばかでした

お受験の疲れの残る一年生

松江市 松本 知恵子

骨なしの魚じゃ出ない底力

水道こども心で踏んでいる

貯蔵する雪の暮しも合つてくる

春が来る高なりシヨパンワルツ曲

派手なこと似合わぬ父の作業服

松江市 安食友子

生き様も活気付いたり沈んだり

へアスタイルさんばらのよう時世だね

天然も人も毒素があるらしい

同窓会今の老醜連れて出る

プライドを嘲るなんて愚人だよ

松江市 三島 崧 丘

無くてよし有ればなお良し昼の酒

ITの世に賢才が墓穴掘る

成功の鍵はどん底から拾う

忙しい人ほど役を抱え込み

飽食に箍もころも弛み出す

松江市 津川 紫 晃

最低の男に惚れた目は確か

老いてなお弾むこの胸確かめる

くやしさを遠い旅路に置き忘れ

につこりが堪忍袋ゆるませる

そんな時猫になり切る術持たず

松江市 川 本 畔

飄飄と詩うが如き声聞近か

掌にとれば檸檬その黄を重くする

堀川に手を振り永遠の別れとは

月冴えて瞬く星を探すなり

室生寺の仏像にあり師の力

松江市 小川 注 湖

もう一杯しじみの汁はよくしゃべる

改革余波惜しまれ蕎麦屋店を閉め

部屋三つ家族三人宇宙持つ

鮭の性何がなんでも川のぼる

同窓会自分ばかりを語る女

松江市 佐野木 み え

やわらかいキャッチボールの手の温み

雪中花備前の壺にあふれさせ

自動ドア少し後れて人みしり

立春の庭に小さなふきのとう

一輪の梅が微笑む春一番

出雲市 岸 桂 子

捨てていい傘だと無理に持たされる

誕生日全く関知せぬ夫婦

土壇場でその人柄が見えて来る

ヘッドホーン自分一人という世界

丸坊主この子野球に賭けるらし

出雲市 多久和 敬 子

遠い日の思い出スキーなつかしい

おじいちゃん孫に好かれて上機嫌

キッチンで十指も弾む子の帰郷

たっぷりの愛を注いで孫の世話

家事手抜き自分で自分責めている

出雲市 園山 多賀子

出雲市 多々納 テル子

白と黒ざわめきもなく和に解ける

私にシルバー席が空けてある

元氣だと電話の中で咳をする

他意はないスリッパ揃える癖がある

人混みに紛れる帽子深くする

出雲市 富田 蘭水

幸せはこの豆ですと年男

酔うほどに桃源郷がはなさない

雪の下春の息吹が歌ってる

大すきな秘密をいつも温めてる

立春に私の乳房うずきだす

出雲市 小豆澤 歌子

枇杷の花あれから重い口になる

泥濘の向こうに砂の道がある

土の中試されている花の種

やがて着る緑の似合う冬木立

深呼吸するたび湧いてくるファイト

出雲市 持田 多輝子

野点の茶情緒にひたる湯の宴

波よけのテトラポッドに四季巡る

さやさやと胸の奥まで風入れる

石見路に世界遺産のある誇り

七転び八起き果せぬ夢を追う

大観の軸で見栄張る床柱

調子よく乗ってしまつた口車

アルバムの島田もうはや五十年

裸木は春を夢見て充電中

バレンタイン見飽きた夫とティータム

出雲市 石倉 美佐子

連れられてついついキーを上げ過ぎる

さっぱりと風呂吹き大根煮ています

人肌のお爛にしましよおほる月

陰になり日向になつてお月様

桜のつぎはなんじゃもんじゃの花になる

出雲市 小白金 房子

手漉き和紙の賞状しかと子等巢立つ

転ばぬように老いた同士の合言葉

ふところの白紙目出度い席に立つ

白菜の太さ抱えて老母戻る

ありがと云えば心も澄んでくる

出雲市 森 茂美

出初め式法被がはらむ初春の風

万歩計つけて凍土の朝をゆく

冬薔薇がやさしく咲いた庭の隅

カメムシがお腹をみせて凍死する

獅子が来る子らのおつむを撫でにくる

出雲市 佐藤 治代

寒いねえそうですねえとすれ違う

丸い背な風に押されてパン屋まで

春謳歌個性豊かな孫五人

雨音のリズムうとうと春の夢

いいではないか残り火少し燃やしても

出雲市 吉岡 きみえ

ひと跨ぎふた跨ぎ春はまだ遠い

雪ずりの音におびえる冬ぼたん

ひとり鍋つつく侘しい音掬う

虚勢張って生きる私に雪が舞う

現実のはざまに嵌める夢の数

出雲市 伊藤 玲子

お互いどうぞどうぞと鉢合せ

やわらかい豆腐誰とも仲がいい

深呼吸ひとつからつと晴れてくる

しずり雪春の匂いを近づける

しるべ通り歩いて夢が遠ざかる

出雲市 小玉 満江

すぐ横になる癖ついて冬炬燵

赤ちゃんを抱かせて貰いチュウをする

安い酒探して歩くマーカー

手を上げて舞いあがり咲くシクラメン

信号はないよ飛んでけシャボン玉

雲南市 毛利 幸

晴着着て二十歳の春を走り出す

雑音が私のリズム狂わせる

ふくよかな匂いが醸す人の味

雑草の強さに学ぶ人生譜

唸り声自分の歌に酔っている

島根県 伊藤 寿美

パロックのCDを聞く風邪三日

目を閉じて見えない音に耳澄ます

ボジョレーヌーボー別れた人と飲んでる

振り袖のカルタは遠い昭和の絵

寒の水汲み置く老母と住んでいる

島根県 榎原 秀子

長電話あなたも退屈してたらし

待つ人が来ない降る雪止んだのに

シクラメン我もわれもと出す蓄

みかんむくテレビの声がお友達

重ね着がすぎたか肩がこつてきた

岡山市 井上 柳五郎

失敗や恥を積んでは歳をとる

気がつけばニートと同じ暮しぶり

手さぐりの自己満足でよくも生き

新聞もラジオも腹の立つニュース

あと十年白寿迎えるかも知れず

倉敷市 撰 喜子

三十路の娘翔んでタプーのない婚期

新聞がまとめて届く過疎に住む

生流転明日はあなたの風に乗る

要領よく家事をこなして趣味の道

物言えば心と体弾みだす

真庭市 福嶋 智恵子

友達がドレスアップで医者通い

折り折りの四季なつかしい丘に佇つ

リフォームで勿体ないが甦る

冷蔵庫勿体ないを詰めている

役所より重宝してるコンビ二へ

真庭市 国米 きくゑ

遂に来た電子メールに桜咲く

ペタンコの靴で出かける母子手帳

かけ声でボンと産まれた初の孫

世渡り下手のため息聞いている柱

歳をとる度のため息増えてくる

美作市 大石 あすなろ

真心がもつれた糸を解きほぐす

孫もペットもすっかり妻が手なずける

恋一途心の踊るドラム打て

耳を伸ばして春の息吹をキャッチする

身の丈にあつた暮して今がある

美作市 山本 玉恵

予定表を組む常連の頭数

花束を抱けど寂しい一人旅

面影が重なり合うて冬から春

生きたくて一つの嘘を抱いたまま

約束ばかり重ねて命足りますか

美作市 小林 妻子

フキワラビ卯月の空は疑わぬ

写経する落ちぬ汚れも抱きながら

スーパで今日もまた会う暇夫婦

寒餅の残り石ではありません

酒煙草止めるとスマートが逃げる

岡山県 福原 悦子

こぼれ種生きる力で芽吹いてる

記念樹に父が残した道しるべ

味噌作り母の話題が長くなる

うす塩に傾く愛を守り抜く

農を誇る父の十指が温かい

竹原市 正畑 半覚

ヒマラヤの尾根が笑つたのは夜明け(院展に酔う二句)

十字架の並ぶ数だけ神が立つ

雪山に落書きをしたのは神だ

僧侶十人おなじ表情する不思議

夜桜に逢つた雷にも逢つた

竹原市 時 広 一 路

汗も涙も溶かせば青い空となる
ピンと背を伸ばすと心ついてくる
ダイエツトする気は無くして九キ口減
玉手箱開けても困らない髪だ
肩凝らぬ代りか膝に愚図られる

竹原市 森 井 菁 居

代役へ重い荷物がのしかかり
頼まれてようことわらぬお人良し
節分の巻きずしを買う列の中
おだてには乗らず一日無事に暮れ
巻き寿司を買い開運を信じ切る

竹原市 岩 本 笑 子

砂時計命すり抜けて行くよ
誰が押したのか命のストップウォッチ
菜の花菜の花原風景の中にいる
雪よりも白く白サギ飛び立ちぬ
トリノから日本の春はまだ来ない

竹原市 石 原 淑 子

愉しみの和菓子季節をつれて来る
泪涸れ笑うて生きる外はない
賽銭を忘れ句碑だけ拝み来る
三寒四温木瓜の苔を膨らます
春よ来い大地にしがみ付く齋

広島県 福 島 万 年

生きんかな一日一句白無窮花
花吹雪風に恋して追って行く
ロボットのような声出すカウンター
怖いなあ酒がだんだん旨くなる
お花見も六甲おろしでお開きに

美祿市 安 平 次 弘 道

すぐ発火するからお世辞止してくれ
終止符を打っていたのは霊柩車
毒舌を許せば便りどっと来る
寸劇が終り微熱がやつと引き
颯爽と飛び立つ鳥にある別れ

宇部市 平 田 実 男

姿見へ亡父そっくりの僕が居る
遣わないお金石ころにも劣る
平均寿命まで十年を切りました
鐘ひとつのほうを受けてるのど自慢
七坂を越えてきました縄電車

熊本市 永 田 俊 子

大正は遠く五欲の鬼が増え
やさしい言葉に身構える悲しさ
知らぬが仏株の世界の怖さなど
旅の終り風が身軽にしてくれた
バスに乗りおくれる私はナツメ口派

熊本県 岩切康子

気になる傷早目はやめの医者通い
草粥へ地を這うなずな剥ぎ取りぬ
ハイキング下見の風が身に染みる
ほっとして酒呑み交わす夕の膳
昇格の道路良くなり事故増えた

熊本県 高野宵草

風寒し叱ってくれた畏友逝く
美味かった余韻の土産箸袋
人という形いつまで共白髪
パジャマの香染み込んでいる日記帳
進学祝い竹の子のごと孫育ち

唐津市 久保正剣

一本の絆宅配便が行く
老眼の辞書カタカナに遅れまい
焦点をずらすピカソを見た日から
不揃いの歩幅で今日を生きていく
潰された母思春期の匂い

唐津市 宗水笑

靖国をゆずらぬ総理気性です
食材は里を援ける地産物
寿命には関与をしない神仏
個人投資暗雲たれる株シヨック
美人より婚期の早い並みの人

唐津市 井上勝視

老妻へ感謝百句でもまだ足りぬ
老いてゆく妻に反論しなくなる
タフな妻家事交際にこまねずみ
外食に妻をねぎらう年金日
庇い合い夢追うている喜寿傘寿

唐津市 山口高明

電卓に頼りお脳が退化する
おとこ気が邪魔して何時も損ざされ
体力が無いと出来ない外科の医者
盲愛の母が子供を駄目にする
竹の子の味見は猪がしてくれる

唐津市 坂本蜂朗

孫が増え年金心細くなる
ご先祖の棚田に子等が背を向ける
早過ぎる月日が古稀を通過する
仲間から外され本の虫になる
仲間受けいつも気になる自己嫌悪

唐津市 樋口輝夫

生々流転南無阿弥陀仏阿弥陀仏
日帰りのツアー仕上げは屋台酒
回収車うちの秘密も放り込み
鮎と鞭難かしかったさじ加減
家出とはひとに言えない子の巣立ち

(市丸晴翠さんの句は55頁に掲載)

川柳塔の

川柳讃歌 ⑬

木津川

計

義理で行く拜儀は目立つ場所であつた

山本正光

褒めた話ではありませんが、人情の機微を穿ちました。どなたの句でしたか、「早よ行かな消えてしまふと火事見舞」を思い出させてパフォーマンスとしての義理と、真底相手を思う本心との違いを鮮明にしてくださいました。昔の歌にありましたね、「汽車の窓から手を握り／送つてくれる人よりも／ホームの陰で泣いていた／可愛いあの娘が目につぶ」であります。

税務署を恐がるうちは儲けてる

村上玄也

赤字まみれの経営に何の恐れることがありません。もう矢でも鉄砲でも持つてこい、という心境です。そんな赤字経営からも、重箱の隅をはじくるようにして税務署は取り立てますから恐いのです。

そう言えば「税務署と聞いて蠅取紙を踏み」

〔吾郷玲人〕、今は昔の慌てふためきがありました。まして何がしかの儲けがあれば玄也さんの言う通りです。

絶滅の危機に瀕してきた預金

平田実男

「中の中」が減り、「中の下」が増えています。『下流社会』はベストセラー八五万部に達しました。日本人の高い貯蓄率一四、五％にアメリカ人は驚き続けましたが、それも一〇年ほど前まで。いまや四％に激減してアメリカ人並みになりました。既に四軒に一軒は無貯金です。「絶滅の危機」が急迫しています。それでも四五％もの国民が小泉内閣を支持して激励するのです。もつと頑張れ、しつかりやれ、に何をか言わんやであります。

出ていけの権利は妻も持っている

小野 旬多留

専業主婦でも家事労働は立派な労働です。まして共働き当り前の時代です。「出ていけ」は妻からも発せられるのです。

団塊の世代が定年を迎える、二〇〇七年問題のもう一つは、その年から夫の年金の半分を妻がもらえるようになることです。増え続ける熟年離婚でしたが、一昨年は五％減少、昨年はさらに減ったといわれます。無気味に

様子を窺う妻、愕然とする夫という構図が来年から地上に広がります。嗚呼。

平安の百人に会うかるた取り

山川 日出子

あらざらむこの世の外の思ひ出に

今ひとたびの逢うこともがな(和泉式部)

訳もなく覚えた歌の数々でしたが、いまその意味がよく分るのです。分る人には放送作家で言語遊戯に造詣の深い織田正吉さん(神戸市在住)がいて、百人一首は隠岐へ流された「後鳥羽上皇の呪詛を恐れ、藤原定家が鎮魂の思いを秘めた歌集」であり、式子内親王への「秘められた恋」をも散りばめてもいると『百人一首の謎』(講談社現代新書)で明らかにされたのです。百首を縦横に並べ、実証した力作に学会は驚嘆しました。日出子さん、隠されたメッセージとは意外でしたかね。

あの頃の夢は下絵のままに古い

富田美義

「下絵のままに古い」が悲しく、聞き馴れない表現の切なさに感心するのです。前向きな人は今日が一番若いと思え、後ろ向きな人は今日が一番寄りとりえます。美義さん、「あの頃の夢」を、「これからの夢」に転換させれば、新しい下絵が描けますよ。

(立命館大学教授・「上方芸能」誌代表)

自選集

恒松町紅

西出楓葉

欲ばった願いはないが息災で
黙ってはいない頑固と意地つ張り
人間もおかしくなった温暖化
自慢するものが一つはある過疎地
海の幸地消で届くチルド便

遠山可住

仁部四郎

水道管が凍りロシアの空にらむ
合併の町で風味が薄うなり
税務署に表彰される縁がない
天下り渋滞のない道がある
八十の夢にピンクが舞うて春

土橋 螢

波多野 五楽庵

仲よしをしようか月がまんまるい
昭和史の人間魚雷生き残り
白骨の章におやじの汗の跡
日輪に最敬礼の誕生日
死にざまを教えて花は散り急ぐ

わが家には隠し物する神在わす
日当りを辿りながらのウォーキング
上げ膳に据え膳旅はやめられぬ
ティールーム油断も隙もある人と
ボールペンの芯の程度の意地は持つ
先生の嘘ほめられている平和
すぐばれる嘘が家庭の第九条
新社長マル秘の嘘を守り抜き
そんなはずそれがあるから国の嘘
歴史家も巨大な嘘の罫に落ち
篠笛を聞かす人としてなき雪よ
機織りの音が静かな冬の絹
鬱の子が突然躁になる小雪
さか夢にしばしたじろく淡雪草
繭を吐き春の模様になってゆく

芳地狸村

お隣の庭はゴルフの練習場

軒下を彩でかざった植木だな

三振をバタバタとつて負けている

鼻歌の虎造がいる露天風呂

釣り上げた真鯛をにらむバスの中

宮口笛生

吹雪する夜でカニ鍋煮えてくる

四捨五入無しで一円玉が要り

人の道まともに歩くオイチニイ

知らぬ間に辿り着いてる八十路坂

きつと神おわす拍手よく響き

宮西弥生

日々紡ぐいのちを燃やすみつをの書

やさしさのふとんだりに洗う墓

しあわせを紡ぐかたちで鍋かこむ

北向きの地蔵ほっこり花吹雪

大阪のせつかち狂う高瀬川

森下愛論

幸せな小さい愛の芽を育む

美しく老いたく願う厚化粧

凍る冬わたしも本も眠らせる

落ち椿数えて淋しい冬深む

折れ枝の花しおらしく咲き残る

八木千代

渡りながら橋の向こうに目を凝らす

橋の向こうに視線の強い影法師

吊橋のころの若さよ君の背よ

思い出を提げて渡ろう長い橋

からくりの橋もこの世に二つ三つ

八十田洞庵

愛枯れて能登への旅愁肌寒く

小悪魔に女らしさも見える夜

相聞にさまよいくぐる繩のれん

太古にもロマンがあつた埴輪の目

香水は女の嘘を知っている

阿川洋々

君のハートに掛ける魔法が見当らぬ

履歴書が欠伸している不景気よ

未完の夢あるからあの世まだ行かん

心の眼開くと君の嘘が見え

君想う胸が何だか焦げくさい

阿萬萬的

百歳までまだまだ途中の八十九

見え透いた自分に傷をつけ

言葉尻掴みこせこせ妻が言う

突き放されやっぱり未練捨てきれず

高望み捨ててゆっくり風を待つ

石川 侃流洞

御先祖様今朝はチンした御仏飯
ボタンキユーすまぬよく効く薬です
一円が合わずラーメン伸びたまま
着ぶかれて私の散歩近回り
顔色を読んで切り出す金のこと

板尾 岳人

青春をしますサクラまだ蕾
鳩尾にあなたと棲んでいるサクラ
今年またあなたに逢えるサクラ咲く
水盤に母はサクラを一葉二葉
かすみ草サクラ包んで病んでいる

奥田 みつ子

桜咲く師の足跡を賞でること
花は散る誰も知らない持ち時間
それぞれの生きた証を彫った顔
失くしたのもう数えないもう追わぬ
旅半ばまだまだしたいことがある

河井 庸佑

頂上で意外な風に耐えている
選ぶのに神様悩む絵馬並ぶ
誤解だと分かって増した親密さ
遠来の友と語るに酒が要る
花時計喜怒哀楽を垣間見る

木村 あきら

檜山の道を彩どる山桜
善隣友好握ったこの手はなすまい
夕茜踊って帰るランドセル
西風に乗って黄砂が降ってくる
小鳥たち訪ねてくれるミニ庭園

黒川 紫香

お隣の患者の話面白い
入院がつづき楽しいゆめつきる
退院がわからず日々をもてあます
退院をしたら食べに行くとき書く
リハビリも済んで静かにふりかえる

小島 蘭幸

顔合わせやがて大きな輪となりぬ
いい顔だ招待状を書いている
婚約指輪キラリ涙になるのです
ふたりのうたのんびりゆっくりがいいね
花吹雪ふたりの一歩確と見た

小西 雄々

待ちわびた春の序曲を乱す雪
血圧は上がる弥生の牡丹雪
幸せを狂わす鬼がいて困る
選挙戦近くになると同期会
残り火を信じ花びら風に舞う

小林 由多香

付き合いが良すぎではやり風邪もらい
鬼ババは居るが鬼ジジなど居ない
しっかりと貯めてるらしい顔の艶
宝くじ買って正夢期待する
死ぬまではずっと夫婦で居るつもり

斉藤 姦

直球だけ投げてた頃が懐かしい
手作りの器いのちの音がする
羽子板の音とんとんとい姉妹
痛快な一日だったスキーツアー
鳩笛が聴こえる街の吹雪く窓

塩満 敏

パソコンに遊ばれている古希男
入院の妻から遠隔操作されてます
論文をパソコンで書く孫娘
九条を世界遺産にさせましょう
路郎師の著作を吟味しませんか

新家 完司

靱帯損傷という天罰を賜りぬ
初めてのギブスどうだと見せ回る
ノミ虱ダニが蠢くギブスの奥
気が狂いそうなギブスが壊れない
あきらめてギブス引きずり飲みに出る

田中正坊

犬は二度 人間三度めしを食う
にんげんの生きざま描く五七五
人に人格 国に品格ありと言う
死ぬことがそうこわくない余命表
恥かしい過去を背負って生きている

玉置 重人

都市砂漠ほっかり深い闇がある
ストレスを消す妙薬の師の句集
妻の目に私の所作がどんくさい
食欲と秤にかけるダイエツト
蟹チリが呼んでる戦友からの便り



(つづき)

唐津市 市丸 晴 翠

三日目に叱られに出る冬の庭
疎開地で便りを書いたりんご箱
カネカネと日本列島鎗が浮く
老人会資格できたと誘われる
見つめられ埋み火少しずつ燃える

水煙抄

板尾岳人選

和歌山市 たむら あきこ

春というあかるいほうにある磁石
二十四時あしたの絵の具溶いている
目を閉じて手を繋いでる甘い闇
駆け引きをするから恋が痩せてくる
ラップして壊れぬように恋ごろろ
ちっぽけなわたしを開くかわやなぎ

神戸市 両川 無限

実家から生活保護を受けている
天皇もきつと胃薬飲んでいる
九条に火の輪くぐらせてはならぬ
手の内に握りしめてる明日の地図
思い出のどこを切っても母がいる
けじめなどないコンビニの二十五時

府中市 藤岡 ヒデコ

二拍二礼しばし煩惱姿消す
体調を教えてくれる酒の味
モーニングコーヒーサア頑張ろうへ点火する

雑草は春を感じるのが早い

フランス料理作れないので食べに行く
ゆきづまる話を急かす湯がたぎる

羽曳野市 森下 一知

手ぐすねを引いてチャンスに恵まれず
鬆の入る頭にそそぐ力水

おふくろの味は苦楽が煮込まれる
冬帽子人の噂を温める

縁側の小春日和が骨を抜く
宅配の蓋盛り上がり里が着く

八尾市 田中 トシエ

ときめきの冷めないうちに切符買う

ロボットに余命の糸を操られ
飲み込みは速いが消化遅い人

サヨナラの語尾玄関の戸に挟み
ほめられた花は自由に縛られる

売り言葉変化球で打ち返し

東かがわ市 赤澤 貞月

高知市 近森 功

年金の枠でどうにか生きてます
ダイエツト膝に悲鳴をあげられて
温もりのある一言で夢が持て
嬉しい事があったか笑みがこぼれてる
柿の木をちよつと威して実をねだる

香南市 桑名 孝雄

禁酒禁煙楷書で書いた診断書
怒鳴り合う健康法も取り入れる
頭の悪さボケと混同するでない
兎小屋優雅な犬がおわします
ヘソクリの元祖千代女のご登場

今治市 塩路 よしみ

あと戻り出来ない今日へ燃えている
平凡なしあわせ色を抱いている
人間が好きで指切りしてしまふ
一日のプランないまま虹を追う
陽の当る処たしかな愛がある

今治市 渡邊 伊津志

楽しみは疚しい心消えてから
言いたくはないがと小言的を突く
自己愛の強さ気付かぬ赤い薔薇
画廊にて心の酸素補給中
笑うのは葉朝昼晩励み

こぼれ種知っていたのか春彼岸
百円のみくじで今日の運を買い
ハードルを倒してやつと歳を知り
ダイヤ婚認知症ではあるけれど
ペランダに自家菜園の鉢一つ

東京都 長谷川 康子

然り気なく夫婦で呼吸合わせてる
やれやれと安楽椅子の猫になる
定年後くわしくなったワイドショー
魚さばき大事にされるお父さん
辛党のくせに大福餅も好き

東京都 やまぐち 珠美

秘めごとを風より冷えた過去にする
罵りを受けると石になる腫
手を入れてごらんポッケは無量大
残雪よ汚れは悲しみの証し
待つことを止めると腹が減っている

昭島市 野口 忠

よく笑いよく泣く子等はよく育つ
取り敢えず答え求めて一人旅
医者通い続いて財布風邪を引き
生きているマニアル通りではないが
終点が分らないから迷う道

国分寺市 野崎 勝

横浜市 金 森 徳 三

孫の絵と名画並べて掛けてある

一坪の庭も雑草見逃さず

定年後ひねもす碁盤眺めてる

連絡はせぬが時々想う友

読めもせず良さもわからぬ書展観る

八王子市 佐藤 リツ

せせらぎを聴くと故郷目に浮かぶ

寒の入り一足飛びに春よ来い

ダンベルに再挑戦の冬籠り

亡夫にも大吟醸を吞ませたい

父さんに追いつけそうだ背伸びする

横浜市 巖 田 かず枝

良薬を楽譜に載せてモーツアルト

こうのとりの億人に笑み与え

難しい事は言わない人が好き

寒と黒付くと体に良いらしい

言論の自由の中にあるマナー

横浜市 布 山 嘉 信

金儲け偽装のつけが高くつき

天神の絵馬すべって頭垂れ

外国の力士に話題攫われる

改革が進んで暮らし悪くなり

風通し人事異動の理由にされ

靖国が踏絵にされる歴史観

老人が消され無念の控除欄

年金の脛をかじって無駄遣い

台所聞いて欲しそな独り言

孫たちにうまくのせられ四月ばか

横浜市 長 島 亜希子

悪筆も絵手紙にして喜ばれ

株売った後で違法を知らされる

歳のせい言えずに医者はただ笑う

髪染めずいようと決めて迷ってる

自分で治しなさいと薬出さぬ医者

横浜市 川 島 良 子

人形に生命吹き込む雛飾り

風邪でない待合室で風邪もらう

ビギナーというから油断してしまふ

一歩二歩立った歩いた初節句

遊ばれていたのはボクの方らしい

佐渡市 高 野 不 二

国債まで出してイラクを応援し

使わないテレカ財布をふさいでる

雑巾は買って来ました若夫婦

カード入れ診察券も仲間入り

主治医には一合位と言うて置く

高岡市 青井はつえ

戦争の破片と残る父の骨

老人会わが家も増えてゆく平和

ついて来いと言ったあなたがついて来る

信じてはもらえぬ過去の人見知り

心配な脳を訓練するクイズ

日立市 加藤権悟

居酒屋の噂通りになる人事

のみこんで弱者三本締めとなる

相聞の鶴は華麗なまでに舞い

雑学に強い男のループタイ

嗚呼平和さくら吹雪を見ていたり

京都市 清水英旺

熱いミルク飲んで心を温める

春を待つ気持は花に負けぬほど

シクラメンの鉢ある隅があたたかい

蓄一つ風そよと春遠からじ

豆腐屋の湯気の向こうはあたたかい

京都市 西村益子

ほどほどに育ってくれた子に感謝

帰宅後に気付くチャックの開いたまま

今月も書き込む予定ある手帳

イエスノーその場で決めて悔いている

気がつけば最後まで見たサスペンス

京都市 三宅満子

粕汁でほろ酔いになる下戸二人

父さんも出たがっている娘の電話

指の節働きぶりを主張する

厳寒に猫から暖をもらつてる

立春にとどめ刺すよに雪が降る

浜松市 杉浦恵夢

コーヒーも海馬に鞭をあてられず

赤い糸の末路隣の高いびき

屋根裏のねずみが軍靴響かせる

初喧嘩素直にごめんねが言えた

魚捌く海から遠いこの街で

犬山市 金子美千代

夫にも時々お世辞言っておく

親切な予報洗濯せよと言う

カラフルな弁当愛も見栄も盛り

陽の入る部屋転々と灯油高

義理だつてまんざらでないチョコを見せ

犬山市 関本かつ子

身構えて深い帽子とすれ違い

かといって今更言えぬ貸した金

おいお茶にほしいを付けた定年後

落ち込みの心に浸みるアベマリア

用心をしてもやっぱり聞き上手

犬山市 吉田 幸子

睦まじい夫婦まわりに春届け
今頃に父の背を知る峠道

大阪府 森田 明子

丸い背たたいて梅の香り愛で

厳寒に耐えて旨みを増した葱

長生きへおしゅれ楽しむ姫鏡

大阪市 三浦 千津子

志半ばここから正念場

言い勝つて真深くかぶる冬帽子

自画像に少し彩足す春立つ日

心機一転明日という日へ脱皮する

気のきいたジョークが軽くする空気

大阪市 中井 萌

大声の割に弱気な事を言う

早口の嘘に気付かぬ振りをする

いつの日も妻は味方と買いかぶり

だんまりの夫婦におかき割れる音

あてにした分だけ神の肩すかし

大阪市 吉田 富美

母さんが好んだ京の五色豆

猫抱いてつい口ずさむ早春賦

戦は嫌です春の花愛す

人参を桜に切つて娘の料理

愛された父の忌が来る花が咲く

菜の花の写真香りにむせている

名残雪くしゃみしているクロッカス

軽やかに少女脱皮を繰り返す

削つても私無限の多角形

紅茶葉でブルーな心すみれ色

大阪市 伏見 雅明

家計簿が二人目の子を思案させ

母の日に鉛筆書きの肩たたき

四本目でやつと本心顔に出る

歳とも鏡と話す時間増え

まんが読み固い頭を解きほぐす

大阪市 寺井 弘子

別腹のケーキ気になる皮下脂肪

食べるだけ食べてから言うダイエツト

太っ腹言われ今夜も奢らされ

手を握るだけの見舞が温かい

有り過ぎて揉め事増やす遺産分け

大阪市 尾崎 黄紅

傘寿過ぎてても税務署が従いてくる

結び目のゆるむことなく愚夫愚妻

車座という人生を続けたい

人間は鬼やと鬼に言われそう

彼岸へはうんと道草しています

大阪市 福岡末吉

偲ぶれば卯の花ずしを愛でし母
偲ぶれば手向ける四季の花だより

偲ぶれば母の決断いまに活き

偲ぶれば凍たる母の身のこなし

偲ぶれば母と語らう糸でんわ

池田市 北出北朗

ポケットに小銭ちらちら冬ざれる

初ツバメ春の空気を横に切り

道草を食ってヒバリの家族愛

春風の気まぐれ恋の罪作り

ジューパンの破れを覗く春の風

池田市 上嶋幸雀

春立つ日熱爛やはり手放せず

立春へ肩の力を抜いてみる

父さんもかぶりがかった福の面

合格のお札参りに弾む靴

持ち上げてドスンと落とすマスメディア

泉佐野市 備後三代子

ふりむけば永く短いダイヤ婚

三日月に心の影を覗かれる

小庭にも淡墨いろの雪のかげ

あれこれと手元に寄せる老いの癖

落ちつばき蹲踞に浮く第二章

泉佐野市 稲葉洋

才覚に濡れ汚れた練金師
ぎりぎりの潮目想定外の堺

強がりには弱いわが身の虚飾だろ

重ね着を脱いで季節の身のこなし

ヒトだけが季節を無理に曲げている

河内長野市 木太久 正一

八十の重み感じぬ誕生日

職退いて趣味に遊んで二十年

老い生きて気になる本の大往生

順送り男黙って仕事する

正子逝きミカンの花が泣きました

岸和田市 坂口英雄

勘のよい鬼節分にもう居ない

ちよっとした気遣い心和む歳

はよ来いと春を待つてるランドセル

冬眠の蟻を叩いた豆の音

年金に引き算つづく老いの鬱

岸和田市 中岡香代

歯磨きはこれも一つの金儲け

子宝に恵まれ家計大赤字

持ち主を問わずきれいな花が咲き

一人より群がった子の恐怖感

上辺だけ詫びてキョロキョロする目玉

堺市 大久保 伸子

高槻市 佐甲 昭二

川に散る花の行方はだれ知らず
人間は寂しがりやで群れたがる
こだわりを少し捨てると生き易い
春なのに寒い話が多すぎる

穢すまい地球は青く光つてる

堺市 羽田野 洋介

大根とそばと豆とで卒寿越え

長話売った油を買い戻し

この先は急ぐことなし花暦

手短に済まなくなつた酔い心地

短めの挨拶望む方がムリ

吹田市 早 泉 早 人

春近し背筋だんだん伸びてくる

老いてなおときめき貰う美女が居る

自分流神も仏も無い暮し

品格もグレイゾーンも無い暮し

宿帳に偽名を記しかくれんば

高槻市 安 田 忠 子

早春の嬉し恥ずかし無料パス

夢千代の足湯に浸りえびす顔

花柄が少女にさせた旅の宿

たつぷりと今年一年楽しもう

結婚の通知をくれた古希の人

神からの息災というお年玉

もう母の小言が聞けぬ里帰り

鮮やかにまさかの人が幕を引く

雲ひとつ無くて言い訳出来ぬ空

輪の中に犬が家族の顔でいる

寝屋川市 北田 ただよし

春の海のたりと人に語りだす

握手して言い訳したくなる右手

泥んこで遊びがしたい内裏糺

道草ばかりして迷路抜けられぬ

エピソードすでに余白はあけてある

羽曳野市 永 田 章 司

黙黙とほやきも言わず立飲み屋

司馬遼をナビに街道ひとり旅

諭吉さんすぐに家出のわが財布

定年前夫婦喧嘩は自制する

折れた鼻捨て場に困る後始末

羽曳野市 吉 村 久仁雄

明日への思案知恵熱下がらない

本心は亡母のにぎりを恋うグルメ

胸に棲む弁慶妻に見透かされ

幕引きをさすと夕陽に逆らえず

真つ当に生きて耐えぬく後ろ指

枚方市 伊達郁夫

雑草も冬眠をする知恵をもつ
この道は前にも過ぎた迷い道
優しさが誤解の雪を解かして
雪見酒せぬかと謎をかけられる
約束の指の疼きを抱いて寝る

藤井寺市 伊藤アヤ子

仮面脱ぎ自分になれる仕舞い風呂
さんかんも梅と競って色をつけ
逝つた人 生れくる人みな浮世
紅梅が氷雨に打たれ春を待つ
ひとすじに生き抜く事の難しさ

八尾市 田邊浩三

三本でやめりゃよかつた六本目
埋め合わせうまい男の落し穴
将来は介護ロボット待ってます
あいさつも駄目と教える通学路
あの娘とは男結びにしておこう

八尾市 西川義明

臓器移植あなたの命誓います
増税に狙われている酒煙草
医者帰り土産のように薬さげ
後悔はあの日告白せぬ別れ
誓います妻を一途に愛してる

八尾市 赤木妙子

捨て所なくて汚点を持て余す
溜め息をつくより次の風を待つ
句読点打てば透明になる絆
音もなく埋めて牙むく雪の精
ぴつたりと思つてしまふ試着室

大阪府 神野千恵子

お開きと言われてからの長つ尻
着飾つた妻でおしどり夫婦です
金平糖さらさら光る味がした
日溜りを捜し続ける冬葵
厄除けの御札が売れる兜町

大阪府 高木道子

雲を抱き天は無情に雪放つ
ようように寒さこらえて梅一輪
聞き流す耳に木枯らし吹きすさぶ
早春賦寄らば大樹と風の私語
かみ合わせぬ会話疲れや虎落笛

大阪府 阪井智之

午前さま三つ指ついて迎えられ
言いすぎて心の中で手を合わす
情けない消え入る声で妻に愚痴
いい娘だななんとかしたい息子の嫁に
千語より母の涙が身に沁みる

神戸市 田中 章子

大地から春の歓び聞く素足
外は雨アップテンポの曲に変え
挫折から逆転もある夢つなく
とりかぶと野にある時は美しい
倭の国の男の美学羽織裏

神戸市 山田 婦美子

古日記涙滲んだ字を拾う
日が経てば笑い話ですむ苦勞
去った日は時が浄化をしてくれる
眼鏡かけ別の私がかここにいる
やりきれぬ心満たしてくれる酒

相生市 村木 信子

大正のハートへ尺貫法が生き
しきたりのほどけぬままの結び帯
粉飾の砦を崩す針の穴
肚割って話そう二人だけのもの
お茶会へ母の自負抱く座りだこ

尼崎市 小池 幸子

寒空の焚火に集う幼き日
数知れぬ絵馬の願いは叶うのか
冬眠で冬を越したいこの寒さ
老いたより年重ねたという誇り
山椿ポトリと落ちて冬最中

尼崎市 河津 正治

デッサンに絵筆走らす飾り窓
絵心が筆の歩みを急ぎ立てる
自画像に走る絵筆の匙加減
妬心なお色鉛筆を削りすぎ
彩を添え形見替りの毬弾む

三田市 阪本 藤朗

病人を心配しつつメロン食べ
頃合の冬を天地に頼みたい
ねんねこの温もり欲しいベビーカー
鍋奉行箸でみんなに指図する
岡惚れの言葉を知らぬストーカー

西宮市 片山 忠

私を誉めてやりたい過去さがす
好きだった人の握手に怖気づく
妻でない女が僕を慰める
今日もまた妻を勝たせて仲直り
残された刻を貴女に使いたい

西脇市 七反田 順子

喝采は稽古一途の舞台裏
自己保身そんな翼は捨てました
太郎冠者そろそろ歩む薪能
ダイエットのつもりききめのない散歩
風見どりという夫婦で仲が良い

兵庫県 安達 厚

泥棒も二人と知らぬゴミの量
八十路坂米寿卒寿の福が待つ
唯一の贅沢というマツサージ
ふえるのは歳と葉とどっこいしょ
道草も出来なくなつたランドセル

奈良市 尾畑 なを江

猫と娘に回転寿司の持ち帰り
美しい嘘にひび割れ透けて見え
何くれと心惑わす大輪花
羽衣の松に財布を忘れてくる
子は親を親はその親越えてゆく

奈良市 矢野 良一

今日もまた偽装偽計のワイドショー
御懐妊4点セットを吹き飛ばす
庭下駄が二の字刻んだ雪の朝
梅一輪春はそこまで散歩道
クラブより居心地の良い縄のれん

奈良市 乾 春雄

皆勤賞休みたい日もあつた靴
散る美学知らずに咲いている造花
指切りにゆれるトレモロ治まらぬ
くすりより効いた寄せ書き抱いている
消しゴムは生みの苦しみ知っている

和歌山市 柏原 夕胡

白い旗振つて油断をさせておく
ていねいな言葉の裏にある邪心
楽をして儲かる仕事ならします
烙印を押されてもお翔ぶつもり
生と死を見つめて星に近くなる

和歌山市 坂部 かずみ

湯タンポを抱いて聞こえる波の音
水炊きも熱爛が味付けをする
喜びと悲しみメール忍び込む
二センチでニュースになつた雪景色
愛想が悪く犬にも吠えられる

和歌山市 土屋 起世子

予約した幸せ来ない冬の駅
北風に乗つて噂が先にゆく
鬼の背がぼつと明るい冬が去る
握手した美し過ぎる手に微罪
肩書を外せば連れ糸も解け

和歌山市 寒川 武

全権を妻に譲つてから黒字
表札が活気のあつた日を喋る
パソコンよ必需品にはならないで
税務署へは疲れた服と靴にする
一センチ雪が積つて大はしゃぎ

和歌山市 山田 侃太

タイムカード破ると僕を消せませうか
頂上をめざす迷路を知つてたか
青春が舞つてる手話のホーム越し
デパ地下で魔法にかかる人だから
アリバイがないからここを動けない

和歌山市 田中 すす

深い息時々吐いて蘇生する
やるだけのことはやつたと自負がある
友だちの一人なくした月の冴え
さようならの言葉にいつも躓いて
諦めるまでの道程まだ遠い

和歌山県 木村 徑子

女独り明るいうちにブーメラン
元氣出す薬はいつも恋心
バイキングお面がずれるから嫌い
ポケットの中で遊ばす好きな文字
ありがとう五臓六腑にある自信

和歌山県 村中 悦男

独り言聞こえよがしの妻の針
宿題をやる気アニメにしてやられ
急いでる時ほど長い赤信号
なお残る北風よそに梅の花
子育ての道に誤算がつきまとう

鳥取市 横田 春名

果てしない空我が老後問いかける
宝箱開けるカギよと渡される
壊れたり汚れた物も母包む
原色を淡く淡くと塗り替える
細くても手垢のつかぬ布を織る

鳥取市 岡田 信恵

神だのみ賽銭以上願ひ掛け
背伸びして若い空気が吸つてみる
雪のなか寒中桜春一步
古希迎え地味に咲きたい夢の花
古希すぎたまだまだ負けぬ記憶力

鳥取市 谷岡 清子

財産は健康ですと日々歩く
福寿草春待ち顔で窓見てる
白い足袋きりつと似合う女坂
万両に小鳥遊びて陽もやさし
ラジオ深夜歌番過去をつれてくる

倉吉市 前田 三津子

磨りへった靴の重みが捨てられぬ
うなずいてくれる母で弾む靴
遊ばせる心も自分だけのもの
足跡を指で辿れば泥だらけ
人の和が大波小波たたみ込む

米子市 小 塩 智加恵

一時間夫と語りうがいます
一冬を越した体をほめてやる
若い頃病んでた脛が今元氣
皇后と同じめまいがする私
春ですぬ明るい話二つ三つ

鳥取県 飯 野 菖 子

反省はいつも私のパートナー
もう一度確かめて見る深呼吸
深呼吸すれば青空見えてくる
叶う時凡てのものが美しい
木枯らしに準備して待つ落葉樹

鳥取県 岩 崎 和 子

チャキチャキとしているようであがり性
いい笑顔子供みんなに愛見える
夫婦でもけじめが無いと続かない
小銭にはお澄まし札にない温み
美容師のカリスマ性に魅かれてる

鳥取県 福 光 京 子

子の歳を数えて知った老い気づく
ゆうゆうと鷺が渡った丸太橋
それとなく女を意識させた罨
老人になつたが控除廃止され
よく怒る子には煮干しを食べさせる

鳥取県 橋 谷 静 江

ストレスを溜めないようによく喋る
鬼は外窓全開で福を入れ
向い風ばかりに耐えて今日の風
前向きに歩こう夫婦肩並べ
前向きに体力保つ日を決める

松江市 相 見 柳 歩

恋をする財布はいつも軽いのに
シナリオは君が素足のシンデレラ
仏様拝む争うことはない
今世の福来世に持つていく
胸弾む君のスマイルまでの距離

松江市 松 浦 登志子

冷えた足こたつの部屋へ行きたがる
控えめに話をしてる杉花粉
降る雪がきつかけになり夢叶う
人間をやめるとすれば人恋し
墓参り良いことだけを報告し

出雲市 荒 木 英 子

大声で怒鳴る親父の鬼退治
バレンタイン秘めたる人に贈りたい
色褪せて元気がないと庭の花
吹雪く夜温もりほしい鍋料理
しんしんと咲く山茶花に雪が舞う

出雲市 川 島 和歌子

何気なく隠した嘘が見抜かれる
畑に出て七草探す春の音
派手な服着たり脱いだり試着室
蟹の手が派手にはみ出す市場籠
雑念を捨てて積木に夢を追う

雲南市 武 島 ちよえ

成り行きに任せてあとは冬炬燵
電池切れ脳の指令が届かない
わだかまり何時かは解ける春を待つ
見通しが効かぬ蓮根食べたのに
年寄りにされて良い時悪い時

雲南市 菅 田 かつ子

思い出の種はゆっくり蒔いておき
転がったところから傷む青りんご
変化球見事に躲し青い空
雪道の思わず夫にしがみつき
それなりの楽しみがあり今朝の窓

雲南市 福 間 博 利

休肝日理由をつけてまたのばす
組の音トントンと上天気
精一パイ問うてにらんで試着室
恋歌の百人一首に大さわざ
日毎かく三年日記軌みだし

府中市 馬 場 利 子

ちぎれ雲明日の余白の絵に足そう
星一つ流れを追って誤解とく
小雀の笑いがもれる春の庭
古里へ通じる虹を描いてみる
極楽に通じる細い蜘蛛の糸

宇部市 高 山 清 子

堅物が軽い話の腰を折る
小判にはならぬ落葉をじっと見る
いやな癖やたら目につく倦怠期
冗談を言いつつ本音ちらつかせ
知らぬ振り続けて肩が凝ってくる

宮崎市 串 間 安 子

百歳が真ん中にいるひなまつり
百歳と眺めています春の雪
土おこし嬉しい種も混ぜてまき
働いた自分をほめる作業服
百薬に勝る笑顔に囲まれる

唐津市 岩 崎 實

花のしべ私いつでも媚びてます
すぐ前の二階の梯子気にかかり
三角の切れ目がほしい袋物
修理する心も歳をとっていき
良好と笑顔で送るわが主治医

シドニー 坂上のり子
気が付けば猫に真つ直ぐ見られてた

反抗期母の温もりとは知らず
海外に住んで目覚めた愛国心
日本の資源だニート誇り持て

シドニー 内山佳代子

落ち込んだ日には自分に花を買う

関西弁見知らぬ人に親近感

空港へ見送りに来ぬ母心

大げさにおだてて任すフロ掃除

シドニー 三谷たん吉

降りやまぬ雪にも何かきつい意志

親の背を見れば少子化うなずける

勤勉で正直者はせまい場所

ブライドが死語になるのか日本国

メルボルン 藤原ポン吉

厄明けも念を押します鬼は外

ガイド付き子供に戻る日本人

思い出はみやげ気になり後まわし

喧嘩して強度不足を知る夫

東かがわ市 向山治延

薄霜が解けて花咲くフキのトウ

咲く花を見上げ箒は杖がわり

人情にふれて忘れぬ旅となり

花見宴飲んで浮く人ぐちる人

東かがわ市 中塚寿々女
ちぎり絵に友の姿が偲ばれる

一枚の押絵で部屋も様変わり

外出の杖と帽子が添えてある

一本の古木に集う里の春

大洲市 花岡順子

初恋の訃報は雪の夜届く

灰になるまで賞味期限を切らさない

悔しくて涙流れる音がする

雪の白さは解ける定めを知っている

高知県 百田幸

捨てられてなお咲く花をいとおしむ

流される笹一枚に似た余生

見るだけの客も吸いこむ自動ドア

良い人生だったと思うことにしよう

札幌市 三浦強一

自分史に少しタラレバ入れてみる

肝機能正常だった乾杯だ

婦唱夫随緩急自在の球が来る

朝刊の美談話題に茶がうまい

可児市 鶴留百合

ライト点け出勤春はまだ遠い

豆の数食べ切れなくて歳を知り

春の芽が出て足許気をつけて

フツフツと火種抱いてる寒の内

静岡市 中西 雅

愛の辞書私の脳から消えてゆく
漬物石亡母の味まで一休み
庭の花散りかた順序は神まかせ
冬の月冷たく澄んで愛がない

岐阜市 平野 あずま

もう一軒もう一杯と春の宵
スーツから野良着に替えて田を守る
太陽が味付けをした吊し柿
おでん鍋ぐつぐつ声を立て笑う

尾張旭市 三浦 きぬ

戻れない思いに縋り生きて来た
耳朶が痒い良いこと期待しよう
もう結構いやもう少し生きてみる
思い出は思い出すたび近くなり

愛知県 片岡 文男

相性は想定外のことらしい
寒中の見舞は計報連れてくる
田起しをして休ませる農が消え
保証ない旨い話を拾う欲

愛知県 八木 百合子

名曲に乗ってカラスもゴミ漁り
すぐ悲鳴上げる足腰叱りつけ
子のためと敷いたレールが軋み出し
景色より愚痴を吐き出すバス旅行

取手市 葛西 清

頼りにはならぬ亭主といる暮らし
おしゃべりは介護づかれの常備薬
解けぬ糸雲に預けてお茶にする
大きい手大きいりんご掴めそう

柏市 河野 桃葉

すぐ逢える距離で心は遠くいる
ひな壇が眩しすぎます独り者
不器用を返上します定年後
気配りに徹し学歴カパーする

草加市 飯土井 健翁

一年を歩く誓いの初詣で
血と汗で貯めたお金は逃げはせぬ
残る日を笑顔で暮らす老いの知恵
感動の本に夢中で午前さま

東京都 井上 つよし

病院に春待ち兼ねたマスク顔
無農薬矢張り国産品が好き
提灯がちらほら混じる投書欄
冷戦を孫の病気で痛み分け

東京都 笠原 乃りこ

酒タバコやらず定年子も一人
群青の空夜明けのお風呂素の私
勝ち組でなくてもいいの引分けて
手を伸ばせば全てに届く妻にまで

横浜市 中尾 哲代

雪道の轍に腕を試される

好き嫌いする子に祖母の混ぜご飯

ケーキ屋を素通り出来ぬダイエツト

横綱が降る時もある砂かぶり

京都市 榎本 宏子

手出しせず見守るだけの愛えらぶ

気が狂うほどはもうない待ちぼうけ

黒枠の写真はみんな美人です

占いでは玉の輿らしパラサイト

大阪市 池上 清治

串柿ののれんが映える里静か

着ては脱ぎ着ては替えての出かけ前

着る気ないけど捨てられない形見

荒稼ぎ無駄と堀江に教えられ

大阪市 吉川 弘泰

ほどほどを忘れて遊ぶ春日和

くすくすと笑って立読み週刊誌

背を丸め歩く背中に花吹雪

つくし摘み丸い膝寝て耳掃除

大阪市 吉内 タカ子

好きなこと出来る時間はたんとある

頑固さも歳に折れたか生きやすし

怠けるな雨降るまでの急ぎ足

大寒に堪えて開いた梅二輪

大阪市 平嶋 美智子

人のエゴ野菜の匂をうばってる

茄子胡瓜トマトよ旬はいつですか

ヤジロペー心に背き右ひだり

頼りないのに頼られる親の脛

大阪市 平井 露芳

四捨五入したら未だ未だ七十歳

清水の舞台時々飛んで見る

アメリカの誤算選挙でハマス勝ち

ミイラ取りミイラになったホリエモン

池田市 多田 契子

自己嫌悪自分の言葉追いつめる

あの犬は私の服を批判する

冬の犬毛皮リッチに着こなして

チャングムに会える幸せ独りの夜

泉大津市 助川 和美

年金で買ってやれないランドセル

この寒波早起き出来ぬ灯油高

妻は今朝気分いいのかりんごむく

今は亡き父のマフラー暖かい

柏原市 伴 洋子

ワntenポ遅れて笑う英語劇

裏切りを正当化する啜り泣き

煮詰まれば珈琲館で息を継ぐ

不器用なペンが溜めてるじれったさ

門真市 矢 阪 英 雄

一瞬に風につまずき生きている
抱きあつて愛を分け合う浜の石
入り海は波を豊かに牡蠣育て
話しせず牡蠣を起さず浜歩く

河内長野市 内 海 綾 乃

大黒柱息子本厄寺参り

咳すれば飛んでのど飴持つてくる

家計圧迫何処まで値上げ灯油殿

マンシヨンは眺めるだけにしときます

岸和田市 堤 楢 代

本チヨコは毎年違う人ですねん

どの顔もトリノ主役になりそうな

天皇家まさに天下の一大事

借景の庭も花なく春を待つ

岸和田市 池 田 岩 夫

挨拶も説教になるわるい癖

通りすぎだけど気になる特売品

惨めだがちつちやな穴開け空を見る

無いかいなど忘れ病に効く薬

堺 市 荻 野 像 山

夕食になると屁理屈顔を出す

浪費癖ちゃんと哲学もっている

偉そうな態度の裏にいた政治

住所不明で生きてると言う噂

吹田市 二 宮 栄 子

旅帰り釣瓶落しの夕支度
外は雨独り余生を考える
家族の輪子等が笑いを持つて来る
易信じさで晩年にかけてようか

高槻市 大 崎 侑 子

一人では着れない和服ダンス占め

試着してマネキンほどは見栄えせず

久しぶり法螺吹き合つて右左

杖の色迷つてる間に捻挫癒え

豊中市 源 田 啓 生

年表になれば平成良い時代

干し柿の素朴な味も人情も

一束の水仙凜と風邪の頬

春星といえど厠に冴え返る

富田林市 古 田 千 華

洞窟のホールに響くコンチェルト

合唱をしているような黄水仙

寒行の山伏の声京の街

監督と選手を兼ねていい笑顔

羽曳野市 松 本 静 子

梅だよりきいて春待つうぐいすも

美しいばかりではない雪の道

ろう梅を部屋に一輪かおりよし

水仙が寒さに耐えて咲いている

羽曳野市 仲谷真一

国技から世界競技に発展す

冬季五輪期待はずれでメダルなし

お茶づけとヨーグルト売る角力たち

インソップの赤頭巾を読み直そう

藤井寺市 西村栄一

起きてから寝るまで口が忙しい

目隠しをとっさにされた手の温み

男手で育て十年今日嫁ぐ

君を待つ心に花の二つ三つ

藤井寺市 俣野登志子

梅桜どつちが好きと聞かれても

穏やかに暮らし時々アクセント

ミカンどうぞすすめ目白の訪れに

春よ来いいつまで降る気名残り雪

藤井寺市 吉田喜代子

横顔に秘め事もあり寒牡丹

凜と咲く紅梅にまだ負けられぬ

ふんわりと今日は上出来オムライス

母さんは問題増えてから元氣

藤井寺市 増井ヨシ枝

母さんと一緒道草して帰ろ

山茶花に足ひっこめる花むしろ

表札は私を守る亡夫の名

どうしたのビールとあなたに酔うてます

寝屋川市 森田麗

貯金箱二泊できそうこの重さ

茶断ちして語らぬ母の背が丸い

月明かり化粧落せぬ露天風呂

夫婦離旅で目が合い連れ帰る

寝屋川市 長濱賢山

甲子園背中さみしい砂集め

打て打てと家族で燃える甲子園

人間は自然を壊すインベーター

助けてと叫んでいるのは地球かな

寝屋川市 岡本勲

火に油そそいだようなホラを吹き

大寒気梅一輪が風邪を引き

命守るための酒だと飲んでる

一番がこけて思わぬ福もらう

東大阪市 大塚サキ子

ぐみの実のたわわに実り色づきて

うす墨を一はけかけること暮るる

石段の下より私参拝す

ライブドア大事無いかと子に電話

東大阪市 佐々木満作

老いらくの恋ではないが好い感じ

椀と豆と鱈で鬼は外

集落の里にポツンと赤ポスト

湯治来て一人手酌の雪景色

枚方市 二宮紫鳳

シーサイド沈む夕日の影二つ
春告げる波ののどけき伊予の灘
キャンドルに愛を灯しておすそ分け
里帰り母の元気な笑顔もれ

枚方市 小川良吉

古稀過ぎて終が気になり星に聞く
人の悪何でもありの社会面
負け犬も勝ち犬も犬差別なし
日の丸を汚す談合自衛隊

箕面市 寺井柳童

山古志を知り津南町また覚え
五合目の上は知らない富士登山
小春日に知らずに延びる歩数計
ちりめんには辛味大根父の味

八尾市 寺川はじめ

ニッポンの空気膨れる御懐妊
引き際を探り合ってる長喧嘩
穴埋めの深さを知った亡父の席
春の息吹きほんまもんかと念を押す

八尾市 松葉君江

下積みの汗は未来の投資です
反骨も世渡り下手も親譲り
子の躰けするより先に親躰け
人生の引き出しふやす好奇心

八尾市 中島春江

ウォームビズなにを今更チャンチャンコ
白髪だけきれいな褒められ姥盛り
節分の鬼がこわがる鬼多く
身内でも取っておりまます車間距離

八尾市 平川幸枝

加速度がついた未来は誓わない
ずつしりと重い小銭の初詣で
のんびりと何か足りない日々好日
可愛さが出てきて小鬼豆を撒く

八尾市 笹倉ひろし

過ぎ去った夢はまっ黒スス払い
本心を明かし自分を責めている
湯気立てた頑固オヤジが懐かしい
兜町操る糸が首を締め

八尾市 脇俊子

生き方を自分流に書き直す
ときめきを帽子に入れて散歩する
影法師しっかりと聞く生の声
阿吽とは行かなくなつた老い之道

大阪府 若月祐作

口数が減ると明日は曇り出す
半世紀互いの顔に光る皺
新成人跳んでみないか広い空
村祭り笛と太鼓で神楽舞う

大阪府 畑中節子

里の川小鳥とデュエットして青し
雪雲が流れて来たり山の峰
季の巡り暦通りに種子を蒔く
春風にさそわれ梅花に癒される

大阪府 大屋敷 婦美子

福袋買えず横目の年のあけ
はつ春や自分探しに出る一步
自立してよかつた今のしあわせよ
ぬくいとこ猫と私の争奪戦

大阪府 西川 冷子

春告げに来ている鳥も雪の枝
車内化粧同性でさえ恥ずかしい
消しゴムで消えそうな月西の空
吊り橋も谷瀬は平気揺れてても

大阪府 小栢 こずえ

七十年生きて来たけど無位無冠
おだてられ生きる励みの保存食
手作りを待つ人がいるファイト湧く
感激も慣れて普通の事となり

神戸市 武田 恵美子

禁酒といやしんぼのがまん会
大腹にぜったいやめるとせんげんす
7号からいくらとんでも身があまり
首かしげできたはずなのおかしいな

神戸市 木村 忠義

高いのがいい薬とは限らない
健康という財産を病んで知る
老いに即した処世術思案する
欠点も個性と思いい気にしない

尼崎市 古川 正子

山茶花の葉に負けないと紅い花
柳の木はや新芽出て春の顔
寒菊のまだ咲いている犬みてる
節分の一人は淋し丸かじり

篠山市 谷田 多美子

健やかに眉引く朝にありがとう
ささやかな倅せ冬の味噌仕込む
玄関に花一ぱいの笑い声
老いの路ただゆっくりと辿るだけ

三田市 白井 二英

きつと来る思った通り静電気
子の住所あたりの地名耳すます
カーナビも工事にお手上げ人に聞く
レシビなど見ずに作って嫌われる

三田市 上垣 キヨミ

子の帰り待つ母のようなつばめ待つ
ドナーカード一枚だけが我が遺産
いつまでも赤子のように想う母
ゆとり無い暮しが性に合っている

三田市 石原 歳子

家計簿の達人赤字だしている
大掃除すんでからだは電池切れ
歩き方亡母に似てると夫の言う
時忘れ話していたい人がいる

三田市 辻 開子

せせらぎに流水すぎて落の臺
生欠伸五臓六腑が合図出す
豪雪の意地悪押しして福寿草
ダブル幅今夜のフトン広すぎる

宝塚市 丸山 孔一

やり過ぎの個人情報あんだだれ
カエルへビ僕も起き出す陽の光
名の由来八紘一字塔仰ぐ(富崎にて)
霧島の湯煙神を誘ったか

宝塚市 河津 寅次郎

雪下ろし使う道具にない進歩
振り向いた子に怯えられうろたえる
ときめきを失意に変える鼻差負け
割勘と聞いてピッチが早くなる

西宮市 石野 照代

ごめんねと素直に言える子に育て
春風にさそわれ花柄ワンピース
売れるなら夫子供もリサイクル
いらだちをしずめるように墨をする

兵庫県 永井 かほる

いついて春がこいしい今の朝
おかし焼き家の風味の味保つ
よくぞ降る今年の雪になやまされ
雪の下とろけるうまさ白菜の

兵庫県 岩本 美緒子

一人でも遊べる絵筆おかげさま
トレーダー株へ向かせたライブドア
命という一字愛しく向けて生き
退屈の虫がバス乗る湯の町へ

兵庫県 黒崎 美紗子

合併へつきつき急ぎする工事
挨拶は短い人で人気者
まだ若いつもりマニキュアしに出掛け
落ち葉マークついて好い事おこりそう

生駒市 小西 稔

老夫婦たまに喧嘩もボケ防止
鼻柱折られた天狗おとなしい
雪ちらり鼻歌も出る露天風呂
はやきたい政治経済世の流れ

橿原市 藤永 実千代

下手でいい思った途端腹据わり
災いの元なる口に要る蝶
嘘つかぬように昔は子に教え
同情より深い理解の難しさ

和歌山市 根田 よしこ

ウエストは気にせず長寿するつもり

失敗を案じてくれる夫がいる

老母いつも言い難い事聞きたがる

早起きは三文の損老いふたり

海南市 小谷 小雪

ほめることさがしてらうち子が巢立つ

有頂天になつて僕におもりつけ

逢えたなら君にもあげます柿のジャム

乱調も好調の日の忘れ物

田辺市 大峠 可動

歳月を生きてときどき偽装して

涙などいつでも出せる雪達磨

忘却があり白一色の冬を詠む

饒舌よ浪花の女討てますか

和歌山県 辻内 次根

これだけが自慢笑つて歯を見せる

痩せ我慢が糞になつてくる

考えています自分の事はかり

何もかもどつと来そうで怖くなる

和歌山県 森下 よりこ

北風に耐えてほっこり寒椿

黄水仙春の音符を奏で出す

ダークダックス歌声喫茶城下町

元氣出る料理へパパの定年後

鳥取市 近藤 秋星

大雪の雪の下から春が来る

立春と聞けば希望がほの見えて

隣まで来ていた春は何処行つた

世を挙げて紀子さま男子期待する

鳥取市 山口 千代子

身の丈に合つた生活に感謝する

神仏は総て見通し今日を堪え

女でも飲んで吐きたい涙酒

ペラペラとしゃべつた後の苦い舌

鳥取市 山岡 紀子

洗たく機三度回して今日は晴

雪解けの大地へ早春の音がする

控え目に恋をします六十二

六十二へゆつくりネジをかけている

鳥取市 中宇地 秀四

腹割つて話せばおなか痛かるう

我慢して作る笑顔も妻のため

温暖化馬鹿にするよな大寒波

勿体無い勿体ないで持ち腐れ

鳥取市 河田 のり代

義理チヨコが甘くとりつけて夢画く

豊かさに義理チヨコなどが色を添え

腹時計焼芋の香に目を覚ます

ここもです横着重ね歳重ね

境港市 遠藤 那珂子

油断なく気くばりしても洩れる指

雪の下花も呼吸がつかろう

二人居て阿吽のいきで元氣だす

二人共怠ける部分氣があつて

境港市 中井 虎尾

蟹食べたああ満足と横歩き

遺児唄う軍歌の中に父が居る

いい道も林道でした行き止り

目や顔に浮かぶ本心裏心

倉吉市 前田 喜美子

カリスマの首相靖国守りぬく

一発がはずれ当つた福の神

乱れ得ぬ母のイメージ割烹着

赤い火の見えぬストーブ他人めく

倉吉市 酒井 芙美子

柔らかな態度ついつい手を握る

さわやかな風が痛みを持って行き

わくわくとしながら淡い夢を見る

睨まれて隠したことが顔に出る

米子市 猪森 スミエ

梟の聲に寒夜の衿を立て

猪口重ねルン乗った口車

くりかえし読んでほろりとする美談

節分の豆も逃げだす歳の数

鳥取県 太田 勝誉

川の字になつて旅した子を思う

あの頃の悔しさ今も引きずつて

捨てた身だ取つ組む勇氣振り絞る

振りかかる火の粉いつでも追つぱらう

鳥取県 岡村 孝明

質問に的射た答見直され

悔しさが大波となり眠られず

脇役の支え主役を光らせる

絶られるたびに生甲斐湧いてくる

松江市 柏井 日出子

早生まれ桜ほんのり恋を知る

今日のこと明日は過去いう日は走る

堀川をめぐれば松江よいところ

夕日みる場所は湖岸にきめてある

松江市 山根 邦代

どうしよう福と鬼とが同居する

道草の楽しさ今も語り草

ふるさとで温い話をして巡る

日足伸び寒さもゆるみ氣も緩む

安来市 原 煩惱児

酒好きが癌は覚悟の上と呑む

喜寿過ぎてまだまだ嘔める豆の数

酒飲まぬ私は菓子へ手が伸びる

億万の長者で臭い飯を食う

川柳あしなみ会 50周年記念誌上大会ご案内

題と選者 「合 函」 辻 晩穂 札 幌 川 柳 社
 (各題1句) 「心 配」 大関ただし ふあうすと川柳社
 「内 緒」 堀 松白 長野県川柳作家連盟
 「実 る」 関根 尾幸 札 幌 川 柳 社
 「 五 」 酒井 路也 番 傘 川 柳 社
 「 十 」 宮口 笛生 川 柳 塔 社
 「 周 」 中井 昭子 時 の 川 柳 社
 「 年 」 従野 健一 鉄 道 川 柳 連 盟
 「 記 」 両川 洋々 川 柳 塔 社
 「 念 」 石川侃流 洞 川 柳 塔 社

投 句 便箋の裏を6等分して実線を引き、1枚目に6句、
 2枚目に4句を出題順に楷書で書いて下さい。後の
 2行に郵便番号、住所、氏名雅号、所属吟社、電話
 番号を記入して下さい。◎各句の右肩に題名を書く。

投句締切 平成18年4月1日～7月31日(消印有効) 厳守

投句料 1000円(発表誌呈)

賞 10題の合点30位まで楯呈賞

発 表 大会作品集

投句先 〒678-0005 相生市大石町14-14 中塚礎石 宛

主 催 川柳あしなみ会

後 援 相生市 相生市教育委員会 兵庫県川柳協会
 相生市文化協会 全国鉄道川柳人連盟
 相生市川柳協会 神戸新聞社

膝痛に奮起促す春の朝
 色増した音符春風運んで来
 裏口の悩み排水溝に流されず
 しゃべり過ぎ心の奥を読まれてる

母が居るだけで行きたくなる田舎
 母の日は一日楽をしたい母
 天使にも夜叉にもなつて子を育て
 おひねりが舞台を埋める児の演技

高根 福 間 左 余
 真庭市 矢 谷 富士野

第7回 吟行のご案内

大阪川柳人クラブ

催行日 5月19日(金)
 8時集合・時間厳守

集合場所 大阪中央郵便局正面玄関前

行程 大阪→奥藤酒造郷土館→赤穂
 パークホテル・昼食と句会→
 大石神社・大石城ほか→梅田
 17:30着予定

参加費 7000円

申込み締切 4月30日

取り消し料
 3～2日前取り消し 半額負担
 前日～当日取り消し 全額負担

宿 題 「塩」「岬」各題2句連記

申込み先 上村 隆 072-753-5581
 坂本晴美 06-6384-2466

皆様のご参加を御待ちしています。

川柳塔のぞみ

4月句会

欠 席 投 句 宿 場 日
題 所 時

〒193 4月25日(火) 13時
 0832 人形町区民館(地下鉄人形町A1出口)
 「終日」「水もの」「ぐるぐる」
 八王子市散田町2-31-3 以上2句自由吟1句
 播本 充子 宛

あかつき 川柳会

兼 会 日
投 兼 日
句 題 時
先 場 時

〒599 5月5日(金) 14時
 0232 国労大阪会館(JR天満すぐ)
 「約束」「筋」「努力」
 阪南市箱作1586-14-102
 森村 美花 宛

一周忌特集

薫風名誉主幹の思い出

(順不同)



昭和十九年の顔見世

都倉 求芽

川柳塔誌の巻頭言で薫風さんが顔見世のことを書いておられた時のこと。その中で昭和十九年、戦中最後の顔見世にふれて、「一つは守田勘弥の『切れれ与三』だが、もう一つが思い出せない」とありました。それで私が「そのもう一つは羽左衛門の『良弁杉』でした」と手紙を差しあげました。

すると「そうそう、そうでした、たしかにそうです。思い出しました」と早速お返事を頂きました。私がなぜ憶えているか、ということも書きました。

その年の春から私たちは学徒動員で尼崎の住友工場へ。ところがその寮がすごい蚤で同

級生が次つぎと発疹チフスにかかる。私も夏には発病して自宅へ帰されました。そして市立伝染病院へ入院。秋の終りに退院したもののそのころの事で食べるものもなく、いつまで経っても体がシャンとしない。ぶらぶらしていて気も滅入ってきます。

ある日、母が気晴らしに顔見世に行こうとなると出かけてきました。四条通の市電に乗った途端、道を歩いている人が右往左往、慌てふためいている。コンクリートの用水槽の水がチャブチャブとび出している。地震！乗客の人たちも一斉に声をあげました。しかしそれ以上の事もなく車内も歩行者も平静にもどりました。南座でも何事もなく順調に芝居は終り、帰宅したら夕刊に名古屋の大惨事が報じられています。

戦後、その地震で中島飛行機が全滅して、そのため敗戦が早まった、ようなことも知り

「二億総動員」「さあもう一機もう一艦」の時に安閑と芝居見物、という事がいつまでも頭にこびりついて、忸怩たる思いが消えませんと手紙に書きました。

すると薫風さんのお手紙に、「運というものは己のすることには及ばぬもの、いつまでも引きずることはないですよ」と温いお言葉で締めくくられていました。そのことも私には忘れられないことになりました。

月下美人

安藤 寿美子

子と見れば月下美人は宇宙船 薫風
あれはいつの頃のことだったろう。とにかく薫風先生が今のマンションをお建てになり、お移りになる前だ。先生のお宅は私の家

から歩いて二、三分の所だと、当時、私が師事していた戸田古方先生から伺っていた。

その頃、父が育てた月下美人が一度に十四もの花をつけた。今でこそ珍しくないが、その時は新聞に写真が出たりした。あちこちお知らせして古方先生も来られ、色紙にスケッチして残して下さった。

薫風先生も「長男の頭へ手を載せやすき背丈」の坊っちゃんとして下さった。「宇宙船みたいや」と言う坊っちゃんの楽しい感想を句になさったらしい。

月下美人の花は、大きく丸く、罨が大きく後ろへそり返り、大きな球体に一方方向にたくさんアンテナを取り付けた、人工衛星に似ていた。人工衛星も宇宙船も幼い人の頭の中で同じであった。その時、坊っちゃんも一句作られたらしいのだが、残念なから私には思い出せないのだ。

月下美人も宇宙船も現実のものだが、日常性はない。テレビ以外では見ることのない宇宙船と、一年に一度か二度それも夜の三、四時間しか咲かない月下美人、この二つが坊っちゃんの頭の中でむすびついたのは楽しい。薫風先生は深く家族を愛しておられ、折にふれては温かい御句を作っていらっしやる。お子様たちの御誕生の時、ご結婚の時、お孫

さん誕生の時、ご息のアメリカカンフットボール観戦の時、そして「酌み交わし而立と古希は一瞬ぞ」の御句にいたるまで、先生の深い思いは読む者の胸に響いてくる。

「子の頭覗の如くかわゆし黒し」と詠まれた御息は先生のようにすらりと長身で、先年よりもさらにハンサムな好男子となられた。昨年もほったらかしの月下美人は、やけくそみたいに二つの花をつけた。私にとつてこの花は、いつも薫風先生を思い出させてくれるのである。

叙勲の催しを通して

前 たもつ

薫風先生を思い出すと、川柳のことよりも行事を通しての方が印象に残っている。

それも成り行きであったかも知れないと思う。と言うのは、薫風先生が始められた第一回の「川柳塔まつり」の前夜祭をアウイーナ大阪に引き合わせたのが、ほくの川柳塔へのかかわりとなり、同人になってまつり担当、アウイーナ大阪の行事係として、薫風先生から依頼されることになる。

川柳塔まつりの十一回までのかかわりはさ

ておき、記念行事を辿ってみると、八〇〇号記念大会以後、七五周年記念大会、薫風叙勲記念川柳大会等、全国的な行事をこの十年余りの間に十回ほど持っている。その中でも薫風先生にとつては、叙勲の行事は最も力を入られたイベントであったと思う。

私もこの十年余りの間に、立案をしたりお手伝いをさせてもらった催しで、最も時間とエネルギーを費したのは叙勲の行事をおいて他はない。

ちなみに日記を繰ってみると、五月二十二日の会場探しから、九月二十四日の当日、そして十二月三十一日のロイヤルホテルへのお礼までの、叙勲の行事にかかわった日数は六十日ぐらいを数える。その半分は薫風先生と直接お会いして計画を立てたり、打ち合わせに行ったり案内状等の作業をしている。そして、仕事を終えた後お酒をいただきながら、川柳のことやら人間としてのあり方など教えていただいたことは、私の心の財産として残っている。

実はこの平成十三年は、五月に葉先生の七回忌があり、七月には路郎・霞乃先生の比翼の句碑を尾道に、九月に葉・薫風句碑が弓前に建てられた年である。

薫風先生は念願の恩師の句碑を建立して、

ご自分の叙勲の記念川柳大会、祝賀会を進行する中で、とても充実し輝いておられた。

私も他の行事を並行させながら先生に引っぱられるように、叙勲の催しを最後までお手伝いのできたことを、先生のある日のお喜びのお顔とともに、いつまでも心の奥にしまっている。

法善寺横丁小雨の中で

桜井千秀

薫風先生と並ぶ写真が案外多いのは、地方の川柳教室の一主幹に過ぎぬ私を、なんとか盛り立ててやろうとの、先生の深い思いやりであったと身に沁みる。

遠慮気味な私を見つけると手招きされ「身近な人とはいつでも並べる。滅多に会えぬあなたとやさかいここへおいなはれ」と口癖のように言っ下さった。

中でも法善寺横丁の水掛け地藏さんの前で二人並んだ写真。小雨降る夕刻、お世辞にも美男美女とは言えないが「一人前の板前さんになりやと願掛けたのはこいさんやけど、一人前の主幹さんになりなはれ」と先生のお言葉、三幸川柳教室の三代目主幹になりたてで、

まことに頼りない私へ真に迫った激励だったのでした。

以来「孫二十坂本冬美型美人」の私の作品に「私は迂闊にも坂本冬美を知らない。確かめると演歌の歌手のようだ」と寸評まで付けてくださった、細かい気配りが伝わる。

振り返れば三十年に亘る私の川柳人生の約半分は、薫風先生のお陰で生き延びられたとさえ思う。

御座候

江見見清

薫風先生との出会いはNHK文化センターの受講生となった平成十一年です。先生とは教室のある第一・三の木曜の朝に曾根駅で一緒にになっていた。ホームでは、先生は「ヨッ」と手を軽く上げてニコニコされる。車内では昔の川柳人のお話や週刊誌の事、時には各地の句報を頂戴した事もある。梅田では必ずハガキ等を投函された。先生は駅から第四ビルまでを階段を歩かずにエスカレーターだけで行ける道を御存知だ。先生はよく「私はゆっくり行くから先に行つて」と、ともすれば早く歩いてしまう私に気遣いをされる。ある教

室の日の帰り、私が梅田駅で発車を待つっていると先生が入って来られ「これ持って帰つて」と、阪急の構内で買われたアツアツの「御座候」を二個手渡された。「先生が折角買われたのにお断りします」とさつきそこで江見さんを見かけたから買つて来た」と言われ頂戴してしまつた。平成十二年に母が亡くなった時には、「鱗雲一枚こぼれ亡母の窓」の色紙を頂いた。平成十五年後半頃から体調を崩され、タクシーで来られることも多くなつた。

その頃のある朝、先生のお供をして雑踏の梅田構内をゆつくり歩いていると、突然先生が倒れたままだち止つてしまわれた。私は先生が倒れるかと思いつきに腕を両手で掴みましたが、その腕の細さは骨それぞれ形のはつきり判る程に瘦せておられその感触は今でも忘れられない。幸いその時は何事も無く終りましたが、体調を省みず出かけられる先生の川柳への情熱を改めて実感しました。教室を去られるのを機に作られた受講生の句集には、題字、句とともに七頁の序文を病床から送つて頂いた。快くお引き受け頂き一同感激しましたが、美籠さんにもお手を煩わすなど、当時の先生に相当のご無理を強いることになつたのではないかと、申し訳なく思つております。

路郎と薫風

瀬戸 まさよ

薫風先生の何気ない所作、何気ない言葉は数限りなく私の思い出のなかにあります。何気ない言動であるため、却って薫風先生の人間に触れることができたのではないかと思っています。

若かりし頃の薫風先生は、念願がかなって路郎の元へ出入りするようになり、意欲満々だったと推察されます。カルチャー教室で、その頃のことを話されたことが、今も私の記憶の中にあります。

「路郎が出かけたあと、没になったハガキの束を机の下から取り出して、ぼくは一枚、一枚点検し、なぜ没になったんか考えるんや。それを毎日のようにしてたなあ」

薫風先生はさらりと言われましたが、没句は普通、見向きもされないものです。かく言う私も自分の没句は、あかんわと放つてしまふのがオチです。それを拾いあげ検証されるのは、やはり薫風先生ならではの勉強法であり、川柳に対する果てしない愛着と向上心の表われでありましょう。

また、教室での川柳鑑賞のときでした。石くれも三つ積んだら思惟の塔 薫風
この句に対しては次のようなことを話されました。

「路郎のところへ何回、句を出してもとつてくれへんかったなあ。ぼくがいい句やと思つてもとつてくれなかつたんや。一年程して初めてとつてくれた句がこの句や。それからはずよく、ちよくとつてくれるようになったけど、あとから考えると一年間じつとぼくのことを見とつたんやな」

この句は『古希薫風』にも収められていますが、薫風先生にとつても印象深い句だったに違いありません。

敬愛する路郎と別れて三十八年、薫風先生はいつも路郎を偲び、共に歩んでこられたのだと改めて思っています。

眼を閉じて見え

正畑 半 覚

私の川柳の宝物の一つに、橋高薫風先生の色紙がある。

「これは、半覚さんに持ってもらおうのがいい句と思うので、差し上げます」

と、竹原川柳会の小島蘭幸会長から譲られたものである。その時の胸の高鳴りは今でも私の体にはつきりと記憶をしている。

あれはたしか、何年前の、三原市神明祭協賛川柳大会後の懇親会であった。まるでひとりじめしたかのように、薫風先生と盃を交わしながら歓談できる機会を得た。どうでもひとりのように見受けたので気になったが。

「今日はさいごまでおりたいんや。尾道の麻生路郎・霞乃の比翼塚ではな、白龍さんと蘭幸さんに随分お世話になつたんや。」から始まって、いま38キログラムの体重のこと、今日は明日の予定を変更しても最後までつとめること等、心打たれればなしてあった。

眼を閉じて見え眼を開けて見えぬ 薫風の句の色紙を譲られた話を伝えると、

「この世からあの世は見えんやろ、だけどな彼の地からこつちはちゃんと見えとる思うんやで。そういう句や、あの句は」

と、しみじみと語り聞かせてもらうことができた。思わず全身がふるえてきたことである。まっすぐに会った目線のやさしさに、薫風先生の大きさと深さと思った。

「竹原川柳会も、みんなて若い蘭幸さんを支えてやってな」

あの一言には私も泣いた。竹原川柳会への

なよりのエールであった。

薫風先生はきつと、彼の地から川柳塔社は勿論のこと、竹原川柳会をも見詰め続けていくられるにちがいない。

人間陶治の詩

海老池

洋

昼寝覚めポトリと極楽へ墜ちる 薫風
永年いつも私たちをご指導くださった先生
のご逝去を、惜しみ寂しさに浸る間に、一周
忌を迎えることになりました。

なにわ柳壇・NHKラジオ放送の投句を通
じ、先生の格調高い革新性のある句風に惹か
れ、平成三年から先生のNHK梅田教室の川
柳カルチャーでご指導を受けることになり、
爾來十三年間先生がご引退されるまで、「人
間陶治の詩」を教えていただきました。

その間、時に厳しく時に温かく、個性ある
句を作れるよう、添削・句評を通じてご指導し
ていただきました。「句はいいが洋の句でない
い」とよく叱られました。カルチャーの宿題
では数十句作った中から出しても全没が年に
数度、二重マルをもらえらる句は年に二句ぐら
い。懐かしい思い出となってしまいました。

川柳は穿ち。リズムが大事。真実の句を作
れ。言葉を蓄積せよ。個性ある句を作れ。自
選能力を身につけ。名句を多く読め。などな
ど、川柳作句の基本をみっちり仕込んでいた
できました。

また句会では、僕の選に抜けるような句を
出せとよく言われ、それも作句の目標でした。
これからも先生の選に抜けるようないい句を
作り続け、先生へのご恩返ししてまいりたい
と思います。

今にして思えばあれもこれも飴 洋

先生の温かさ

榎本舞夢

薫風先生はあこがれの川柳塔主幹、同人に
なり、初めて初心者入門（サンケイ学園）に
参りました。お人柄をいろいろな方からお聞
きました、あこがれの方なので、恐る恐る受講致
しました。同期に同人になった人もいらっし
やいましたが、新人生として、温かく御指導
下さり、奥深い思いやりが偲ばれて、しっか
りと私の心を虜にしてしまわれました。
あのようなお力が何処におありになられる
のかと思われるほど、痛々しいお身体で二時

間の講義、月二回を惜しむように通いました。
入門して間もなく、先生は叙勲の栄を受け
られ、その受付、準備等に私まで駆り出され、
華やかに盛大に大会を迎えられたことを思い
出します。

それから亡くなられるまで、先生のお傍で
教えを受けた日々は私の宝物となりました。
偶然、先生の御親戚の方が、御近所に越し
て来られたことも、急接近出来た証と感謝し
ています。

病床にその方を御案内し、長時間懐かしく
教室以外の昔話に花が咲き、私もたのしく聞
かせていただきました。帰りがけに、先生の
本を持つて行っていましたのでサインをおね
だりしましたら、気持よく一句まで添えて下
さいました。今思えばお元気な時に、そのお
人をお連れしたお礼だったと喜んでいきます。

間もなくお亡くなりになられました。私
にとつて余りにも短い間でしたが、川柳を通
じて、薫風先生から多くのことを学ばせてい
ただき、未だに近くに居られ温かく見守って
下さっているように思われてなりません。

本当に、本当にいい思い出を下さったこと
感謝しています。また人生にとつて、人間と
してのありようをこの年になり、勉強出来た
ことを嬉しく思つて居ります。

薫風先生と蒲鉾

恒松 町紅

薫風先生が亡くなられて一周忌が巡り来る。楓葉さんから何か思い出話を書いてくれたの電話があつて、つい部屋に鴨居に掛けてある色紙額をあらためて見上げた。「町紅と号しいついつまでも壮 薫風」。記憶は薄れたが、あれはたしか七年ほど前、私の喜寿祝の頃だったと思う。いずも川柳会の懇親会の席で、先生から直接頂いたもので、あの時の光景は今でも目に浮かぶ。

その日から何日か経って、先生は蒲鉾が大好物と聞いていたので、松江名物の蒲鉾を送ることにした。松江では名物としてアゴ野焼（飛び魚のことを当地ではアゴという）や玉子巻を作る蒲鉾店が数軒あるが、その店は特に玉子巻が美味しいので店から送ってもらった。その店の後継者が無くて現在では閉店されていて、一度とその味を口にするこゝろはない。ところが、その送った玉子巻に玉子の殻が入っていたと先生からその現物を添えて苦情の手紙が届いた。これには私も驚いた。早速その店へ現物を持って行ったが、ご主人は何

百もの玉子を割るので、よく殻の屑が混じることがあるが、虫や蠅などでなくてよかつたと言われ、新しい品物を送られたさうである。

蒲鉾店に見れば、よくある事で左程には思われなかつたようだし、私もよくその店で買って食べていたので、思うほどに不快感ではなかつたが、初めての方はさぞかしびつくりされた事だと思つて、たどえ代りの新しい品物を送つたとしても、一度感じた不快感はぬぐい去る事は出来なかつたと思つて、先生が亡くなられた今でも、この事件は忘れる事の出来ない思い出である。

薫風先生とお父ちゃん

宮崎 シマ子

薫風先生は前の菜の花句会、寝屋川句会でお目にかかつていましたので、NHKの川柳教室が眼に入つた時すぐ入れて頂きました。昭和五十六年十月以来九年間教室へ通いました。不肖の弟子の私は川柳が下手で「今頃こんな句を作つてどうするか」とよく叱られました。そのうち吟行などは主人も参加させて頂きました。私は人様にうちの主人とかお父

さんがとか言うのですが先生は「あんたとお父ちゃん」と呼んで下さいました。

その頃NHKの文芸選評の川柳にも投句しておりました。たまたま平成三年九月に列という題で入選し、志鳥アナウンサーが私の句を選びました。対談の途中で先生が上手に主人を引っ張り出して下さって、主人の声も電波に乗って日本中を流れました。このようなことは一生のうちで二度とないことなので、先生が優しいお気持でそういう運びにして下さつたと思つています。その時の主人の感激は一人でした。今でもこの時のテープは大事に取つてあります。主人が脳梗塞になつてからも「どうや大丈夫か」とか「元氣か」の言葉に添えてお菓子または珍味などを下さいました。「先生これ私に？」と聞けば「違うがなお父ちゃんにや」とおっしゃる。どうせ半分以上は私がお食べるのにも思ひながら頂きました。しばらくして今度は先生の奥様が、「病氣になられ、「如何ですか」とお聞きすると、私の頭を大きい手で押さえるぐるまわして「こんなことしてもわからへんのや」と、切なそうに淋しそうにおっしゃった。その先生が奥様よりうちの主人より先に逝かれました。私共夫婦に優しさで厳しさを下さつたのに、何

のお礼も出来なかつた事が切なく心残りです。近未來不肖の弟子もそちらへ行きます。また叱つてやって下さいませ。先生の思い出のひとこまで。

合掌

天国の先生へ

大内 朝子

拝啓、先生、天国の住み心地はいかがですか。お別れて早一年になりますね。歳月が過ぎてゆく程に先生をお偲びしています。

なにわ柳壇へ投句を始めてすぐに巻頭に抜いて頂きました。それがきっかけで朝日カルチャーに入会し、先生とお話出来る機会を得ました。そして川柳塔の同人にも推薦して頂き、退職して心に穴の開いていた私は、また心を燃やすことの出来る楽しみに出会えました。

当初は好奇心やお付き合いであつちこつちの句会に参加しました。そんな折、先生から句が荒れないようにとのご注意を頂きましたが、相変らず人との交流が楽しくてよく出歩きました。

そんな頃奥様の御見舞に寄せて頂く車中で「いろいろな春が近づくとドコンドン、な

どの句を作っていた頃の朝ちゃんも綺麗な振り袖を着たように華やかだったのに、今は長襦袢だけになったような気がする」とおっしゃっていましたね。あの時、私は笑っていました。が内心ショックでした。

その後、投句しても没ばかりで川柳を諦めかけた頃、「志ペン草も花のとき」をなにわ柳壇今年の十秀に抜いて下さいました。私を影で誉めて下さっていたと友人から聞き、本当に嬉しく、現在に至る励みになりました。先生とお目にかかつて以来いつも陰で見守って下さっていたように思います。本当にありがとうございます。

今にして思えば先生のおっしゃるようになりにしてあげばよかったと悔いる事が沢山あります。あの頃はごめんなさい。今更ながら先生のお句の深さを感じております。一番残念な事は先生が句集を出すよう言つて下さった時、すぐにお返事出来なかつたことです。だつてこんな早く天国に行かれるとは夢にも思つていなかったものですから……。

三月の末にお見舞に伺つた時の先生はとてもやさらかな笑顔をなさっていましたね。その時のお顔が未だに胸にやきついております。

面影を偲べばそばにあるレモン 朝子
天国でまたお目にかかります。 敬具

やさしかつた薫風先生

根岸 方子

最初に薫風先生にお目にかかったのは、昭和四十二年三月のことでした。友達に誘われて関西へ旅行した時のことです。

倉敷で田中好啓先生にお世話になり、三宮駅のホームに薫風先生、寺尾俊平先生、室田千尋先生、鳥本泰先生他数名の方々がお宿二人を迎えて下さいました。先生のお宿は素敵な和風造りで、川柳に対する熱い心を教えて下さいました。

薫風先生の観光案内はとてもユニークなもので、いつもホームで迎えホームまで送つて下さいました。難波駅近くのカツの店では、ここは胃の手術後、最初の外食で全部食べられるほどおいしかった店。銀閣寺の時は、近くにやって来る屋台の焼芋が絶品だから食べましょうと。箕面の滝の時は、もみじの天ぶらを歩きながら食べるのがベスト。苔寺の時は、一日のうちで早朝が一番素敵なので開門を待つて入場すると、苔に心を洗われると。そして自然薯のファンで数多くのレシビをお持ちでした。塔まつりの後に行ったお店の

とろろには涙を誘われました。

君嫁く地旅に出たいと思うとこ 方子

この句を電波新聞の川柳欄に投句すると、早速、友に祝電とお祝を贈って下さいました。

『川柳全集 麻生路郎』を出版の際には

汝が祈りふからしむと雪を給ふ 薫風と署名され、この本が一番いい教科書だからこれで勉強しなさいと贈ってくださいました。

のぞみ發会の際には、先生にお目にかかるのを楽しみにしておりましたが、私の都合がつかず欠席したのが心残りです。

恩返しもできぬまま、同人への推せんをいただきました。

今年こそ、薫風先生が美しいと言われている桐生の桜を見ながら、先生を偲びたいと思います。先生、ありがとうございます。

恋人の膝は

檸檬のまるさかな

園山 多賀子

私が川柳塔同人に加えて頂いたのは西尾葉先生の主幹の時であった。柳歴は今更語るに及ばない。

栞先生没後、薫風先生に御指導頂いて今日

に至り、今は川柳のない人生は考えられない。正に生き甲斐となった。

薫風先生の思い出は色々あるけれども一番印象に残っているのは、平成十一年のこと、銀輪荘で出雲の句会が開かれた。併せて今は亡き堀江正朗氏と私の米寿の祝を兼ねたものである。かつて喜寿も一緒に祝って頂いた間柄である。

当日会場へ出向いた。すると出会い頭に二階から、満面に笑みを湛えた、薫風先生が降りて来られた。驚いた。夢かと自分の眼を疑った。唯お一人で同伴もなく酸素ボンベを引き摺って：「ようこそ有難う御座います」涙が溢れ感激の握手をした。

懇切な祝辞を頂き、私がかつて平成七年に、路郎賞準優秀賞を頂いたとき、

「来た道に残して置こう花の種」

この句を直筆の色紙を押し頂いた。句会も一段と盛り上がり華を添えて頂いた。

先生の温顔は私の眼裏から永久に消えることはないと自負している。

先生の志は川柳塔誌に「檸檬抄」として残り、不朽に柳誌を飾ることだろう。何時までも『川柳塔』の発展を見守って下さい……。

合掌

勝負師

新家 完司

わずか二回だけであるが、麻雀の仲間に入れて頂いたことがある。一度目は、弓削川柳社主催の西日本川柳大会前夜祭のあと。会場近くの恒弘衛山さん宅で泊めて頂いた時のこと。他のメンバーは、河内天笑さん、寺尾俊平さん、田中好啓さん、ではなかったか。二番抜けの五人打ちであったと記憶している。二度目は夜市川柳大会懇親会後、天笑さんのご自宅で、同じメンバーであったような気がする。

薫風先生の打ち方は端正でスッキリしていたが、勝負所では大胆に切り込んでくる「勝負師」という印象が強かった。いずれも、酒が入った後であったが、雑なところや浮ついたところは片鱗もなく、緻密でありながら偶然性の強い「ゲーム」そのものを心から楽しんでおられた。麻雀は俗っぽい遊びであるが、先生が穏やかに興じておられた姿は、まさに「清遊」という風情であった。酒が入ると大雑把な打ち方になる私は、二度とも見事に負けてしまった。

天笑さん宅では徹夜に近かったが、明け方に少し仮眠させて頂き、帰宅途中に豊中の自宅までお送りした。

それからしばらくして、横山大観が終生愛したという広島銘酒「酔心」が送られてきた。スッキリ端正ではあるが、キリツとした勝負師の切れ味がする薫り高い酒であった。

善哉の想い出

太田 昭

豊中市役所から少し南に入った所に大塚古墳がある。今は大塚公園として、住民の憩いの場となっているが、その公園と道を挟んだ西側に橋高マンションが建っている。

壁に刻まれた特徴ある「橋高マンション」の文字は、在りし日の先生の書かれたものであるが、先生が亡くなられてからはその文字を目にする機会もなくなった。

先生のご自宅に伺わせて頂くと、ご自宅近くの、先生がお気に入りの喫茶店に「一緒することが多かった。喫茶店は、気さくなママの居る手頃な明るい店だった。

「ママ、わたしにもこんな上品な仲間がいるんだよ」。先生ははにかみながら、しがな

い私を取って「仲間」とご紹介して下さったのは、もう何年も前のことになる。

いつも通り、王子の付いたモーニングセットを口に運びながら川柳文学を若々しく語られ、時には厳しく私の句をご批評下さった。

喫茶店からの帰り道、「そのうちに家を模様替えて、皆で川柳談議の出来るサロン風の部屋を造りたい」、と言っておられたのが、その後完成した川柳サロンで、飲みたいものをそれぞれが勝手に飲みながら先生を囲み、薫風川柳談議をお聞きすることが出来なかつたことが本心に心残りではない。

「君は酒を止めたから、また善哉を買っておいだよ」、帰りにはいつも善哉二袋を持たせて下さった。

善哉とコーヒーがお好きな先生の口から迸る、先生ならではの鋭い現代川柳作品への批判、川柳と人間陶冶の理想に懸けるあのエネルギーが、胃半分肺半分の先生の一体どこに潜んでいたのであらうか。

「もともと自身自身の句を創れ」「川柳の三要素を見失うな」先生のお叱りがいつまでも心の底に残ります。

昼寝覚めポトリと極楽へ墜ちる

先生が病床で詠まれた句をしみじみと噛み締めつつ、在りし日の先生を偲びたい。

薫風讃歌

田岡 九好

薫風先生の作品の魅力はあ得多用される漢字漢語の中にある。師は難解な漢字漢語を自家薬籠中の物とされ、それを殊更なものでなくごく自然に使ってあの端正にして風韻のある句を生み出された。恐らくそれらの漢字漢語は師の心の中の言語として常に胸中に満ち溢れていたように思われる。師の句を読む時しばしば辞書の力を借りねばならない。しかしそれで一句の意味をほぼ了解し終えたと思つた時、言い様のない満足感に浸る。

「踏鞴踏む阿形叶人間座」などは最初は理解しようとする努力も放棄しかけたが、漸くにして「勢い余ってつんのめるさまさまな形の人間の姿」くらしい所に理解が到達して何となく嬉しくなった。間違ひであつてもいい、如是我聞ならぬ我是くの如く味わえり、師の至芸、師の醸し出される美酒に酔いしれているだけだいいと思つている。

「断崖絶壁断崖絶壁冬の恋」四字熟語のりフレイクなどあまり見かけないのだが師は敢えて使い、その結果の破調をも却って利用す

る形で追いつめられた冬の恋を描き出された。「梅熟し艶而後已」(たおれてしこうしてのちにやむ)も難解である。これは「全句索引」の註が役に立った。藤田東湖の漢誌だという。東湖は水戸の人、そこで梅が生きてくる。「機は熟してきた。ままよ倒れるまでやるしかない」と。艶而後已は更に溯れば中国の古典の礼記からのものであるらしい。漢語にはこういう歴史の重層性があつて楽しい。

歴史といへば「五十年花径遙かに香炉峰」という名句がある。香炉峰は白居易から清少納言の故事で有名だが、この名山は師の目指される詩の世界であり、五十年にわたつてそこへ至る径を辿つてきたが、まだ遙かなことよという詠嘆であろう。このように師の句のどれをとつてみても、見事な措辞構成が見られ私の酩酊は止まる所がない。

先生の置き土産

高瀬 霜石

去年の暮れのこと。「一番撃わかくさ川柳会」の内藤光枝さんという方から、突然、鑑賞文の依頼がきた。知らない人だ。おそるおそる手紙を読んで、どうにか記憶が繋がった。

去年の七月七日の、あの薫風先生の追悼句会と偲ぶ会の時のことだった。僕と彼女は偶然隣合わせに座り、いろいろ話をした(らしい)のだ。あーあ、酔つ払いはイヤだねえ。まーるで覚えていないのだ。しかし、これも薫風先生のお引き合わせである。僕でもよければということを書いてくれ、光枝さんは今頃大いに後悔していることだろう。

薫風先生の最晩年(今思えばだが)の思い出は、先生が選考委員をされていた「乙賞」の選考結果に関することでの電話だった。

「霜石さん。本当は、青森県のことには、五楽庵先生に、電話すればいいんやろけど、ついアンタに電話してしまうた」とおっしゃる。

雲の上の人の突然の肉声に、僕は電話口で三角定規のように突つ立っていた。

青森県に霜石。この図を連想してくれただけで感激いっぱいのは、先生の話をじっくり聞いて納得した。乙賞の選考結果の原稿を送るうにも、なかなか思うにまかせないので、ついではこの際、君に頼みたいのだがどうかということなのだ。

こっちにしてみればお安い御用。先生の原稿を先方にきちんと送り、先生にもその旨を報告し、次回からの正しい連絡先をでっかくファックスした。これで一応安心である。

その後また、薫風先生から電話。依頼は前回と寸分違わないのに少なからず驚いた。先生は僕のファックスをまるで見ていないのかなと思つたけれど、前回と同様に素直に受けた。先生の原稿は、やっぱり完璧であった。

僕は、数年前に「路郎賞」を頂戴してからなんとなく目標を失っていたが、先生の乙賞の真面目な選評を都合二回きちんと読んだ思い出に、初めて乙賞へ応募してみようと思つた。その三十句に、今、挑戦中である。

約 束

柿花和夫

故垂井葵水の妻、千寿子に誘われて、母の柿花紀美女が川柳を始めたのはもう四十年前のことです。子育ても一段落した母が、各地の句会へ妹の千寿子と出掛けるようになり、川柳に無縁の私にも川柳が身近に思えるようになりました。

句会での成績を楽しそうに私や私の妻に話す中に、薫風先生のお名前がよく出てまいりました。

たまたま朝日新聞のなにわ柳壇で先生が選者であるのを知り、昭和六十一年十一月に投

句した句が初入選いたしました。

本格的に投句するようになったのは平成十一年からです。いくつか入選したのち、ある句会で先生が母に私との関係を尋ねられ、「毎週投句するように言っして下さい」と言われたのです。母からそのことを伝え聞き、先生の言葉を励みに、毎週投句しておりました。やがて、朝日カルチャーの川柳研究会で先生に直接ご指導を受ける機会に恵まれました。

初心者にはやさしく丁寧な、ベテランにはやんわり厳しく指導され、講座の出席者全員先生のお人柄にひかれ、川柳の虜になっていたように思えます。出席者の多くの方が「えらいもんに手を染めてしまった。もう抜けられへんな」とうれしそうにはやくのを聞きました。もちろん私もその中の一人です。

カルチャーセンターのロビーで先生に句集のことでご相談することがあります。朝日なわ柳壇の「同窓会抄第十一集」に母と私の句が同時に載っていたことから「いつか親子句集を出したいと思っってます」と切り出しますと、先生は「あんなさん、それはええことや、早よ出しなはれ」と言われました。「句集なんてまだ早い」と言われると想像しておりましたのに。母がまだ私の名前を忘れないいうちに、なんとかしたいと思うこの頃です。

薫風名譽主幹との接点

小西雄々

川柳雑誌社の米子支部として松露川柳会が誕生したのは、昭和三十年一月で、今年で五十周年も過ぎた。当時の鳥取川柳会は、森田茗人、大西八歩、川村日満の三氏を軸として、鳥取県の柳界をリードされていきました。

三十代前後を中心とした私達は「鳥取に追いつけ、追い越せ」を合言葉に、精進を重ね一歩ずつ前進を続けていきました。

ところが、昭和三十五年の十月句会に、突然、橋高薫風子をリーダーに、相河すすむ、菱田満秋、樋口舟遊、門永三舟の五氏が句会に参加され、句会はこの上もなく盛り上がりました。明和川柳研究会の所属で、前日は鳥取川柳会の句会へ出席したとの事でした。

当時を思い出すため、川柳雑誌と柳誌の川柳松露を探したが、去る平成十二年十月の鳥取県西部大地震で書齋にしていた二階は壊滅し、沢山の柳誌を失ったが、幸運にも川柳塔と共に無傷で残っていました。川柳松露の翌十一月号には、詳細にこの句会の模様を記載しています。早速、薫風子氏（のちに薫風）

とすむ氏に兼題の選をしていただきました。これがご縁で薫風氏には親近感を覚え、後年、川柳塔まつり、山陰地方の川柳大会で選者としてご出席の時は、必ずご挨拶をさせていただきましたが、ある時「山陰の川柳大会では、何時も雄々さんに出会いますなあ……」と言われたのを、今も覚えていいます。

また、平成二年九月、私が川柳句集「松露」を発刊した時の記念川柳大会には、当時の某主幹と共に、理事長の要職にあつた薫風氏をはじめ、幹部の方々にもご出席をいただきました。そして薫風氏には心の温まる柳話をしていただきましたが、ビデオに撮りましたので時折これを見ては思い出しています。

貴公子然とした橋高薫風名譽主幹の、在りし日のお姿は儼然と消えませんが。

松露川柳句会で発表された中から一句
その眼鏡その声はまだ生き続け 薫風
天空から川柳塔を見守つて下さい。

追憶

米田恭昌

「あんなさん今出れまっかか師の誘い」昭和六十二年秋、突然薬局をしていた拙宅に薫風

先生から電話を頂いた。正倉院展へのお誘いだった。飛火野でわらび餅を食べたりしたのも昨日のようだ。

その年の春、ひよんな事から先生のNHK教室に入門したわけだが、二年目位から秋の吟行は一泊が恒例となり、先生との旅行の記録が、写真にビデオテープに随分と残っている。レンズを向けると先生は茶目つ気たっぷりおどけておられた。カラオケでは「アカシヤの雨が止む時」がお好きで、一度私がマイクに割り込み、叱られた事があったのも懐しい。ある日、「今日銀行で君の娘さんに会った。さては美人局かと思った。」とユーモア一杯のハガキが来た。先生を知るはずもない娘だが、ビデオや写真でよく見知っていて挨拶したらしい。

妻の個展に奥様とわざわざ奈良まで来られた事もあった。そのお札の意味もあって、依頼された白鳥町句碑建立記念ツアーのビデオ撮りをお引受けした。先生は私の指示通り歩き、動いて下さったし、また葉先生と共に句を朗詠し協力して下さいました。お陰で私の自信作のビデオとなった。

平成十五年秋、拙句集発刊の打合せのため梅田でお会いした。「雨の午後師と二人してキリタンボ」何しろ地下街不案内の私の帰途

を氣遣ってJR駅近くまで送って下さった。筆まで茶目つ気、心遣いの細やかなそんな先生だった。平成十七年三月、吹田での川柳大会を中座し、豊中の病院に先生を見舞った。日曜日だったがどなたも居られず、先生は高校野球球を見ておられた。

喉が渇くとて、氷菓子をしゃぶりしゃぶりしながら二時間も何かとお話をした。それが最後となった。その冬「健康に暮らせ」と五色豆が先生から送られて来てた。

今もたとえご病身でも豊中に居られるのでは一とそんな気がし、心安まるのは先生の持つカリスマ性というものだろうか。目下私は先生の追憶ビデオを編集中で、いつも画面の先生とお会いしているからだろうか、懐かしさ一人である。

薫風おじさま

西村 哲夫

檸檬見てともに語らう人と居る 哲夫
会いたくなれば句集開くだけ

今ここで「偲ぶ」という言葉は、なぜか遠う感があるのは私だけではなからうと思う。最初（再会）の一声は「目玉だけがぎよるとした、編集の邪魔はかりしていた小倅が

大きくなったもんや」である。この小倅こそ何を隠そう私めである。

「てにをは」が一字違えばその人の句でなくなるかと、添削を嫌った路郎から何を学んで行かれたのであるうか。そこには計り知れないご苦労があったに違いない。たった六年間の師弟関係で、ここまで路郎に近いお方はおられない。師匠から怒鳴られ、冷たく厳しくあしらわれ、それでも師の句を盗むといえは言葉は悪いが、それは職人が師匠から業を盗むそれに酷似しているように映る。

薫風叔父様（あえてこう呼ばせていただく）が確立された川柳を、自賛する訳ではなく、路郎のいのちを吹き返すが如くに賛美されるお人柄は、流石としか言いようがない。路郎に対する恩を、たくさんの人たちに分け与えることだけに、一生を過ごされたようにも見えてならない。

『川柳雑誌』廃刊の折も、公私共に何かとご苦労なされたことであろう。しかしながら川柳と共にいつも一緒に師と居る薫風叔父様であった。日々、いのちある句を作り続けた巨匠達にとって、その作品いや芸術品一つ一つは、その人そのものとなっていく。「本物は死なず」（私の自論）川柳にいのちを残し、今なお生き続ける路郎と薫風叔父様だ。

今もお路郎路郎と言ってはる 哲夫

敬虔な祈り

井上照子

五十七年の四月から朝日カルチャーセンター川柳講座を受講した。薫風先生とお会いしたのはその時であった。すらりと背が高く細いのでお食事をきちんと摂っていらつしやるのだろうかと失礼なことが頭をよぎった。

後で聞いたことであるが、先生は肺、胃を手術なさったお身であるとのこと、私はこの時からどうかご無理をなさらないようにと、作品をハガキでお出しするたびに、書き添えたのを覚えていた。

私はだんだん川柳にのめりこんで、西宮のローズカレッジに友人が行っているのを、自分も入ることにした。友人が行っているというのには言訳かも知れない、薫風先生のお話が聞けるから通ったという方が正しいと思う。

年が明けた新年の一月十日であったか、西宮戎の神社参拝をしようということになり、参拝後そこで一句作句して先生に選をして頂くことになった。作句のことを考えるとちょっと重荷に感じたが心は弾んでいた。神社に着いて今まで騒いでいた面々も少し弁えて、

小声で話しながら神前に進んだ。先に着いたものから順にお賽銭をボンと投げ入れて、拍手を打って願い事をフツツお願いして、幸せそうな顔で神前から去って行く。

私も同様に欲深にお願いごとといったばい、百円では足りないなど思いながら、ふと振り返ると、薫風先生が私達の後に直立不動で立っでいらつしやる。そしてよく見ると、オーバー、袴巻を足許に置かれ、正式に二礼二拍手一札をなさつていらつしやる。私はドキリとした。オーバーを脱ぐどころか、毛糸のキャップもつけたまま、私だけではない回りをみると誰もオーバーを脱いだ人はいない。私は側に居た友達に、「ヒヤードーしよう。恥ずかしいことをしたわね」とは言葉もなかった。先生は礼拝を済まされると何でもなかったように、袴巻、オーバーを身に着けられ、私達の行動については何も仰しやらなかった。「句は出来ましたか。お茶を頂きながら、句会をしましょ」

私は寒い中、スーツ姿で真剣に礼拝なさつておられたあの敬虔なお姿、尊く、神々しく拝見したこと、そして後の句会で一人ずつ丁寧なご指導のあったことを、二十数年も経た今でもはつきりと目の中に、頭の中に残り、忘れることはない。

薫風抄

朝顔のファンファーレの中僕は生まれた
石くれも三つ積んだら思惟の塔
兎の目ほどのしずかな恋ころ
大文字 恋のはじめのごとく点々
秋の恋 受各話器の奥で時計鳴る
足摺の雨は遍路へ地から降る
海鳴りへ標本室の貝の耳
鯉のほり氏素性なき爽やかさ
おのずから五七五の独り言
軽い嘘種なし葡萄食べながら
冬の酒 唐竹割りに胃へ落ちる
キリストの肋に似たる昼寝をし
初盆の胡瓜の馬は師に似たり
コスモスのほつたらかしの美しさ
風花す 雪子が髪を梳くらしく
革命さをはじめてコーラ飲んだ日は
都会の夜セロリは母の香に似たり
母刀自の在せし頃の御御御汁
極月やわが父の死を立話
八十になったら恋をしてみよう
春眠のそのまま覚めぬ死もあらん
僕の富レモン一個を棺に入れよ
魂魄を天地に分ちグッドバイ

愛染帖

新家 完司 選

大阪府 小栢こずえ
省エネになると思つて朝寝する

(評) なるほど、寝ていると電気もガスも使わない。ウォームピズより確かな省エネ。

三田市 堀 正和
スタミナが無いので夫婦喧嘩せぬ

(評) 夫婦喧嘩は長丁場になることが多いのでエネルギーが要る。極力避けたほうが賢明。

東かがわ市 池内かおり
銀行でトイレを借りた事がない

(評) 確かに借りにくい。銀行も百貨店並のサービス精神と、客用のきれいなトイレを。

三田市 北野 哲男
古稀こえて余計ふくらむ名譽欲

(評) 老人ボケも大変だが、いつまでも欲に振り回されるのも難儀なものである。

和歌山市 田中 みね
雅子妃をふと思いやるあれやこれ

(評) 報道されている「あれやこれ」以外にも、もつともつとおありなのだろう。

西宮市 片山 忠
この辺で許してやろう死んだから

和歌山市 木本 朱夏
義理チョコの数がわたしのテリトリー

高槻市 乙倉 武史
犬に躰自分のことは棚に上げ

西宮市 門谷たず子
背が丸くなるので空を見て歩く

大洲市 花岡 順子
少しだけ待たねば開かぬ自動ドア

鳥取市 岸本 宏章
金持ちは金でけじめをつけたがる

橋原市 居谷真理子
やに臭い男となつて帰省の子

和歌山市 古久保和子
おしぼりで手拭く顔拭く首も拭く

東大阪市 谷口 義
七十代はなかなか奥が深そうだ

シドニー 坂上のり子
法律がなければ人は何をする

枚方市 海老池 洋
人間の都合で犬がつながれる

鳥取市 土橋 螢
少子化へ掴みどころのないはなし

人の世に花の匂いのする弥生

八尾市 高杉 千歩
歳相应ですよと嫁が慰める
颯爽ともう歩けない街あかり

東かがわ市 川崎ひかり
越えられぬ山は登らず回り道

夫婦して葬儀の話題多くなる
外国のペットボトルが岸に着く

藤井寺市 鈴木いさお
余生とはしんどいものよエンヤコラ

そりやあまあ少し位はワルもした
堺市 志田 千代

腕まくりしようと思かけ御飯
愛煙家の奥様らしいにおいする

太陽が射せば貧しい個所がある
和歌山県 辻内 次根

本当の傘の値打ちは俄雨
倉吉市 野口 節子

大きな手貸してくださいとなたでも
凧よ吹くな細い夫がいる

海南市 三宅 保州
愛という字の画数の重たさよ

私を離れて行ったさりの愁
和歌山市 桜井 千秀

お元気ですか日々泣き笑いしてますか
ペランダのふとんもやはり一人ぶん

松原市 玉置 重人
チャイナ製電子辞書からつきよまで

ポックリと逝きたいなんて欲深い
八王子市 播本 充子

夫には夫の想い丸い月
寿限無寿限無銀行名に悩まされ

はつてあるきよのメニユーを見て起きる
立春の蘭志あふれるさくら草

仕切り屋の妻が元気でいて平和
毎日が命びろいと言ふ米寿

時々は領いておく妻の愚痴
会社にもいた偉大なるイエスマン

彦根城あれが最後のフルムーン
枕元いつも懐中ライト置く

粗衣粗食無垢な木組の家に住む
しんどいね番号順に待つ病院

大寒波左脳しばらく冬ごもり
行く当てがあつて髭剃り念入りに

煩惱がまた揺れだした春うらら
春ですな豊かな猫の首の鈴

裏庭でキャベツをつくるトンカツ屋
悲喜劇が自由に家を出入りする

小谷 小雪
澤田 和重
村上 玄也
松本よしえ
板東 倫子
福原 悦子
宗 水笑
前 たもつ

けしかける妻がいるから靴を履く
この雪がとけたら里の墓参り

一行で足りる日記を書きそびれ
春は今園児の母の美しさ

気が付くと独りぼっちという自由
たつたふたりでも疲れることがある

プライバシーゆき過ぎらしい孤老の死
こたつから一歩も出ない日もあつた

キッチンに入つて男生きのびる
焼酎で小泉さんをこき下ろす

たこ焼きを一つ頬張る雪の中
音もせず夜降る雪は積もる雪

ふるりは水の重さを知るところ
同窓会去年も一人逝きました

田辺 鹿太
土橋 睦子
高橋 岳水
加島 由一
田中 すす
喜田 准一
井上 勝規
淡路ゆり子
村上ミツ子
川原 章久
川本 畔

松江市 竹信 照彦
鳥取県 森下 一知
和歌山市 山口三千代

時どきは亡母に逢いたくバスに乗る
重箱の隅もときどきつつかねば

マイナスは嫌いだ冬の気温とさえ
正月に生まれたからか厚着癖

夫にはまだまだ襦袢着せませぬ
おき焼く母のあかぎれ思い出す

達筆の賀状誰だか分からない
やんわりと軋んだはずが救急車

春一番待つて田んぼに鉄入れる
マニユアルの通りこわごわ飼う小鳥

赤ちゃんの駆け込み寺はおじいちゃん
警官が一人立つてる下校道

健康に良いと涙を流してる
掴み取り欲一杯に手を拵け

津村志華子
籠島 恵子
高野 宵草
春城武庫坊
緒方美津子
春城 年代
樋口 輝夫
岩崎 公誠
福西 茶子
井丸 昌紀
秦女

大谷 篤子
五月
小池 幸子

NHKだから浪曲やっている
横浜市 金森 徳三

さりげなく座席を譲るシャイな男
東大阪市 北村 賢子

祝杯を上げよう今日も無事暮れた
鳥取市 永原 昌鼓

お願まで私服になった退社ベル
宇部市 平田 実男

一年無事災害用のパン食べる
大阪市 渡部さとし

旅人は雪のむごさを知らず褒め
鳥取県 石谷美恵子

伴助が咲いたが主はかくれんぼ
米子市 青戸 田鶴

寝て果報待つが一向気配なし
河内長野市 坂上 淳司

人事でない冬の夜の救急車
京都市 高島 啓子

白内障にふさわしい歳となり
芦屋市 黒田 能子

背凭れに背中預けて考える
三田市 石原 歳子

月に三度日替わりランチ食べに出る
和歌山県 森下よりこ

会釈して昔の妻と擦れ違ふ
和歌山市 寒川 武

車椅子押ししてる人も腰曲がり
岸和田市 雪本 珠子

微笑みを返して誤解されている
弘前市 福士 慕情

深呼吸酸素が身体中踊る
境港市 遠藤那珂子

貧乏のせいか髪までよく伸びる
鳥取市 有沢せつ子

色褪せているけど元は赤い糸
吹田市 穴吹 尚士

携帯をじつと見ている待っている
寝屋川市 太田とし子

捻子うまく締めてゆるめて生き上手
八尾市 吉村 一風

ポリウムをあげて私の隠す
羽曳野市 徳山みつこ

春めいてラジオのジャズが跳ね回る
池田市 北出 北朗

あちこちがむずむず春へ騒ぎ出す
鳥取市 春木圭一郎

金で売る心も持っているわたし
浜松市 杉浦 恵夢

靴をはく捻子をキリツとしめなおし
西宮市 西口いわゑ

反対も応援もする親だから
鳥取市 西川 和子

老母まね葉に日付打ってます
八尾市 田邊 浩三

凡人が駄犬と楽し散歩道
黒石市 相馬 一花

好きだから沢山炊いてお裾分け
大阪市 津守 柳伸

王様のように振る舞う三歳児
八尾市 中島 春江

笑ったり泣いたりテレビ見てる妻
鳥取市 中宇地秀四

外は雪暖房の中爪伸びる
松江市 津川 紫晃

エリートのお祝電がくるクラス会
尼崎市 山田 耕治

湯たんぽを復活させた原油高
鳥取市 岸本 孝子

ささやかに蜜豆缶でペースデー
寝屋川市 平松かすみ

針穴に糸が通らぬような恋
鳥取市 夏目 一粹

七十年都会の隅で寝転がり
和泉市 西岡 洛醉

アイライクユーと孫はいつまで言うだろうか
東京都 岸野あやめ

豆撒きも大人ばかりで興が無い
藤井寺市 若松 雅枝

老人力腕立て伏せを二十回
大阪市 三浦千津子

晩年の孤独紛らす猫がいる
鳥取市 録沢 風花

オーイ空私の風邪を吸い取って
大阪市 松尾柳右子

誹風柳多留一篇研究 8

美人に対する古手のやつかみ。

小栗 山口説贊。正体を探索しているのではなく、新入りに対する悪口として「小便組」を使った。

清 同。

47 一トたびゑめば母おやへ扶持が来る

柳水連石斧

増田 媚笑という得意技をつかいさえずれば、実家の母親へも扶持をさしむけることができる。前の句と同じく、上層武家の妾の風俗を諷するもの。「…一朝選在君主側 廻眸一笑百媚生 六宮粉黛無顔色…」(「長恨歌」)

山口 贊。兄も十分。
小栗 贊。文句取。
二十けん一トたびゑめば百とれる 二二29

清 贊。

48 芝の戸を出れハ四ツ手はついて来る

若竹連狸仲

増田 芝の戸は、古くからの草庵の雅語でしようが、ここではその響きを利かして芝原限の木戸の意。あるいは高輪大木戸とすべきで

45 手と足のよつ程長い鏡とき 柳水連石斧

山田 ガラス製の鏡は文化期の初め頃から出回り始めたが、それまでは銅鏡だった。だから曇りやすく、専門の鏡磨ぎが居た。鏡磨ぎは大半、越中加賀の国からの出稼ぎだったようだが、川柳では、薄汚れた粗末な着物を着た老人ということになっている。

壹反をふたありて着しか、見とき

天七85

この句のように、腕や脛まで短い、いわゆるつんつるてんの着物を着ているのが多かったようだ。それゆえ、「手と足のよつほど長い」ように見えるのだ。

山口 贊。鏡磨ぎの風体をからかっている。

山田 昭夫・増田 忠彦
山口 由昭・小栗 清 吾
伊吹 和男
清 博美

清 贊。

46 手水組でハ無イかなと局いひ 桜木連如雀

増田 小便を江戸の女性は手水(ちようず)といったようで、手水組はそれを業とする一党通称小便組のいいかえ。妾奉公を稼業として生きる者のうちに、就職後間もなく「夜尿症」を装って支度金を失敬して渡り歩く者があつたとされる。「殿様の側めに上がったのは、どうもおぼこ娘ではないようだ。あの手水組ではなからうか」と、奥女中がいつている。

山口 贊。「小便組」という所を殿中ですから上品に「手水組」といったのでしよう。小便組は美人が多いと聞きますから、新入りの

しょうか。その芝の戸を過ぎると町駕籠がついてくる。この時刻ここから南に行くのは品川泊まりだなど目星をつけられる。客は増上寺の「山」さんというのでしょうか。木戸脇は町駕籠の客待ち場所の一つでした。

な浅黄だけに紅麻といったところ」とありま

ふんとしのさらひな男暮ハつよし 拾九三
寛仁大度ふんどしさらひ也 安六五
たいこもちもちとふんとしとハさらひ 天二八五

武一五七

ふんどしさらひ氣に弓ハなし

ケイ六四

山口 高輪の大木戸でしょう。
小栗 「大木戸」をいう必要はないのでは。「芝の戸」が言いたかったというだけ。
清 賛。

50 馬鹿斗いつて鼓をたたく也 養老連長笑

増田 万歳でふざけ役の才蔵の姿。

山口 賛。

おつかけるやうに才蔵わらわせる

明五九〇

小栗 礎説でつじつまがあうが、雨譚の句だけに、それだけかどうが不安。礎稿のあげられた例句を見ると、「ふんどし嫌い」という人に特定のイメージがありそうな気がする。遊び人か。

山田 俚諺「褌を締める」を利かしたものであろう。褌をしつかり締めているような「きつとした顔」なのに意外や意外褌が嫌いな男。

小栗 賛。
鼓より才蔵口をた、くなり

二四一〇

清 賛。

51 きつとした顔てふんとしきらひ也

柳水連雨譚

52 下女か色とし男が五六人 養老連鼠十

増田 紅麻は(こうあさ・「べにあさ」でも立項)「くれない色に染めた麻布。また、それで作ったもの」(『日国』)。
この「紅麻」は私にはなじみのない語で、以下は見当の解。ご教示をお願いします。まず第六感子の頭に浮かんだのは、
飛鳥山浅黄の頭巾安いしやれ 三七

増田 この褌は男のする六尺でしょう。すきなくきちつと取り澄ました顔をしていながら、六尺をしめるのは嫌いな男というようです。「いろいろがあり」といった前句につき

そうです。褌嫌いの句を並べておきます。

ふんとしのさらひな人ハくろうなし

ふんとしのさらひな人ハくろうなし

清 賛。

増田 下女の恋、色ごと、それは愛しい男が五六人いるというやつさ、というのでしょうか。
山口 下女は川柳の世界では博愛主義。みんな愛しいと思っっているのでしょうか。
小栗 同右。肯定的に見ている気がする。
二世迄のやくそくか下女五六人 安九智五

清 賛。

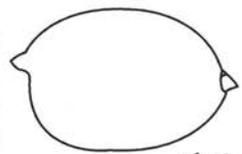
関西古川柳研究会の略解は「たんだ手拭いを頭や肩などにのせるのを置手拭という。江戸っ子なら白地に藍染めの手拭だが、野暮

共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)



レモン

「机」 仁部 四郎 選

おばあちゃんが机売場で迷つてる
 抽き出しに鍵かけてある子の机
 お下がりの机で光る次男坊
 机上では辻褃あつていた話
 よいことがあつた机に花一輪
 酔えばまた机並べた頃のこと
 ラブレター書いた机を使つてる
 お酒のしみもあちこちついている机
 明窓浄机ほは杖ついているばかり
 子は個室パパも机がほしくなる
 私の些小さい文机
 机あるのに寝ころんで読んでいる
 机整頓してアイディアが消えた
 ひと時を机の上の放浪者
 奮闘を机も知つて待つ桜
 早弁も恋路も知つている机

和歌山市 喜田 准一
 三田市 北野 哲男
 松江市 三島 崚丘
 和歌山市 古久保和子
 和歌山市 土屋起世子
 西宮市 秋元 てる
 高槻市 龍本きよし
 寝屋川市 富山ルイ子
 豊中市 安藤寿美子
 芦屋市 黒田 能子
 米子市 青戸 田鶴
 和歌山県 三宅 保州
 松原市 玉置 重人
 和歌山県 辻内 次根
 東かがわ市 赤澤 貞月
 鳥取市 永原 昌鼓

「机」 藤田 泰子 選

子が巢立ち書斎と机取り戻す
 古机墨の匂いがまだ消えず
 空想にふける机と山登り
 片付いた机を今日も見て過こす
 わたくしのシエルターになるこの机
 わたくしの机翼ひろげたあとがある
 卓袱台になり踏み台になる机
 文豪の机だそうだ拜んどこ
 居眠りを誘う悪魔の棲む机
 空論に飽いた机の大あくび
 続編をまた温めている机
 机に向かうまだ青春を書く意欲
 文机光源氏の吐息する
 虚言癖知つているのは机だけ
 ラブレター書いた机が笑つてる
 円卓を囲むと知恵が湧いてくる

堺市 奥 時雄
 吹田市 大谷 篤子
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 豊中市 江見 見清
 堺市 矢倉 五月
 鳥取市 倉益 一瑠
 寝屋川市 坂上 高栄
 橿原市 居谷真理子
 八尾市 山本 宏至
 吹田市 穴吹 尚士
 和歌山県 木村 徑子
 枚方市 寺川 弘一
 大阪府 津守なごさ
 寝屋川市 龍島 恵子
 鳥取市 山岡 紀子
 神戸市 両川 無限

分校の机落書あたたかい
 勉強はしなすがちやんとある机
 仕事せぬ順に大きくなる机
 明け渡す机きれいに拭いておく
 傾いた机で秘密漏れてくる
 独房の机の位置は決つてる
 続編をまた温めている机
 ちらかつた机の端に胃の葉
 物置じゃないよと机つぶやいて
 粉飾した日記机の上に置く
 国民の暮らし机上で決められる
 机上論まさかの闇を語らない
 家計簿を裏から読んでいる机
 頼杖の背中机が押してくれ
 叩いてはみたが机は答えない
 百点を生んでいましたリング箱
 三者面談小さい机にかしこまる
 少年の夢世界地図がある机
 ぴかぴかの机に未来てんこ盛る

秀句

ジレンマに陥る福祉課の机
 テレビ台になつて久しい文机
 好きな子と机並べてから光る
 軸吟
 机さん国の姿が見えますか

大阪市 津守 柳伸
 竹原市 正畑 半寛
 鳥取県 小西 雄々
 大和郡山市 坊農 柳弘
 東大阪市 森下 愛論
 大阪市 前 たもつ
 和歌山県 木村 徑子
 泉佐野市 稲葉 洋
 大阪市 古今堂蕉子
 大阪市 大川 桃花
 大阪市 中井 萌
 高槻市 富田 美義
 香南市 桑名 孝雄
 長岡京市 山田 葉子
 鳥取市 中村 金祥
 橿原市 安土 理恵
 佐渡市 高野 不二
 熊本市 永田 俊子
 香芝市 大内 朝子
 八王子市 播本 充子
 八尾市 田邊 浩三
 神戸市 山口 光久

履歴書を書いた机で書く辞表
 満点でなくてもいいと言う机
 乱雑な机に温い詩がある
 窓際の机瞑想ばかりする
 明窓浄机ほは杖ついているばかり
 慰謝料が億なら判をつく机
 円卓にして誇々の民主主義
 窓際の机にもある自尊心
 医者机命いっばい乗つている
 ジレンマに陥る福祉課の机
 机上では地震はこない設計図
 子育てをしない人の机上論
 古机話相手をしてくれる
 麦飯の弁当を知る木の机
 又三郎の落書たろう木の机
 廃校の机が人を恋しがる
 独房の机の位置は決つてる
 談合の一部始終を知るデスク
 虚と実が巡る卓上論の中

秀句

百点を生んでいましたリング箱
 極まればどんと動かぬ木の机
 置き場所を変えると生きる古机
 軸吟
 晩学につれづれ草を書く机

大阪市 鶴田 遠野
 相生市 村木 信子
 倉吉市 最上 和枝
 藤井寺市 太田扶美代
 豊中市 安藤寿美子
 富田林市 片岡智恵子
 佐倉市 岡井やすお
 岸和田市 中岡 香代
 取手市 葛西 清
 八王子市 播本 充子
 鳥取市 福西 茶子
 和泉市 横山 捷也
 大阪府 神野千恵子
 堺市 加島 由一
 和歌山県 古久保和子
 尼崎市 田辺 鹿太
 大阪市 前 たもつ
 大和郡山市 坊農 柳弘
 藤井寺市 高田美代子
 橿原市 安土 理恵
 西宮市 牧淵富喜子
 今治市 渡邊伊津志

希

村上 直樹選



東京で頑張ってますのぞみです
願わくば桜の下でポッキリ死
若者のこどもが欲しい過疎の村
父にまだ敗者復活戦がある
カモメのジョナサンと翔んでみたい海
夢の話すると長い夜になる
ランドセル売場に未知数が弾む
ガンなんてまればと高を括り吸う
凶報は希吉報は希の希
希にみる張り切りようだ何かある
希にみる美人だ妻と思えない
無謀にも希には妻と口喧嘩
飼いかもまれに野性に戻ります
洋服も化粧も希な母だった
これは希有息子がくれたお小遣い
古書市で手にしただけの希観本
妥協ぐせについて希薄なシルエツト
棒グラフ空気希薄になる職場
繋がり希薄な空気に覗かれる
子等想い敢えて希薄の情に立つ
古希の坂父にも越えてはしかつた
古希悠々日に三合のコップ酒

あやめ 北朗 栄呼 権悟 扶美代 充子 忠 洋 黒修 志代 慕情 シマ子 強一 桃葉 蜂朗 一知 末吉 半覚 柳弘

杖となり目となり生きる古希と喜寿
希望する道に踏み絵が置いてある
希望まだ捨てず五七五の虫
残された希望を胸に万歩計
ラストチャンス妻の希望は聞いてない
豪雪に希望の春を待つ花芽
ハードルを越えた辺りで湧く希望
雑学の向こうにたんとある希望
希少価値メカを尻目に宮大工
やな世相正直者が希少価値
祭日の日の丸今や希少価値
美しい日本語話す希少価値
亭主閑白今では希少の値打ちかも
頑固親父混沌の世の希少価値
身の錆を落とす希少価値がある
佳
あどけない希望が跳ねるランドセル
まだ希望あるから叩く愛の鞭
センバツに夢を持たせた希望枠
統技のシナリオを練る古希のペン
平和希求この旗だけは降ろせない
人
豆の蔓その天辺にある未来
私という私の希少価値
天
春はいい希望が全部叶いそう
軸
呱呱の声希望みなぎる朝ぼらけ
鐘造 一花 一壺 一風 隆盛 清悦 弥生 孔一 たん吉 いさお 幸雀 ひかり みつこ 千里 志華子 一粹 時雄 あずま 東吉 たず子 幸子 花岡順子

ともだち

榎本日の出選



好きだからずつとずうつとおともだち
ライブドアみんな友達だったはず
遠くから手を上げ友が駆けてくる
勲章をもらって友が寄りつかぬ
喧嘩してやっつと友達らしくなり
親友と思っていたは自分だけ
ずるずると元ともだちという夫婦
悪友にこき下ろされた披露宴
草も木ともだちにして元気もの
有名になると旧友くと増え
ともだちはみんなおんなじ彩になる
年賀状だけになっても友は友
ともだちをどつさり持っている握手
一言の多い友だが続いている
妻どうし夫どうしでおともだち
老い一人流れる雲も友として
馬二頭ともだちらしい都井岬
アリバイを作ってくれる友がいる
水遊び蝶もともだち連れて来る
辛口の友がヒントの指南役
ともだちが去って悪友だけになり
休肝日飲もか飲もかと友が来る
理恵 章子 可住 時雄 北朗 輝夫 ばっは 玄也 深雪 充子 碧 幸雀 富子 蕉子 恭昌 藤朗 孝一 伊津志 かずみ 雅明 淳司

初歩教室

題一揺れる

三宅保州

作者が存在する時事吟を

今回、次のような時事吟をいただきました。

「懐妊のニユースに揺れる水田町
国会を揺らす紀子様」懐妊

九条の定義へ揺れるイラク征き

大国の吐息が揺する日本株

軸足が揺れて暗雲ヒルズ族

天下りゆれてころげて地獄行き

残念ながら何れも、新聞の見出し的ないわ

ゆる説明しただけの句になっています。時事

吟が低くみられる風潮がある原因は、事実を

詠むだけの句と、何年か後には句意のわから

ぬ命の短い句が多いことにあります。さらに、

駄洒落・語呂合わせの一部のマスコミ時事

吟、サラリーマン川柳がそれに拍車を掛けて

います。時事吟こそ、川柳本来の風刺、穿ち

の利いた訴え、批判、感激等を詠み込んだ作

者自身の存在感のある佳句を詠んでほしいも

のです。(手と足をもいだ丸太にしてかへし
鶴彬)は時事吟の鑑だと思えます。

【添削・批評句】

原 半年の役目「苦勞垂れて揺れ 乃りこ

何のことが主語がほしい。簾のことでか。

添 風鈴もすだれも吊って夏を待つ

原 揺れ動く時代の波に乗れぬ老 (古)節 子

「乗れぬ老い」は淋しすぎるので前向きに

添 揺れ動く時代の波に乗ってみる

原 吾が家計揺さぶる灯油値上げ危機 (白)信 子

「吾が」「危機」を省くとすつきりします。

添 値上がりの石油に家計揺さぶられ

原 冬ざれに山茶花咲いて揺れている 寿々女

俳句調なので作者を存在させて川柳に

添 山茶花も私も揺れて冬ざれる

原 冬木立揺らす風早春気配 弘子

リズムの良いように推こみましょう。

添 早春賦奏でる如く揺れる木々

原 深酒に揺れる体も千鳥足 ミヨノ

深酒、揺れる、体、千鳥足が近すぎます。

添 危なっかしくて見ではおれない千鳥足

原 風のまなまに揺れて揺られてまた弾む 徑子

何が揺られて弾むのですか。例えば

添 風のまなまに揺られて弾む花篝

原 揺れるなら隠し持ち株売り払う タカ子

添 売るべきか売らざるべきか揺れる株

原 九条は不動人心揺れている ただし

添 九条を論じて揺れている世論

原 給油所のセルフ給油で心揺れ 善江

添 初めてのセルフ給油で心揺れ

原 病む窓に花芽が揺れる様を見る 清

添 病む窓に花芽が揺れて春を知る

原 南天の揺れ具合見て服を着る 萌

添 南天の揺れ具合見て衣替え

原 庭の木が揺れて吹くのか春一番 光子

添 春一番受け止めている庭の木々 一

原 春ささ木々を揺らして雨が降る こずえ

添 木々揺らし春一番の暖かみ

原 ブランコに揺られ爺ちゃん二度童衆 美恵子

添 ブランコが好き爺ちゃん二度童衆

原 ブランコを揺りつつ告げた君が好き 雅明

添 ブランコのリズムに乗ってプロポーズ

原 いい気持ちハンモック揺られ寝る 綾乃

添 ハンモックでひととき午睡する至福

原 孫のゆるりかこ揺らしうとうと 賢山

添 揺りかこの孫あやして昼下がり

原 揺れる娘に母はなげだし守り抜く 那珂子

添 揺れている娘を守り通す母

原 血の繋がりがあっても揺れる保証印 寅次郎

添 断りを言えずに揺れる保証印

原 遠からず孫が揺れそな気配する キヨミ

添 遠からず孫も悩みに揺れそうな

原 悟つてもじたばた揺れて検査待つ みち代

添 検査結果待つて心が揺れ動く

原 妻揺れていると全く気がつかぬ 亜希子

添 揺れている心に気づかない夫

原 痛烈な批判へ自負の揺れやまぬ (卍)信子

添 痛烈な批判に揺れる自尊心

原 モナリザは地震の時も微笑んで 順子

添 モナリザは地震のときにどんな顔

原 揺れ動く心にガンと活を入れ 秀四

添 揺れ動く心に活を入れてみる

原 持ち帰り鏡の前でまた揺れる サキ子

添 疑心暗鬼鏡の前でまた揺れる

原 カメラ持ち吊り橋の揺れ留まらず 冷子

添 吊れ橋の揺れに焦点定まらず

原 バーゲンで揺れる心のひもしめる 稔

添 バーゲンに女心が揺すぶられ

原 再会を待つて揺れるよイヤリング 和子

添 揺れながら再会を待つイヤリング

原 子は巢立ち再嫁の勧め心揺れ 松風

添 再婚の勧めに揺れる子も巢立ち

原 余命表揺れる心情で生き伸びる (燭)節子

添 余命表に心揺れつつ生き伸びる

【少し工夫すると佳くなる句】

半額のチラシに揺れるショッピンゲ かずみ
同想句数句の代表句です。
コスモスの揺れをカメラで止めました 藤朗

春にそぐわれないが、カメラで止めるが良い。

プランコに揺られて風とたわむれる 利子

乗り手ないプランコ風が押ししている 満子

「誰もいないときのプランコ風が乗り 永久志」

原 隣席のビンボー揺すりて車酔い 忠子

添 貧乏揺すりの隣に座り酔いました

原 例のない祝に袋揺れ動く

添 如何ほどを包むか揺れる熨斗袋

原 揺れるたびたしかめているイヤリング 千華

添 揺れるたび愛確かめるイヤリング

原 休肝の誓いも夕べ揺れている 孝明

添 休肝の誓いも揺れている夕餉

次五句は傍線の部分を添削しています。

添 何となくカーテンの揺れ見てる午後 のり子

添 イケメンに揺れる気持ちはまだ若い 益子

添 老いてなお心が揺れるブレゼント 映子

添 耐震の危うい家にしがみつくと 宣子

添 揺れていた若い二人も今夫婦 みね代

次三句は上五を結語に置きたい。

蜘蛛の糸木の葉を抱いて風に堪え 貞月

合併後も小さな余震続いている

バス旅行ガイドの声も子守唄 (河)洋子

二校から合格通知心揺れ 智加恵

内定をふたつもらって決めかねる 章司

滑り止めだけが受かった二浪生 百合子

噂だと思えど心揺れている 婦美子

ゆらゆらとしてるあなたを諦める 宏子

イエスノー揺れる心を時が断つ 孔一

思い出が静かに揺れる水面下 つよし

【佳句】

揺れるだけ揺れて柳の強かさ 幸雀

核心を衝かれて揺れるだまし舟 (高)洋子

揺れうごく心押さえて読むお経 きぬ子

親と子の思いが揺れる受験校 千代子

船酔いになるまでに飲むウイスキー 浩三

揺れたならお仕舞よねと高軒 幸

レモンティー二人の愛が揺れている イセ

まだ女甘い言葉に揺れている 起世子

寒暖の間で揺れている蕾 像山

古時計揺れる月日の時差を読む 俊子

【今月の推せん句】

予約した老後の影が揺れている 高木道子

ときどきは君と触れ合うバスの中 早泉早人

老舗だな振り子時計をでんと掛け 岡本昇

蝶々もほどよく揺れる葉に止まる 三谷たん吉

初恋の振り子今でも揺れている 相見柳歩

初恋を比喻した「振り子今でも…」が佳い。

【私の句】

よそ者に限って吊り橋を揺する

ポトルシップ波に揺られる夢を見る

秀句鑑賞

同人吟 太田 扶美代

— 3月号から

金のことになると男がみみっちい

中居 善信

一月の下旬、秀句鑑賞依頼の葉書が舞い込んだ。本来なら、私の手に負える作業ではないと思うのだけれど、長いスランプにある私に勉強をさせていただくチャンスかも…、と、思つて挑戦する事にした。

まず始めに、自分の好きな句、手慣れているというか、テクニクの上手い句、目付けの新鮮な句と色々混ぜて、気の向くままに丸印をつけてみた。結果、五十五句という膨大な数字になつてしまった。

それを無理に理由をつけ、二十句前後に減らさねばならない。どの句も好きで選んだ句であり、どの作者も誌上を通してではあるが、お名前だけは知っているし、親近感を持つていたりする。

なかなか簡単な事ではなかつた。

一度選んだ句ともう一度丁寧に向かい合った。独断と偏見はあるけれど自分の句を作るより頑張つた。私の未熟さゆえ、ここに掲載できなくなつた句も、最後の五十五句には入つていたのでと思し召し、お許し下さい。

誤解したままで根雪になつている

高島 啓子

誤解が解けず、心にしこりを残したまま、月日を重ねてゆくという意味なのでしょう。それを何と上手に川柳にしてみましたのだから、と感心してしまします。

正月に去年の恩を簡条書き

前 たもつ

お世話になつた人をぼんやりと頭に思い巡らすことはありますが。簡条書きということころが何とも誠実で、あたたかい句だと思ひました。

サンプルがよく出来すぎて罪やなあ

岸野 あやめ

サンプルと違う気がして納得できないまま食べる、あの気持なのかな。それともダイエツトなどで、食欲を押さえ切れないほどの見事なサンプルに出合つたのでしょうか。

バスが出る噂半分だけ積んで

神保 坊太郎

面白い句。色々な場面を想像しています。

賽銭を増やし今年にかけて見る

奥村 五月

実はわたしも思うところあって、二年連続賽銭を増やしてみました。今のところ御利益らしきものはいたできておりません。

世の乱れ元はわたしの不心得

田岡 九好

善人である証拠、一人で踏んばってみても仕方がないと思ったり、自分だけでも頑張れば何か少し変わったかもなんて、そんな氣持を詠まれたのでしょうか。

雪ダルマ作れるほどの雪でよい

志田 千代

ホント、ホント雪ダルマ作れる位がちょうどいい。童心にかえしてくれる雪もあれば、被災地にこれでもかと降る憎らしい雪もある。

うぬほれも多少はないと生きられぬ

浅野 房子

そうですね。私もちよつと考えてはみました。多い少ないはあれど、誰でも持つている事はたしかのようです。

失せ物を探す勿体ない時間

吉田 あずき

探し物をしていた時間を、ざっと頭の中で計算することがあります。こんなバカな事をしてないでこの時間をもっと有効に使わねば。

腹立てた事思ひ出す古手帳

安藤 寿美子

先日京都の甥に三人目の子供ができ、慶弔費の手帳を見た。頁を開くと四年前の大失敗

を思い出し、もう一度落ち込んだ。

ライバルがたんといるのでげんきです

北野 哲男

平仮名で敢えて、げんきと書いていらつしやる。鎗を削るほどのライバルでなく、楽しい仲間のようなライバルを想像した。きつと平仮名の効用なのだろう。

おみくじの凶に反発して生きる

大内 朝子

明るくてほのほの、活き活きしている。反発の二字がとても好き。繰り返して読んでいると何故かじんときてしまった。

少子化へお役に立てるものならば

古久保 和子

私流の解釈ならばとてもおもしろい。川柳らしくて大好きだ。けれども作者の意図と違つていては失礼だし、私も恥ずかしいので解説らしきことはひかえさせていただきます。

ワタクシを仕上げる時間下さいな

畑 寛子

本当にそうです。一日一日生きてゆくだけで結構一杯。人生を楽しむ、人間を仕上げる時間、それから親孝行する時間なども別にある時間、それがいなあとと思いませんか？

降り積もる雪音もなく容赦なく

中川 楓

説明はできませんが、訳もなく好きです。

名を聞けばとても抜けない母子草

山本 玲子

山野草をいじっている私にこれは何とも嬉しい句です。山野草の名はみんな素敵で、花よりも先ず、名前に魅せられる事はしばしばあります。

油断すると風邪がどこからでも入る

政岡 日枝子

風ではなくて風邪なんですね。そこが大変面白く川柳らしい表現と思いました。こんなに無理のない句は作るのではなく、きつと日枝子さんのどこから湧いてくるのではないのでしょうか。

辿りついた傘寿の重み噛みしめる

西村 黙光

傘寿になったという句はたくさんありますが辿りつくと、書かれたのは黙光さんだけでした。辿りつくと、傘寿、重み、噛みしめる、の、どの字も全部生きています。

歳らしいあちこち不備が始める

永原 昌鼓

多分同年代なのでしょう。わかりすぎるほどよくわかります。不備が出始めた事への焦りなどもなく、淡々とまるで他人事のような達観した書き方に、魅力を感じました。

秀句鑑賞

—3月号から

福島 万年

急斜面挑戦状がおいてある

田中 ず

急斜面、上で待つのは我が好敵手。「いざ戦わん時至る」鎬矢を放て！太鼓を打て！すず氏の挑発にのってしまいました。武蔵ならどうするだろう。切れのよい句。

自画像のゴッホに熱く見つめられ

森田 明子

ゴッホの黄は情熱、でもその眼の奥にある深い悲しみと狂気、見つめられると堪らなく切なく長くは正視できません。

自画像にいつも見られている絵描き 万年

兄嫁の背に姑を括り付け

森下 一知

これだけ深く深い句を詠まれた一知氏に脱帽、優しいユーモアに支えられています。私も二人の年寄りを看取りました。

介護して絆しっかり見えてくる 万年

相談を受けて口ダンの像になる

岡田 幸生

難問なのかも知れません。「考える人」になつてしまわれた幸生氏。そう言えば日本には「考える」弥勒菩薩がいらつしやいます。あの方ならきつとよい知恵を出して下さいでしょう。

地蔵さん近頃子供見ましたか

赤澤 貞月

お地藏さんに野の花を摘んで供える子供達をよく見掛けたものでしたが近頃は寂しくなりました。もし子供を見掛けたら守つてやつて下さい。

アルバムの剥がした跡に嫉妬する

河野 桃葉

私は迂闊にも見られてしまったのです。アルバムごと消えてしまいました。そうならないうちに自分で整理すべきでした。

それは愛。「剥がした跡」が好い。

花マルを付けて浮き立つカレンダー

金子 美千代

私の家でも月毎のカレンダーがダイニングキッチンに張つてあります。月の終わりに妻が大きなマルを付けます。「浮き立つ」が好い。幸せを絵にしたようです。

日々好日今日に大きなマルをする 万年

心の奥覗けぬままの聴診器

榎本 宏子

患者の話の聞くだけで病気が治ることもあると言います。忙しい先生、忙しい日本人。数値より私を見てよお医者さま 万年

責任のなのは天気予報です

尾崎 黄紅

天気予報は当たらずとも責任者は謝りません。天気予報は素直に聞けません。

丸裸名前だけしかない名刺

神野 千恵子

いちばん格好良い名刺、私もこんな名刺を作りたい。丸裸こそ真の人。

夢は夢今日の日銭は地下足袋で

原 煩悩尼

私たちが忘れかけていた大切なことを教えて下さった煩悩尼氏。夢と地下足袋の取り合わせの妙。ホリエモンよ目を覚ませ。

何あろうとこの地球より行き場なし

シドニー 坂上 のり子

シドニーと言えばオゾン層の破壊の影響が強い。ひと頃まで最も安全と言われた所。

あいたくて抱きしめた母夢の中

関本 かつ子

私は母を事故で亡くしました。夢で抱きしめた母がまだ胸に残っています。母は永遠。

文芸アート誌

華音

Kanon



2006年
3月31日発売

特集 「歌人、寺山修司よ、もう一度。」

山田太一(小説家 脚本家)

「弔辞」

萩原湖美インタビュ(多摩美術大学教授)

「思い出の中の寺山修司」

佐佐木幸綱インタビュ(歌人)

「虚構と現実の短歌」

山形健次郎

「寺山修司の俳句時代」

ハービー・山口(写真家)

「あの日、寺山修司と」

小特集 「童謡三大詩人とその時代」

「白秋、八十、雨情」

インタビュ 関川夏央 作家・文芸評論家

「過剰なるレトロスヘクティブ」

詞に秘められた物語

北原白秋／西條八十／野口雨情



文芸アート誌「華音」
Vol.02 Spring
2006年3月31日発行
季刊(1月・3月・6月・9月)
A4判 320ページ
定価 1,700円

連載

美しいことは 谷川俊太郎 詩人

詩「愛の説法」 日和聡子 詩人

花の美意識②「桃・桜」 復本一郎 神奈川大学教授

「句会いろいろ」 やすみりえ 川柳作家

「いま、なぜ季語か」 倉橋羊村 俳人

華音Spot 奥田みつ子／川柳・対談(遠藤千舟)

投稿作品募集中!

「華音」では投稿作品を募集しています。俳句、川柳、短歌、詩など、投稿作品は旧作でもかまいませんが、未発表のものに限ります。作品は3作品までとします。季節やテーマなどの指定は特にありません。詩は400字詰め原稿用紙一枚の作品を封書にてお送り下さい。投稿の締め切りは2006年6月20日です。直接、「華音」編集部へ送っても結構です。

発行 (株)美研インターナショナル
〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル18階
TEL 03-5501-7011(代表) FAX 03-5501-7021
発売 (株)星雲社



本社三月句会

三月七日(火)午後一時
アウイーナ大坂

早春の陽光に恵まれた七日、百十六名の参加を得て本社句会は熱気のある例会となった。最初に先月亡くなられた久保まさお氏、野村大茂津氏のご冥福をお祈りして黙祷。

お話は川端一步氏。画家であり随筆家でもあった曾宮一念について。

失明後の晩年に詠まれた千首もの短歌「へなぶり」(夷曲)を取り上げ、硬骨漢の百一歳の軌跡をクローズアップ。

強靱な精神力で不運を克服、明治から平成までを生き抜いた一念も、創造力の原点は母恋の感情ではなかったかと、一步氏の思い出等も語りつつ、へなぶりの一首で結んだ。

なき母は月と指されて眺めたる

三つ児の思い今に消えざり(富美子記)
初参加は堀正和、西美和子、石原成子氏。
月間賞は米澤淑子さん(大阪府)に輝く。

(司会 朝子・玄也)(記名 扶美代・恵子)
(受付 直樹・富美子)(清記 直樹)

席題「心臓」

石堂 潤子選

春一番ハートに愛を持つてくる
心臓もまあるくなくて老いてゆく
よろめかず媚ひず心臓マイペース
ロボットへ心臓移植してあげる
美しく老いる手だてはハートでしょ
木目目覚め心音を聞く春の雨
遺影ふと心臓移植あつたなら
発表の前はドキドキしています
見かけより弱い心臓だった僕
心臓が動く限りは黙らない
ひとことを待つてドキドキしています
心臓が火を噴くようなことを言う
眠れぬ夜心臓ばかり気にかかる
心臓に何が言いたい舌下錠
修羅場から抜けた心臓光り出す
苔生えた心臓だけど棘はない
バクバクの音が聞かれる程あわて
心電図心の傷はしゃべれない
心臓の弱さは言わず見えを切る
心臓一突き痛い忠告あいがとう
見つめないで私心臓弱いです
心臓も私も不眠不休なり
イナバウアー心臓飛び出しそうになる
心臓が弱くて斜めから握手
小泉さんの心臓あけて見たくなる
心臓の自信は顔で物を言う
心臓には折り紙つきの河内弁

倫子 希久子 柳弘 朋月 俣子 富美子 幸雀 准一 菜月 ダン吉
いわゑ いわゑ 篤子 重人 楓 弥生 かりん かりん 森子 とし子 美智子 保州 祥昭 瑠美子 さくら 重人 萬的

したたかな心臓抱いている
心臓の強さで妻に負けている
善人の心臓が育たない

美男子は苦手ドキドキしてしまふ
心臓に地震来んよう手を合わせ
心音が温める母と子の絆
尖らしてはならぬ心臓子はニート
恋ですか嘘のつけない心臓だ
胎動のひびきが母の顔にする
心臓がばくばく君と目が合った
君の心臓永久保存するつもり
心臓も口も母ちゃん達者です
心臓の止まる日晴れであるように
一言の重みハートを包み込む

兼題「怪しい」
独身者なのに洗濯奇麗過ぎ
アリバイが整い過ぎて怪しまれ
雲行きが怪しくなつて話題変え
雲行きが怪しくなつたもう寝ようか
発信機つけて夫を泳がせる
怪しげな女が笑顔置いてゆく
雲行きが怪しい妻の旅仕度
ケータイが鳴つてうろたえてる夫

瑠美子 光久 緑 アキ 天笑 ばつは 義子 集一 天笑 理恵 月子 典子 美義 庸佑 雅明 柳弘 重人 美明 淳司 夕胡

太田 昭選

優しさがすぎたか妻に怪しまれ
親展の男名前を怪しまれ

手ざわりの怪しい札を陽に透かす
整形はないし怪しませてあげる

怪しいぞ夫婦にしては喋り過ぎ
本音ではないな小鼻が動いてる

あいまいに返事怪しんでもくれず
二次会のこっそり消えていた二人

朝帰りいつもと違う上にざり
核心に迫り怪しくなるろれつ

善人の嘘に誰かが絡んでる
何時にない猫撫で声で妻が呼ぶ

虫ひとつ喰わぬ菜っぱは買いません
怪しんで見れば辻褃合つてくる

お茶飲んだだけで怪しむことはない
少しずつ妻の荷物が減っている

窓際の椅子で邪推が湧いてくる
怪しいな無口な人がよくしゃべる

美輪明宏怪しいまでにする女装
前向きがある日怪しくなる失意

うさん臭い肩書仰山ある名刺
佳

妻からも怪しまれない腑甲斐なき
釈明の理路整然が怪しいぞ

九条をどうして変えたがるのです
ばれそうになると夫は鼻つまむ

遠野

菜月

みつ子

篤子

朱夏

とし子

きよし

淳司

幸雀

かりん

恭昌

恭昌

楓楽

千津子

尚士

潤子

房子

准一

尚士

愛論

能文

雅文

弥生

とし子

和夫

天笑

保州

潤子

怪しげな身なりの地藏さんに遇う

怪しげな影だ尻尾がついている

雲行きを怪しい馬をのり替える

天

脳細胞落ちる怪しい音がする

軸

訝しい過去を洗濯機にかける

課題「きばる」

井伊 東吉選

喜寿金婚きばって歳を忘れそう

思惑があつてきばっている祝儀

幕降りてからきばり出す風見鶏

人生のきばりどころで四股を踏む

ベテランの肩の力は抜けている

先代の気魄が残る鬼瓦

でんぐりといつまできばる放浪記

受胎告知一気についできたやる気

仁王像きばりの美学とも思え

きばらねば花も嵐も吹き溜る

大声を出しているのが補欠です

きばっても所詮は雑魚だされている

原稿紙もう一きばり午前二時

まだ生きるつもりで賀状筆太に

一歳児オマルできばりにっこりと

少子化にきばりはったね六人目

おきばりやす京言葉から春になる

上げ底できばって御座るうるめ干し

千恵子

倫子

一風

緑

螢

庸佑

和夫

准一

能子

雅文

柳伸

ばつは

洋

森子

正和

克己

寿美

千枝子

さくら

アキ

淳司

今年またきばりましようかいかなこ煮

沸点を上げて詩人にあるきばり

一張羅きばり出かけるクラス会

世界中勇み立たせたイナバウアー

姑さんが来るときばる癖があり

きばってもほこりも出ない空財布

きばつてる夫さしおきディナーショー

張り込んだ御祝儀だったのに離婚

ポケットの底できばつている拳

初孫に七段飾り里の親

疲れても笑顔忘れず介護する

恩返しきばって払う葬儀料

義理チョコのお返しきばるもてぬ奴

ネジ巻かれきばつて末は濡れ落葉

佳

猫かぶり新婚の娘はよく動く

捨てられるまできばつてる竹ぼうき

ライバルの足音俺を気張らせる

ようきばるお方でしたと言う弔辞

見栄を張る女の財布欠伸する

人

全身全霊かけたいきみと母になる

地

したたかに生きる女の返し針

天

綱取へきばる浪華のふれ太鼓

軸

血管が切れぬ程度に頑張ります

章子

柳弘

美籠

富子

月子

泰子

千代

幸雀

扶美代

律子

比ろ志

朋月

五月

俣子

章子

きよし

昭

昭

哲男

昭

富子

千代

千代

美代子

課題「バランス」

池 森子選

いちこムース春の弥生のハーモニー
 大概是似合う夫婦になつている
 どんぐりとどんぐり背伸びなどしない
 破鍋に綴蓋それでいじやないか
 パンザイは出来るがイナバウアーは無理
 バランスを取つて個性が潰される
 定年後微妙に強くなった妻
 バランスが崩れ続けている夫婦
 威張らずにへりくだらずに共に古い
 八頭身のバランス何着ても似合う
 世話好きな手帳にひよつことおかめ
 あまい親子のバランスを狂わせる
 家内です言うたら首をかしげられ
 見掛けじやない蚤の夫婦のヤジロベエ
 バランスを崩してからが弥次郎兵衛
 肩の荷を下ろし傾くやじろべえ
 やじろべえだけが知つてゐる無理の無理
 価値観が違つたと妻は出る構え
 善悪のバランスとつているピエロ
 性善説少しバランス崩している
 ごめんなさい言えてバランスとれてくる
 逆縁が雪のバランスも崩す
 メトロノーム互い違いに躁と鬱
 バランスをサブリメントのおやつです
 人間の脆さをバランスで包む
 持ち味のイロハバランス託される
 身の内に仏も鬼も抱えている

ばつは 時雄
 重人 重人
 淳司 淳司
 正和 正和
 准一 准一
 玄也 玄也
 朋月 朋月
 尚士 尚士
 太郎 太郎
 重人 重人
 一風 一風
 天笑 天笑
 光久 光久
 淳司 淳司
 富美子 富美子
 和夫 和夫
 見晴 見晴
 義子 義子
 章子 章子
 文 文
 美和子 美和子
 みつ子 みつ子
 弘風 弘風
 柳弘 柳弘
 とし子 とし子
 潤子 潤子

錠剤の数バランスはとれている
 バランスをとりに来たのは他所の猫
 天秤にハートに乗せることもある
 バランスを氣にして軽い僕になる

扶美代
 アキ
 楓 楽
 ダン吉

嵐にも揺るがぬ芯を持つている
 琴線に触れたかバランスが狂う
 思い切り泣いてバランス良くなった
 見た目にもほど良い位置に置くパセリ
 ひらがなの暮らしバランスよく生きる
 人と
 愛と憎バランスと戦っている

泰子
 アキ
 弥生
 美籠
 一風
 典子

風はドライいつもバランスもて遊ぶ
 バランスを整え飛んだ紙の鶴
 バランスの中に棲んでる蟻と象
 軸
 天

雅文
 希久子
 希久子

課題「回る」 山本 希久子選

悲しみを回しまわつてゆく喜劇
 なあ時計左回りもしたかろう
 回り舞台僕に主役がまだこない
 決まらぬまま明日の予定が回り出す
 天と地がくるりと回る逆上がり
 回り道思わぬ拾い物をする
 止まるまで自我を捨てない独楽の芯
 春を見つげに公園をひと回り

美代子
 ダン吉
 寿子
 比ろ志
 房子
 柳弘
 みつ子

高栄
 章子
 扶美代
 正坊
 倫恵
 理恵
 玄也
 寿美
 克己
 夕胡
 東吉
 愛論
 尚士
 富美子
 潤子
 いわゑ
 能子
 俣子
 楓 楽
 保昭
 利昭
 祥昭
 ばつは
 千里
 美和子
 篤子
 緑
 朱夏

ぬるま湯の中で回遊魚になった

人

恵子

追っかける自分の尻尾だと知らず

真理子

走馬灯すぎゆくものは風ばかり

天

洋

ベガサスになるまで回っている木馬

俣子

軸

回り回って汚れてゆく噂

課題「絵」

河内

天笑蓮

銀盤に描いてくれた青いばら

絵心が私を誘い出す春だ

ちぎり絵に人情深い村がある

そう言えばそうともとれる抽象画

交番の似顔がボクによく似てる

絵ハガキにハッピーとある娘ののろけ

絵はがきでひと足早い春が着き

絵手紙の梅の香りにあいに行く

父さんの似顔絵ちつとも怖くない

自画像は本物よりも男前

貰っても裸婦の絵飾るところがない

改革という絵に描いた餅がある

イケメンになりすぎました肖像画

絵を見ると直ぐに値ぶみがしたくなる

アイディアが涸れたら絵本見るつもり

特徴を捉え美人の絵にならず

ネイルアートの指ホカ弁を賣うてはる

少子化へ絵本の森が瘦せている

朱夏

楓楽

時雄

正坊

雅明

保州

准一

玄也

いさお

祥昭

篤子

遠野

恭昌

朋月

千津子

房子

いわゑ

写生するノルマ背負っているメロン

箒目を絵にする寺の事業欲

一幅の絵ですあなたはそのままで

売れそうにない絵を描いているペレー

花の絵がわたしを旅にさそい出す

絵手紙のおんな言葉は憎からず

床の間の大観鑑定には出さぬ

絵のように滑る静香の金メダル

濃淡の墨でボタンの赤を描く

絵手紙でんとう虫が春を呼ぶ

絵心があればと思うこの景色

絵に描いた餅に飛び付き大火傷

写楽から抜けた娼婦の白い肌

自画像へも整形手術したくなる

飢餓の子の絵に太陽が欠けている

住

この思い二十四色では足りぬ

妥協する度に濁ってゆく絵の具

裸婦の絵の前は風ささえ立ち止まる

階段も廊下も妻の絵画展

地吹雪の向こうで春の絵と出会う

人

古希すぎてまだ絵空こと言うてはる

地

明日の絵が描けてくつすり眠れそう

天

老いの殻破って恋の絵を描こう

軸

額から出して抱きしめたい裸婦だ

柳伸

緑

ダン吉

美代子

いわゑ

公誠

英子

公誠

章子

富子

章久

高栄

柳弘

洋

夕胡

修

保州

千里

尚士

弥生

恭昌

代

志千代

米澤俣子

第二回 各地川柳会代表者会議

2月18日、アウイーナ大阪で、第二回の各地川柳会代表者会議が開催された。

21地域の会長の出席を得、冒頭、天笑主幹から「川柳塔を楽しい川柳グループに発展させたい」と挨拶があった。

今回のテーマは「誌友拡大／小冊子の活用」である。一部川柳会からは、高齢化に伴う会員の減少と新規加入促進の難しさを訴える意見があった。一方、会員強化の対策を実行中の川柳会からは、具体的な実例の紹介があった。

*地域の川柳会として旬会報を広く配布し新人を新しい層から勧誘している

*行政の協力を得て例会とは別の地域の川柳勉強サークルを発足させている

*川柳会会員の定着を図るために、例会以外の新人向け勉強会を開催

等の他、「川柳しませんか」の小冊子は各地で大好評で、新人の勉強会での教材、会員への勧誘用としてフルに活用されている。

今後各地での活発な活動が期待される有意義な会となった。(渉外部)

むせぬ城

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳クラブわたの花 (前月号) 井尻

民報

ああ夫婦びつたり呼吸合っている
勘違い妥協許さぬ石頭

君江
ミツ子
宏

口も出し手も出す母の肝っ玉
遅咲きの花にもあった古い恋

一風
幸枝

年用意びつたり終わる除夜の鐘
芽を出す不満処世訓の杭を打つ

晴美
俊子

初恋は度胸がしばむレモン味
お流れと思いいざれば酒を注げ

浩三
三子

コストダウン強度偽装手を染める
染み皷も個性ですよという鏡

(本)たえ子
(赤)妙子

スタートの二人に戻る飯茶碗
老いふたり二人三脚揃う足

ますみ
いづふみ

クリスマス猫も杓子も勘違い
欲一つさすに解かず銀世界

義明
ふりこ

地下街の迷路びつたりついていく
色褪せた日記のすみに残る過去

知佐子
民

ぬれ落葉どこへ行くにもついていく
友情のかくれる言葉棄する

宏至
愛子
和子

孫たちの謎なぞ遊びたどどし
息切れる身体になりて老いを知る
勘違いしたばかりに今の妻
熱いうち打ったつもりが普通の子
赤い糸切れて気付いた勘違い

博子
正晴
耀一
はじむ
八寿子

ローズ川柳会 (前月号) 山崎

君子報

お願いは厚かましいがPPK
吐く息の白さ豊かさ生きていく
ひややかに生の終りの刻を聞く
誰もかも願う平和のむすかしさ
若さつていいなりゴ丸かじり
年金に知恵をまぶしく生きてゆく
夫婦の和少しの嘘で採めもせず
木守柿分相応に生きていく
輪廻転生花芽を抱いている枯葉
出来ぬ子の入学祈願神困る
いのち残照生さる力をみなぎらせ
幸せてたこ焼さほどいいよ冬
冬日和花も上手に生きていく

哲子
トミエ
貴代子
孝一
美籠
いわゑ
武庫坊
年代
義子
君子

サークル檸檬

吉田あずき報

初恋を偲べば今もたぎる胸
初恋のあのどきどきが欲しくなる
初恋もお菓子も弟にゆずる
忘れたい記憶背負って生きている
憂う目へ少女ら風見る目を返す
初恋を前頭葉にしまつて居る
句集から共に語らう人と居る

あずき
いわゑ
希久子
正坊

初恋を前頭葉にしまつて居る
句集から共に語らう人と居る

たもつ
棲世
哲夫

初恋の人に似てると言い寄られ
初恋を話したくなる難の宵
温かく酔わせてくれる他人さま
土下座されても悲しみに届かない
ブレイクとアクセル確認しつつ生きている
初恋の秘密小函に眠つて
消しゴムで消せる可愛い嘘に刺
初恋の背景にあるさくらんぼ
降っては消え消えてまた降る白い闇

遠野
楓楽
房子
扶美代
美籠
みつ子
光久
義子
千代

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

絶頂の時に待つてる落し穴
母親になり少し出て来た子の温み
打寄せる波へ小亀は一途なり
ブライドもかなぐり捨てておらが春
出遅れた朝市花が匂います
夢追つてデコボコ道を突っ走る
お多福の頬のあたりに夢がある
招き猫笑顔いっぱい客を呼ぶ
塩加減すぎたか腕白ウナダれる
ほんのりと母の移り香衣替え
植込みの中に大きな春を見る
水入らず今の倅さかみしめる
過疎の家水も空気も澄んでいる

ひかり
よしみ
かおり
貞月
文仙
賢

川柳塔おとし

鈴木一弘報

泥細工見事な壺になつていく
矢面に立つても総理いろ変えず
しなやかな和紙の命に鶴を折る

芳光
清子

ありがたい命が在るといっただけで
煩惱は一人の命もて余す
また一つ命を守る葉増え

ベン先が命を燃やすスキヤンダル
追った夢雲や霞と消えました
初夢を期待しながら床につく
健康の秘訣大きな夢を抱く

見た夢を夢占いで探してる
初夢は言えない言葉スバリ言う
雨の街ひとり空虚な夢を抱く
姑になる夢をゆつくり日々紡ぐ

宝くじ夢まほろしと消えていく
せめて夢ぐらいデカく描いてみる

川柳塔みぞくち 小西

ほめ上手犬もおだてて芸をする
珍客へ隣の犬が吠えかかる
戌年に嗅覚生かし風を読む
愛犬もメーリングに乗っておめでとく
野良犬が何故かしっぽを振ってくる
愛情へ犬も反応してくれる
犬と猿ともに白髪で睦まじい
年回り良くて戌年希望湧く
玄関のチャイムに吠える犬を飼う
ここ掘れと教える犬は飼うつもり
犬よりも元気に雪の中を行く

城北川柳会(前月分) 吉岡

九条は地球の規模で評価され

真一 以和万津 幸次郎 黙光 一弘 知恵 国和子 ヒロ子 道子 登美 艶子 風花 由多香 弘子 智恵子 久子 豊枝 鈴枝 信雄 公美枝 和代 静江 正光 雄々

一步

修報

宇宙から見れば地球は点一つ
わたくしも丸い地球にあやかるう
地球しか知らない桜咲き誇る
ガス石油掘って地球を空にする
かけ替えのないこの地球お大事に
地球には百年ほども世話になる
核もないひもじさもない青い星
好きなだけ飲んでいきますと
明日より今はせつせと汗流す
終章を飾る言葉に嘘ひとつ
孫からの年玉なんと至福の日
ああ八十路今更出来ぬ生き直し
カメラアイ皆正直に歳をとる
冬の恋油断をすすと凍りつく
北風に向き合い男だと思ふ
ケータイで転送してる初日の出
読み終えて余韻を抱いたまま眠る
雪月花今年も風情の雪ならず
大切なメモ赤で書き青で書き
未来でもやっぱり妻と暮したい
メモにメモ必要になる物忘れ
少年の大きな靴は未来向き
押し花の吐息は土へかえりたい
じんわりと親の小言がしっぽを押す
居直って出直す髪をそっている
酔っぱらいの説教坊さんより旨い
ポストから可愛い犬が勢揃い
死を視野に入れ生きるとは考える
四度目の元号に生きまだ元氣

昭子 達子 典子 弘風 桂作 修正 惠子 丹吉 高栄 あやめ 重人 千里 利昭 和夫 ひさ乃 倫子 千歩 集一 はじめ たもつ 朝子 順三 萬的 とし子 志華子 ルイ子 春蘭

佳句地十選 (3月号から)

西川 更紗

年金に温もる暇のない暮らし
命みな土に還っていくラスト
寡黙だが泥をかぶってくれている
誕生日忘れた母のわらべ顔
ひとりひとり思い浮べて見る賀状
愛想笑いするたびわたし消えてゆく
権力や金にも媚びぬ雪は降る
人生の生きざま並ぶ終電車
敵方に仲間にした友がいる
スタートのおくれが拾う時の運

かつみ 富子 ダン吉 保州 美籠 楓楽 光男 注湖 美恵子 宏至

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

初対面言葉に磨きかけてゆく
初対面緩いカーブも投げてみる
挨拶がすこし四角い初対面
バーゲンで取り合ったのが初対面
初対面なのに娘をくれと言う
機械に夢中いざれこの子は博士かも
ドラマ生み夢中に駆けた八十年
青い目が夢中にさせる大相撲
夫などどこ吹く風と趣味の会
金賞を狙い夢中に墨をする
夢中になれる小さな鬼を飼っている
一人居もやっぱり祝う鏡餅
無理通す陰にやっぱり天下り

かおり 宏章 重人 美籠 尚士 のりこ 義一 勲弘 石舟 照子 (井) 高栄 宵草

あの人の裏にやっぱり美女が居た (神典)
 お前にはやっぱり無理だ頼めない
 窓際の椅子はやっぱり硬かった
 どう見てもやっぱり役者妻が上
 雪音はやっぱり白の音だった
 糸口を探す夜長の虫眼鏡
 楽をして儲かる仕事おまへんか
 福の神へたまに寄つてとメールする
 妻の笑みこ何日も見ていない
 浜の風吸った鯛に気を貰う
 美人だがきれいな嘘もつく女将
 正論も義理人情に動かされ
 熟年の恋には柵が幾重にも
 鬼の面取つたら孫が泣き出した
 へそくりを挟んだ本が見当たらぬ
 ライバルの本音を聞いて好きになり
 寒風にほほえむがごと福寿草

岸和田川柳会 原 さよ子報

定年で来客が減るまた一人
 来客の顔見て寿司は並にする
 打ち水で仕上げて客を待つ女将
 衣食住足りて挨拶知らぬ娘等
 さようなら紅葉みたいな手を振る子
 来客へ挨拶に出た子の狙い
 挨拶を交わすけれどもさてどなた
 手土産が何より効き目でご挨拶
 挨拶は人と人との潤滑油
 迂回して方向音痴が道迷い

あきんどは毎度で心通じあい
 不意の客慌ててしまふほろぶとん
 威厳ある奴後列に居る不気味
 目の光腰の低さにある威厳
 迂回したお蔭で視野が広くなり
 迂回した人生の気温かい
 迂回して小さな花を見つけた
 回り道して少年は立ち直る
 世辞一つ言えず迂回の人生路
 嫁ぎ娘の便り絵葉書ヨーロッパ
 絵葉書の隅に送金書ヨーロッパ
 絵葉書のサインも二人睡まじい
 絵葉書の富士山いつも日本晴れ
 絵葉書でごまかしておく旅土産
 絵葉書の土筆が匂う早春賦
 絵葉書に一言添える旅だより
 絵手紙に先手とられた花だより
 挨拶に親の躰が垣間見え

竹原川柳会 時広 一路報

父よ父よ父よと歩くこともある
 父さんと二人の夕食もいね
 一言も言わぬ父から教わつた
 父の背に流れる汗の虹を見る
 古里に寡黙な父がいて安堵
 勤勉な蟻に徹した父の汗
 嬉しかった日暮の中の亡父の顔
 木枯らしが吹けば恋しい父の胸

父の言漢言葉のように効く
 山彦は父の響きを持つている
 逆境を愛してやまぬ父の川
 任せれば楽しく上手くやっている
 我が家にも幸せ色の風が吹く
 世界中の平和これこそ一番だ
 嫁姑アハオホホで年明けける
 和を忠におき火の章水の章
 和を以て貴しあんパン半分こ
 和の中で金魚大きくなりました
 紙芝居おまけの鮎に和があった
 父が居て賑やか居なくて和やか
 和とはかくみどりの中の朱の鳥居
 平和主義夢はでつかいだんこ虫
 咲いたとも言わず一輪寒椿
 咲く花は陽にむかつてる生きている
 いいことをしたら心に花がさく
 母の碑へ母の水仙咲きこぼれ
 白梅が咲く如月よ亡母の忌よ
 それなりに咲いて野菊の美しき
 まだ青春へ大きく咲く予感
 私には聞こえる花のありがとう

京都塔の会 都倉 求芽報

増税へ民は遠吠えするばかり
 寒椿丸見えになる形相が
 誕生日ギフトの主にはつとする
 自然から快晴というギフトあり
 この街にトンボが飛んでいた昔

あゆみ 静風 半覚 寿枝 千枝 菜歩 栄恵 幸子 比呂子 房子 輝恵 力 不朽 淑子 万年 千代美 絵菜 敬子 汎美 菁居 厚子 一路 鹿太 ふりこ 則彦 弘之 正坊

老け役で鳴らす昔のお姫様
同窓会昔のマドンナよく笑い
庭の木に昔話のある故郷

里帰り昔のままの地蔵様
袂持ち母の行く先遠い日々

昔のこと忘れた顔でいてくれる
どのくらい昔と孫に突っ込まれ

気の重いノルマへからむ靴の紐
重い荷でにんげんを試す神

責任の重さに涸れる涙壺
いざごさの重い日もあり箸一膳

ひとこと重さがちがう経験者
たくわんも人も重石で出る旨味

電話する地球の裏もついで隣
留守番の電話にこころ打ち明けず

不都合が出来たか電話声落とす
携帯電話持たされ妻に監視され

あした逢う約束してる長電話
電話よりやっぱり私手紙好き

吉報も訃報も聞いた黒電話

川柳塔唐津

仁部

四郎報

井の中の蛙が知った株投資
盆栽に子育ての妙論される

今年より中高一貫わが母校
返りの世の一会の縁深む句座

逝っちゃった友のボトルを飲んで
茶柱が立ったと古桶がはしゃいでる

書けますよ郷土力士のあの漢字

尚士 萬的 比ろ志 典子 輝美 葉子 求芽 美義 欣之 百合子 昌乃 宏子 啓子 高栄 庸佑 春 益子 満子

門松と干支さえあればいい賀状
倅せは手の平いっぱいだけでいい
糟糠の妻が春呼ぶ手をたたく

川柳塔きやらばく

福代

天雀報

若い目が輝く未来みつめてる
暗い道呼吸とまりそな猫の目で
成年に犬を飼いたい話出る

お互いに腰叩きつつ雪を掻く
間髪を入れぬ試合がもり上げる
年かさね苦手なことが多くなり

日の鱗一枚はいで朝が来る
名残惜し最後と思うクラス会
ふるりの呼吸吹きかけるUターン

傷心に日にち葉が効いて来る
ひと言の礼であかるくなる宇宙
裏木戸の番犬になる年始め

和やかな呼吸で坂をおりてゆく
お経にも呼吸があつて句読点
あの人の賀状に今日もほおずりを

夢に見る家族の集い夜寒かな
新年をポロポロに雪北を埋め
大吉が出るまで引くか初詣で

若水を汲んで四股踏む年男
春よこい待ちくたびれた木の芽たち
兄妹でこたつ囲んだ遠い夜

寒波襲来身も心までしてやられ
食べて寝てトコトン生きる計をたて
芽吹くもの天に向つてみな動く

輝夫 高明 虹汀 那珂子 雪江 寿々子 天雀 なみ てい子 晶子 紫泉 ふみ 春枝 千春 恵子 日枝子 千代 やえ 初枝 富美子 章江 すみえ ゆき 田鶴 亜弥 瑞枝

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

雨降れば受話器の別れ長くなる
雪が降る昔むかしの嵩に似て
葬送のバラバラと降る涙雨

降り積る雪にふたりの隠れ家よ
ラーメンのつゆどっぷりとアッチツチ
スポットがあたり舞台の七変化

そろそろと歩く余生に要るライト
イルミネーション点り砂丘が眠れない
突然のライトに犬が吠えだてる

雪しんしん傷つく胸に浸りこめて
旅先のタオルが喋る風呂談義
向い風受けて座った土性骨

雪がふるふるふる老いを閉じこめて
筋道を通ず藪が降ってくる
ホリエモン好きな友だちだったのに

友だちが病むと心が暗くなる
友だちの命日近いさみしいね
友だちのおかけ余生に生きる張り

嫌いでも生き残つたらみな友だち
嬉しいね私に勝る友ばかり
見送るか見送られるか友と僕

悪戯鬼にリセットボタン押してみ
信じよう許しもしよう友達だ
長い杖短い杖のおともだち

人生のおまけを友とよく遊ぶ
落ちぶれたときに一人が来てくれる
信用をなくした友をひとり消す

八重 汲香 和子 宣子 みどり えい子 かおる 富久江 睦子 彩子 弘子 くに子 小鹿 菊乃 久枝 武子 房子 実満 節子 照彦 公子 きみ子 完司 ひろこ 盛桜

大原川柳

山本 玉惠報

取り替えの利かぬ命を陽にさらす
 忘れると困る笑顔をアルバムに
 スパイスを効かして話し皮肉られ
 雪積んで春待つ老いの背が丸い
 柳箸集う心が暖かい
 雪しんしん静かな夜は人を恋う
 餅食べて体重計とにらめっこ
 ばあちゃん知里リサイクル保存食
 天命は神に預けている呑気
 年金も師走の風に乗って飛び
 乾いても心のオアシス詩を作る
 成るようになれよと諦めよく眠れ
 大寒が押し寄せ老いを閉じ込める
 お年玉一つ増やして孫を待つ
 大雪のニュース大原いいところ
 心の底にずしりと溜る炎の想い

川柳塔なら

坊農 柳弘報

妻 子
 あすなろ
 絹 子
 静 子
 ひでの
 たづ子
 みさえ
 美佐子
 巴 子
 喜美子
 悦 子
 辰 江
 南 花
 敏 夫
 みづえ
 玉 恵

その歳で再婚なんて止めなはれ
 体裁をかまわぬ人で親しまれ
 二十円の釣はいらんと云って降り
 傷ついた猿が見つけた露天風呂
 入院の風呂許された八分がゆ
 しがらみも私心も捨てに行く秘湯
 河内音頭唄いに入る父の風呂
 梅だより春の体裁添えてくる
 ささやいた時から風になる二人
 修羅越えて縮んだ母の背を流す
 あほらしくなるまで泣いた仕舞風呂
 風呂の中言いたいことを言うてみる
 入浴介護かゆいところに手が届く
 復興の村を夢みる錦鯉
 一点豪華坪庭に飼う錦鯉
 重箱の中は錦に違いない
 ゆっくりと私が溶けてゆく湯船
 体裁ばかり並べておせち売れている
 履歴書に過去の錦は飾らない
 体裁の薄着を笑う冬の底
 まだ羽化の途中ささやきかけないで

川柳ふうもん吟社

夏目 一粹報

積 子
 太 一
 博 一
 茂 雄
 千 梢
 良 一
 一 風
 隆 盛
 秋 雄
 富 子
 真理子
 ダン吉
 美千子
 朝 子
 恭 昌
 信 子
 理 恵
 笛 生
 順 啓
 弥 生
 孝 子

古里にまだカリスマの山がある
 一発で受験の春にサクラ咲く
 吉と凶妻の風向き気にかかる
 この句会かばちもおつて座が弾む
 一発で見抜く母には利かぬ嘘
 三歳のかばちに茶の間なごみます
 大かばちこいて火の粉が降りかかる
 葬式の席で紹介お付き合い
 カリスマも刺客もすぐに忘れられ
 カリスマの神を信じる自爆テロ
 カリスマの山には深い谷もある
 吉か凶か籤引くまいぞ今でよい
 来た道は吉と凶とが縄のよう
 懐に決めの一発隠し持つ
 新年の御籤は凶が抜いてある
 一発も銃声聞かぬ世が欲しい
 吉と凶わけた車両の乗車位置
 先ほどのかばち明日は変えるなよ
 吉と凶一生みれば五分と五分
 昭和史の秘密カリスマ抱いて逝く
 愛あればこそ一発拳振る
 吉と凶越えて幸せ来てほしい
 家運かけここで一発勝負する
 頂点の椅子がかばちで軋みだす

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

無 限
 信 子
 良 子
 主 郎
 一 瑤
 節 子
 金 祥
 春 名
 義 徳
 重 徳
 孝 男
 千 代
 千 子
 章 子
 一 京
 雅 女
 房 江
 美 雪
 善 夫
 喜 子
 毅 子
 秀 四
 はつ江
 宗 明
 一 粹
 弘 直
 喜美子
 慶 子

セーターの色を賞め賞め血を抜かれ
 敬老でもらうセーター赤ばかり
 再会に着るセーターは決めてある

そわそわと春のセーター顔を出す
セーターに愛も嫉妬もこめて編む
アレも芸洋服脱いで叫ぶほお
親の愛の殻が脱けないニート族
着たまの形でシャツが脱いである
脱皮する過去の全てにグッドバイ
脱いで知るこんなに着てた老いの嵩
あずき

長柳会 村上直樹報

夢のある証さ古希の万歩計
おかしいぞ今日の母さん厚化粧
一万歩雨が降っても脚は向き
しわがれて怒鳴る元氣も影うすれ
新鮮な風いれにくる若夫婦
いま奮やがてはばつと咲くいのち
ウォーキング寒波で足が休んでる
明治生れ寝るが極楽母の皺
母さんへはがき一文字親孝行
二百円惜しんで歩く健康法
紅梅の蕾少女のような彩
皺の数生きた証と愛おしむ
筆まめな父が故郷の風届け
鳶を生み鷹への道を歩ませる
美しく歩く背中に隙がない
惜春の出会いなつかし山の駅
落葉踏みそぞろ歩きに古都の鐘
北風に黙って耐える冬牡丹
咳ひとつ気にしてくる妻がいる
ケータイがベツト無口な風の中

加津子
ますみ
香住
シマ子
能子
欣史子
直樹
康弘
武男
佐久治
靖子
輝子
たけし
正一
マサ
不二雄
芳野
美代子
史
和代
一慧
もこ
明子
三和子
正博
和子

化粧する生年月日消えました
娘の縁談イエスもノーも言わぬ父
惜別の悲嘆もあつた青春譜
八十年生きた証の皺の数
こうのとりの竹の園生に奮おき
平凡に歩いて光る定年日
手渡しの内緒の金は皺だらけ
生前は化粧無縁の亡母に紅

川柳ささやま

遠山 可住報

絡まずに来た一すじの赤い糸
能なしも好きの一すじ絵具皿
開運のキツカケにしよう宝くじ
不景気をピンクに変える絵具皿
写真帳開き賀状と見比べる
さみしさは袋に入れてただ拝む
桜咲く城で逢おうと初便り
五十年一筋で来た折り返そ
作物も一筋種えは出来がよい
平凡という日を拝む灯が揺れる
雪の道心開いて温泉へ
一すじのたすきをゴールまでつなく
未知の扉を開く地に道天に星

川柳茶はしら 板山まみ子報

法力もタレント頼り節分会
馬鹿だねと苦笑の妻は許してる
鶯へ練習急かす梅の花
梅子を入れていわしの味がしみ

けい子
淳司
敬二
ひろし
正子
富美子
よしお
幸雄
純子
美緒子
二英
文子
美紗子
靖子
多美子
開子
かほる
つや子
富子
哲男
可住

初釜に梅を見立てたお菓子添え
ロウバイに顔近づけて春を恋い
夢違かこつこつ貯める貯金箱
初釜へやつと咲かせた梅一輪
梅見には犬もお伴の小半日

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

丁寧に畳み直して返す恩
ウエストはきつと正直者たろう
よせばいいのに隣の鬼へ投げた豆
悔しいが歳の数だけ食べられぬ
地球危機ジャックの豆の種播こう
豆撒きへ鬼の行先気にかかり
スクラムを組んだら豆も強かろう
豆まきで眠る議員を起こしたい
白く小さい豌豆の花コケティッシュ
会ってきた余韻たのしむ五色豆
堪刃袋抑え切れずに豆爆ぜる
泣いてる尻磨めてくれた鬼の豆
山の宿人肌恋し豆ランプ
冬ごもり豆がここと上機嫌
ウエストの細さ母性を拒絶する
ウエストラインとつっくに行方不明です
ウエストの位置で女は決意する
旅支度鏡が笑う胴まわり
腰まわりたるんだ肉が寄つて来る
自分史にきつちりつけておく折り目
本心から託げる自すと丁寧にていねいに生きる振り向かないように

百合
美千代
盛夫
幸子
まみ子
精吉
ダン美
英子
泰
あきこ
輝子
よりこ
稚代
富美子
泰女
豊太
さち子
朱夏
徑子
和子
和香
准一
大輪
三男
夕胡

丁寧な口調で監視されている
残された生命を生きる丁寧に
内視鏡でいねいすぎることはない
丁寧より訛言葉にある温み
マニユアルのとおり覚えた丁寧語
丁寧なお手本抜けて弾む毬
熟年の脳みそ洗う丁寧に
丁寧な話に疑問溶けてゆく

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

寿子 東吉 保州 登美代
よしこ 小 雪 千代子

手短に話して釘は忘れずに
強そうな仮面がほしい女ひとり
棒グラフもの足りなそう腹の虫
しがらみを越えた流れにある命
しがらみを幾たび越えて咲いた花
しがらみが邪魔したあの日の初デート
こだわりを捨てると知恵の輪がとける
九条のこのしがらみに虫がつき
靖国も悲願届かぬ糠に釘

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

かつ子 伸子 聖子
はるみ 恵美子 好栄
ちよえ 博利 清泉

羽毛ふとん綿のふとんがすてきれず
胃カメラが一札をなる喉仏
何でも口に油断のならぬ十か月
うっかりと口滑らせてからの位置
山茶花の葉かげに咲いて紅い花
濃いお茶が欲しい冬日が翳り出し
話したら私もですと同病者
藁の家強度はいらぬ寒牡丹

千恵 守弘 幸子
紀乃 正子 武庫坊
昭三 勝巳

有明けの月が祈りの母になる
われもまた行く道ならん寒椿
快速に乗り換えようかあすは立春
歯が疼く今日も明日も寒厳し
鍋磨く思想なんかは捨てたから
風呂吹きがうまくて冬が好きになる
思いきり撒きたい鬼がほかにいる

西宮北口川柳会

黒田 能子報

寛之 薫 年代 東園 芳子
宏一 純

おだてられその気で買った派手な服
仲直り出来るたこ焼き八個買う
雪しんしん女はみんな魔女になる
世の悪を押しつぶさんと雪しんしん
別れにはしんしん重い傘の雪
考えておきますと言うお断り
赤鉛筆芯尖らせて物を言う
すくノーと言う児に心くすぐられ
ママにだけ児の片言が理解でき
恥知らず鉄筋抜いてまで儲け
羞恥心先立ち無口になっている
恥かいてからの軽口仕舞い込む
男でしよう恥はあなたがかきなさい
振り向けば恥はつきりかかっている
麻痺気味のころろへ恥を問うている
古日記いろいろ眠る過去の恥
凍てついた愛のかけらに蹴つまずく
八分目で楽に生きると逃げてみる
便利さが近所付き合い消して行く
出来ちゃった婚孕子化の世は悪びれず

江美 歳子 房子 貴代子
美明 哲男 奮水 順子
開子 石舟 光久 昭三
朋月 富喜子 一之 和子
トミエ いたる

向き合えば時空を超える名画展
静寂を切る警策の座禪堂
梅の香が春の扉をノックする
拝む熱愛験生より親が上
青春の顔も知つてる古鏡
思いやる相手へ嘘は許されよ
朝一番元氣もらっている受話器
花言葉確と聞こえるバラの精
風に背を押されふところ無一物
ポランテイアやってみたいがされる歳

かわはら川柳会

上田 俊路報

比ろ志 千代 鹿太 二英 五月 章子
美籠 孝一 春蘭 文

マンションが怖くて住所変えました
めり張りが付いて変った歌の味
薄味の妻にならされ変わる舌
にこにこと変わらない人福が来る
幾星霜ふるりの秋変わらない
只今の声に飛び出す仔犬たち
この頃は犬も服を着て散歩する
すて犬も犬権あるとほえている
距離を置く犬が尻尾を振って寄る
番犬が尾を振ってぐるる処世術

ほたる川柳同好会

水野 黒兎報

地球儀にとっしりとした国がない
一言が胸に堪えるどっしりと
黒く塗った教科書昭和史の汚点
うっかりがひとり歩きをして困る
塗りすぎかしらそっと鏡に聞いてみる

契子 雪子 蛭柳 昭子

慶弔に急ぎネクタイしめ替えて
白塗りのピエロの顔にある孤独
大一番物怖じしない藍さくら
郵便局官から見て笑顔ふえ
無駄でした塗つても同じ猫と居る
緩慢な動作どっしり見せている
何食わぬ顔で手渡す女文字
妻宛の保険DMやたら増え
ケータイが交遊マップ塗り替える
捨てられぬ塗りははげても夫婦箸

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

水くぐるたんびに白くなるキナリ
賛成も反対もせず白い紙
白黒を付けねば承知せぬ律義
絶対面白と信じる目の光
いろいろなサプリメントで義母元氣
八十路往き越にいろいろ通り過ぎ
いろいろを越えた人だな静かだな
いろいろの戌の賀状に見て倦かず
汗知らぬビジネスが舞うネット上
ひと仕事終つたあとの爽快さ
にこにこ訪問販売肩を揉む
ポラントエアビジネスのように頑張るわ
営業マンやつてましたねその笑顔
ビジネスとプライベートを分けるシャツ
居酒屋にビジネスマンの舞台裏
大切な仕事任せてもらえない
ビジネスの話はしないティータイム

信男 久子 柳童 長一 勇治 肋骨 いさむ 黒兎 春代 勝

靴揃える妻にリストラ切り出せず
信頼の医者は顔見るだけでよい
医者嫌いクシユンときたまたまこ酒
医者通い出来るあいだはまだたまこ酒
胃ぐすりをもらいに行つて風邪もろた
無医村が長寿村だという皮肉
ドクターに言われてタバコやめました
無医村へ一足早いつくしの芽
回診の名医待つてる青い顔
医者通い月月火水木金金
真心が閉ざした心開かせる
オープンな男で少し頼りない

富柳会 池

諦めた数だけ長いシルエツト
今ならばゴメン言えますお袋さん
男も菓子も甘すぎるのは要注意
魂まで濡らした傘のしずく切る
今もって勝気な芯が動かない
何もかも諦めてから運が付き
熟年という人生の真つ盛り
今の顔明日のしあわせ語り出す
遠視をした老犬の日向はこ
スポーツが苦手で今日も歩きます
言うことを思い出したが人ちがい
今ひとつ足りぬ思いで夫婦する
もろもろを西に鎮めて初日の出
たつぷりと事件が匂う輪転機
理由あつて今だけ恐い顔をする

惠勇 ヨシ枝 いさお アヤ子 光男 吐来 敏 扶美代 志洋 かつみ 泰子 ダン吉 和子 淳司 一造 鐘造 紅紫朗 和代 巳代一 よりこ 欣之 隆彦 彦次 伸雄 澄子 高鷲 アキラ

犬となら対話もできる自閉症
春でなく今日ピリオドを打ちましょう
失つた自分捜しの迷い旅
今ここに君がいたらと思う旅
一番の理解者だつたのはピアス
道草も今日につながる一里塚
とびら百枚を開いて私の座
一台の酒で翔んでる夢の国
どの色も冬の答は持つている
青と白今を分け合う葱大根
去年今年愛万物に棲んでいる
行く先を春の眼鏡に聞いてみる
諦めて黄水仙は涙色
しあわせをたつぷり願う銀の匙

川柳大阪 高木

地震国手抜きしないでマイホーム
サービスに浮かれ財布が空になる
立ち歩き孫と競争麻痺の足
ええがなと鉄筋の数減らしとる
笑顔ですすがシャッターチャンスです
形式にこだわる男明日が見え
暗い世に想定内の案を練る
髪形を変えたらすぐに褒めておく
靖国の参拝変える形だけ
逢いたさへ夢中で走る赤い傘
夢中だが三度の飯は食べている
押さえないで胸に抱いている不発弾
夢中で生きたリンゴの歌にはげまされ

深雪 奏典 正典 あかり アキ 信子 ひろこ 宏至 鬼焼 哲史 初太郎 萩乃 扶美代 森子 信酔報

つきたてを夢中で食べる年の暮れ
寅さんのマドンナ思い夢の中
節曲げず私のままになる形

そのコートええがなしかし古いなあ
大丈夫娘を抱いて送る母

わが家でのトップニュースはルビー婚
締めくくり演歌は続く大晦日

今さらにも悔いすることなし除夜の鐘
赤を着る百まで行けとおだてられ

マンシヨンの札の厚さで数値決め
ひよつこのツボをおかめが知りつくす

ありました貴方に夢中だった頃
スピンの隣と逢うたゴミ出し日

ファイバーだ大ファイバーだ夢中です
もったいない価格押さえの野菜捨て

メチャ強い妻が押さえる術がない
ええがなあ人生まるく行くのなら

倉吉川柳会

竹信

照彦報

コタツからブラウン管にミカン投げ
水道の破裂におれが怒られる

母さんは怒らないのにまた泣かす
怒つてもしょうがないと手酌酒

国民の納めた税をつまみ食い
飲みすぎても家族に怒られる

絶世の美女も怒ると鬼女になる
お笑い講座腹の底から毒が出た

健康講座自信あふれる帰り道
手話講座劣等生の三年目

章久
いつわ
柳昌
美花
司
一歩

鉄心
三十四
川童
重人
いわお

洛酔
青道
喜楽
まつお
信酔

石花菜
重忠
よしえ
鬼一
幸子

泰輔
和子
龍枝
玲子
修

講座受け古い級友巡り合う
偏屈な講師講座の人気者
根がケチで役に立たない講座賣う

張り切つて講座聞いても夢中
酔つてない酔つてないぞと千鳥足

まだ女すこしぐらうは乱れない
明日のこと誰が知るのか不整脈

温泉宿裾が乱れる千鳥足
少々の乱れはあるがい女

病む窓にひねもす雪の乱舞する
乱切りの根菜旨い筑煎煮

脈拍の乱れに気づく安来節
地の恵みゆつくり洗う赤かぶら

地縁なし血縁もなしここで死ぬ
地球から温泉もらい逃げられぬ

おばあちゃん地元料理の名人に
牛蒡抜きされて地球の果てに住む

空想の大地で白い馬に乗る
姑弱るそろそろ陣地渡るかも

人間が歩いて大地汚しとる

三幸川柳教室

古久保和子報

この人と決めて連れ添い口喧嘩
バス旅行雨天決行あめおんな

何事も妻の機嫌で決められる
顔ぶれが決まっています私語の席

決めつけてくれば反発したくなり
神様が組ませてくれた妻が好き

貴方と組んだ長い年月ふりかえる

瑞子
次男
玲坊
満
悠子

康子
風露
季芳
前喜美子
京子

和枝
きみ子
完司
賀寿恵
孝恵

照彦
芳光
勝誉
照彦

かずみ
智三
みね
准一
義雄

桂香

末席の意見も組んで座が温い
お日さまと組んで元気な冬野菜

あれよあれよと言つ間に決まる赤い糸
出雲の神もたまにへまする組み合わせ

組み立てた夢の欠片と根をおろす
ゆつくりと老いる予定を組みながら

組み慣れた腕ずれてくる倦怠期
口ポツと組んで老後の坂登る

結論へ閉じた不満が零れ出る
お決まりの姿で孫と釣りに行く

魚にも相性あるの首かしげ
ヒゲ面を重顔にして釣り談義

エサをかえ釣り針を替えまだ独り
情報的大海で悪魔を釣りあげる

左遷地の釣りバカ日記厚くなる
ひたむきにウキを見つめる釣りロマン

釣り上げて魚の国は大騒ぎ
煮込むほど馴染むおでんの自己主張

それなりの哲学者込むおでん種
鍋いっぱいおでん仕込んで消えた妻

おでん屋の席に無冠の笑みがある
ひとり言が多くなったよなあおでん

おでん鍋に部長課長を放り込む

うぶみ川柳会

一途さの羽音はとでも心地良い
泣きやんだ乳飲み子心地よい寝顔

三千子
イセ
当代
町子
美枝子

公子
八重子
起世子
千秀

孝義
正治
徑子
宏夫

章子
保州
昇
次根

幸
碧
朱夏
登美代

和子
幹子

美ツ千
くにお
黙光

かつみ

故郷の小豆煮者が珍らしい
 居心地が良くて住んでる古所帯
 神仏に同じ台詞でまた拜む
 居心地がよくていつまでも母の膝
 心地よいテレビ椅子またうたたねだ
 居座つてずっと成り行き見るめがね
 しがらみを脱いですつきりした心
 見え見えの驕りを神に裁かれる
 春色に驕る心を戒しめる
 着心地のよい服衣紋掛けが抱く
 ずつと買うけど運のない宝クジ
 お守りは肌身はなさず持つている
 おじさんの心地はいつも宙ぶらりん
 佳いことがありそう二重虹が出る
 この本は睡魔に化けぬ本だった
 驕りなど露も知らないお月様
 心地よく頭を下げるありがとう
 にんげんよ驕るなかれと雪が降る
 七十で死んだらずっと七十大
 死ぬまではずっと二人でいるつもり
 珍らしく瞬化しそうですあさきゆめ

よしえ 和子 きみ子 天人 和 あつま 雄人 芳江 睦子 和枝 重忠 ひかり 修 ひろこ 羅奈 季芳 螢 完司 石花菜 由多香 宣子

どきなはれ私がボンと言つたげる
 断りはいつもわたしが言う羽目に
 断ると別の写真をすぐに出す
 決断をしたらブレイキは踏まぬ
 断れぬ心に喝を入れてやる
 断つておくが私は男です
 話を聞けば断りきれぬ拾い猫
 若返る薬もたまに欲しくなる
 大阪の雪はわくわくさせて降り
 年賀くじ下五ヶタまで合っている
 わくわくする古い日記をラップする
 年金のおかけ何とかまだ夫婦
 よく回る疲れ知らずのこの地球
 始まりは四角四面の受精卵
 冥土への旅は回転木馬かな
 ささやきが波風たてにやってくる
 夕焼けは浄土へつづく道標
 年豆を噛むには三日ほどかかる
 世も末か釈迦も閻魔も嘘を吐く
 五十年添えは無口に味が出来
 冬枯れの風にみの虫逆らわず
 生きてればきつと私の花が咲く
 好きですと言えば終りになった恋
 汗かかぬいびつな金が大手ふる

順三 葉子 達子 集一 典子 郁夫 麗 和夫 正昭 利昭 桂作 たよし 昭子 弘風 高栄 東吉 倫子 はじめ 萬的 千里 ルイ子 修

ほろほろと散る運命なき和紙椿
 有難いことですほろほろの御飯
 少子化に日本ほろほろ泣き止まぬ
 酒一合ほろほろ愚痴が出る頃だ
 ほろほろと泣いた昔が遠くなる
 じゃかいかがおでんほろほろ煮えました
 次々と不祥事ころ寒くなる
 寒カラス選挙センキョと鳴きだした
 とときは寒い日もよし鍋かこむ
 寒いだの暑いだのなぜいたくだ
 寒村の六十歳はまだ少女
 歳ですと主治医の寒い聴診器
 寒い日は横着病と言う持病
 振り出しに戻り身軽に出直そう
 指輪を外すフツと身軽になつてくる
 血の絆切つて身軽な奴風
 春うららみんな身軽になつてくる
 身軽だと思ふ自信の足くじく
 ほろほろと涙が落ちる師の悲報
 ポリウムをあげて孫らに叱られる
 ほろほろと涙が溜まる笑い皺

公子 睦子 雅女 かつみ 和子 葛子 圭一郎 蟹郎 節子 稔 茶子 忠良 公乃 一京 裕子 節子 裕子 重忠 幸枝 美恵子

城北川柳会

吉岡

修報

目玉だけちらちら動く露天風呂
 極楽をしばし味わう露天風呂
 春風に浮かれ陽気な空財布
 現実にもどると財布軽くなる

縄のれん好きな財布を持つている
 貧しいが心錦と言ふ財布

美智子 とし子 春蘭 志華子 一步 朝子

岩美川柳会

石谷美恵子報

ほろほろと泣けぬ気丈な鬼の面
 リストラで夢がほろほろ散つてゆく
 信心がたりぬほろほろ生き地獄

きみ子 一粹 螢

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

流水の音はゆつくり春を告げ
 氷より冷たい人となじられる
 つららまで凶器となつたミステリー
 雪祭りの氷の城へ世界の輪
 氷枕母の耳だけ起きて居る
 日が昇る霧水きらめくバスの窓

昌枝 幸 治代 ちえこ 房子 茂美

派手好きの飼い主犬も派手に吠え
いつ死んでもいいと真つ赤な服を着る
派手かしら老春を問う試着室
からからと派手に笑つて虚ろなり
派手かしらそつと鏡に問うてみる
笑つても泣いても派手に散るぼたん
はしゃぐほどはしゃいだ後のランドセル
はしゃぐのが下手で笑つてばかりいる
寄せ鍋がはしゃぐ上司のいない著
皇室にお目出たはしゃぐのまだ早い
コンパスの圏内はしゃぐ夢がある
ライバルがはしゃぐ私も燃えてくる
心は自慢するもの二つ三つ
ほどほどの自慢なら聞く耳がある
身のほどを忘れ天狗の鼻が折れ
さしのべる嫁の温い手自慢です
自慢したほどにはとべぬ竹トンボ
壺の中自慢話が泡を吹く
放浪の画家の生涯渡り鳥
出雲弁おぼえて北へ渡り鳥
国境の争い笑う渡り鳥
渡り鳥次の約束して帰る
北帰行国境のない渡り鳥
人間の悪を見ている渡り鳥

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

たえこ 幸子 きみえ 政子 邦代 喜美子 小 鹿 多 賀 子 知 恵 子 注 湖 静 恵 浜 丘 玲 子 桂 子 英 子 紫 晃 雪 代 多 喜 和 歌 子 叮 紅

欣 之 加 央 里

ドライブのここから地図の無い二人
缶コーヒー夜更けの道を温める
通夜に行く地図タバコ屋が消えている
肝臓の叫び週一休ませて
金持ちも貧乏人も吸う空気
義理なよと女房がくれた子ヨコレート
山寺の晩鐘沈む父母の里
自販機で空気を買っている悪夢
日本の空気ふくらむ懐妊
地図の上おもいはせるわ春の旅
神様に貰った顔だ汚されぬ
やさしさの浅瀬に沈むおぼろ月
陽が沈む二下神山燦然と
そのうちに空気になるうキミとボク
言い勝つて心の沈むコップ酒
波風は立てない沈むふりをする
告白は夕陽の沈む頃にする
長風呂をそおつと覗く思いやり
少女孵化春の空気にして薄着
合併で名前の消えた地図を買っ
漢方湯雁くび並ベケセラセラ

翠洋会

谷口

秋 雄 加 津 子 初 太 郎 宏 至 耀 一 幸 生 は じ む 雷 子 正 典 美 代 子 一 風 芳 香 ま つ お 柳 伸 弥 生 高 栄 き ら り

千 歩 す み 子

少しぐらいいいよと医者もいける口
許さねば一つ屋根には暮せない
許してと素直に言えぬもどかしさ
許された一合大事に吞んでいる
許さねば私が生まれ変れない
父の背が許すと言っている温み
水壁へもつぱら挑むのもロマン
もらうよりもつぱら贈る熨斗袋
定年後もつぱら妻の機嫌とり
もつぱらの噂耳までは神の聲
低音のうたの響きは産の低い声
僕だけにくれる土産の低い声
トリノ五輪またイタリアが好きになり
湯治来てひとり手酌の雪見酒
いつの間を迎えた八十路のエイエイオー
せめて銅トリノのメダル遠いこと
柏汁で酔っていますの仏さま
捨て犬をうらやむ檻の血統書
義理子ヨコで本命が一つ出来ればね
スポーツはいいなトリノが清々し
紙コップ説教臭くて座がしらけ
菜の花忌司馬達が招ぶ春はそこ
そのうちに勝ち組ばかり残る世に

いずも川柳会

佐藤

石 舟 理 惠 舞 夢 正 坊 集 一 捷 也 富 子 桃 花 絹 子 水 昇 正 雄 さ と 美 満 作 照 子 蕉 子 志 華 子 れ ん げ 会 美 叡 子 千 梢 恭 昌 み つ 子

カ ツ 子 玲 子 畔

温かな手だねつないでいいですか
愛らしいおばあちゃんにはちよつと無理
愛なんて疾うに蒸発してしま
相性は吉と出まじした春うらら
限りなく優しくなつた妻が言う
許し合う友にも越えぬ線はある

昭

日の出

治代報

不揃いの湯呑みで趣味の輪が温い器ではないのがすぐに手を挙げる金ですむ器どうしが金で抹茶

修羅一つ抜けた女の火の器

職人のころろがしみる輪島塗

シャンデリアの下でホープの隠し芸

ホープと言われれば駄馬でも走り出す

呱呱の声あけてホープがやって来た

ホープなど一人もいない蟻の列

愛ちゃんに続く五歳のニューホープ

ごんたくれで困りましたとお母さん

ホープだと送り出しましたと帰らない

夫婦碗妻の器が僕を越す

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

びっくりも慣れると腰もぬけません
来る度にびっくり箱を開く孫
面倒な雪かき休み今日は雨
このとりのお告げか紀子様御懐妊
関門クリアそれから難儀降りかかる
どか雪の捨て場に億の金を捨て
面倒をカタカナにしたははの辞書
長寿国老老介護苦渋する
ひと粒の豆から童話ころげ出す
北の駅びっくり箱の中の雪
完治する日は書いてない診断書
面倒見いい先輩の背に並ぶ
つまずいた石から知った路のとう
面倒で定款読んだことがない

ひさ乃 重人 章久 柳弘 憲太郎 雅文 祥昭 朝子 たもつ 柳伸 アキラ 利昭 清成 誠子 洋子 てる 隼人 愁女 順風 雅城 花匠 井蛙 ふさゑ 黙人 岳水 花峯 慕情

遣伝子を替えた大豆が浮気する
ほどほどのしあわせでいい豆の艶
予期をせぬ左遷でビルが揺れ動く

川柳ねやがわ 森

七人の敵を倒しに朝を出る
一年のスタート層蘇に酔っただけ
スタートの決意砂上に書いている

親は親子は子旅立つ春が来る
成年のスタート犬と散歩する

スタートに戻って自分探しする
発車オライみんなおしこ済みました

ライバルの再出発に塩贈る
スタートの影は野心を覗かせる

巣立った日の母の見送り忘れ
りきまずに再スタートの老いの層蘇

飼い犬を選べぬ犬も尾を振って
犬嫌い知ってか犬も寄り付かぬ

犬小屋のようだと言うが俺の城
お散歩は犬にかまけて老いの恋

盲導犬だつて吠えたい時がある
妻に吠え僕にっこり笑う犬

忠犬のハチ公の像ボチに見せ
着ぶくれて散歩がいやになった犬

少子化の隙間を埋める小犬たち
犬掻きを通し困ったことがない

捨て犬へころろを鬼にして別れ
期待されていると思う大拍手

宝くじ期待しないが買ってみる

遺伝子 一花 五楽庵 茜報 度 九好 純甲 麗 西 とし子 利昭 恵子 忠央 一風 勇太朗 庸佑 弘風 たず子 仁清 修 日出子 かすみ 郁夫 たもつ 朝子 典子 三郎

拝む度期待以上の御来光
楽しみは孫に流れる私の血
トリノ五輪期待の星の勢ぞろい
期待していますと背を押す言葉
保育器に親の期待の目が刺さる

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

アバンチュール少し期待のひとり旅

コーヒートの香りへ弾む話好き
認知症なつてたまるか囲碁かこむ

こつこつと歩くパワーに勝てません
お昼時熟女パワーの食と声

春立ちぬそろそろ新芽せまい庭
明日がある別れの言葉春の音

ギブス解きそろりと試歩の道に出る
頑なに同居を拒む母の老い

写経して山門あとに軽い足
若かった恋知りそめし親不幸

平凡に慣れて我が家のぬくい飯
善人が見ればこの世は鬼ばかり

パワー出せ子作り責務雅子妃よ
お世辞聞くその耳もとに波の音

終りよければ始めたことを褒められる
大根のパワーに頼る街おこし

方舟を造り始める国が増え
勿体ないほどのパワーで喋ってる

パワー尽きよめく蠅も酒飲もう
夢捨てて継いだ家業に夢を抱く

母よりも祖母の無学の生き字引

弘一 博泉 桂作 ルイ子 高栄 慶子 郁人 重人 玲子 知香子 和生 啓生 高栄 庸佑 春 寅次郎 美義 久太郎 萬的 肋骨 早人 巴子 見清 勇坊 正坊 満寿巳

水切れを花はだまつて萎びてゐる
喧嘩して飯はまだかと言ひそびれ
家柄が後ろ姿に出るベツト
定年へ妻が何かを始めてる
葬式も婚礼もした古い家
羊水の中から始動するドラマ

川柳塔打吹

野口

節子報

茶柱が立つて一日そわそわと
ひとり居に茶のみ友達恋しがる
二次会で友の愚痴聞く喫茶店
茶筌舞い激しく踊りわびの海
ビイチクと妻が鳴いてる退散だ
お蚕の鳴き声聞いた事が無い
海が鳴いて大豪雪を連れてくる
鳴かずにば鳴くまで待つと酒の爛
戦前も戦後も耐えて長い道
空腹に耐えて理想のからだつき
寒波にも耐えて頑固な皮下脂肪
もう少し耐えて見るかと腹くくる
耐えぬいた垢や虱の従軍記
反対の風にも風車耐えている
人差し指が曲がらぬように耐えている
耐える事馴れて来いよと送り出す
明白な嘘に耐えてる太っ腹
達筆の便り返事が書きつらい
達人の筆スラスラと紙を這う
鉛筆は六角形で進歩せず
筆談で交わす二月の予定表
痢の虫筆なめつける灸のツボ

タミ
尚士
則彦
幸雀
寿美子
石舟

孝恵
京子
勝憲
克枝
紀美恵
和枝
公恵
美知江
和子
玲坊
禎元
睦子
重忠
茂夫
三津子
善江
玲子
芙美子
龍枝
照彦
きみ子

達筆で書いたくずし字よう読まん
優しさの深みに落ちてゆく小筆
懇ろに筆の供養をしてあげる
筆順は違っているが愛は愛
筆先に未来をこめて走らせる
幸せを探す手紙は筆で書く
師と仰ぐ高浜虚子の筆の跡
筆持てる指が何んとも愛おしい

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

鐘の鳴る丘に苦勞の坂がある
青春の記念に残るダンス靴
ステップせぬチークダンスはまだ出来る
妻の手でダンスさせられ生きている
晩酌も恵方に向かいひとり飲む
浅知恵へ影伸びてくる春入り日
ラストダンス彼は真つすぐ来てくれる
窓をしのめ夕日が落ちて母想う
おはあちゃんダンスに凝って派手づくり
子だくさん父母の苦勞を見て育つ
ホームでは姑もダンスを披露する
生甲斐と苦勞いとわぬ喜寿の母
人に負けない苦勞をしたとみんな言う
水色のワルツに若い日が踊る
横着をこよなく愛す妻の留守
うす目あげ黙ってチャンス待っている
靴ならしタップダンスでご挨拶
苦勞せず儲けた金が居かない
黒い男の背に頼りきる

久芽代
美ツ千
幸子
完司
たけ代
芳光
節子

晴美
五月
朋月
きよし
昭三
宏一
里江
耕治
よし子
美代子
亀与子
イサミ
正治
孝一
比る志
鹿太
全彦
桃花
美籠

ロース川柳会
山崎 君子報
保険たつぷりばあさん空の旅に出る
年と共に心のきずも癒えにくい
心こめシチューを作る誰も居ぬ
約束は春にまわして冬こもり
お隣は宇宙人かもおヌシ誰
小春日の小川に光る猫柳
誰がために道路造るや赤字国
折る鶴は幸せ色と決めている
誰からも愛されているプチトマト
もうひとりの自分と話す長い夜
少年の日と同じ夢見る春間近
きのうきよう春を小出しにふきのとう
日本人と申しあげてるバスポート
本命は一番小さいチョココレート

川柳さんだ

北野

哲男報

新品の服に値札がついている
金足りずレジで品物減らしてる
試着室好きを捨ててサイズ選る
ポロリ出る言わぬが花の愚痴一つ
父さんのもらした本音聞くベツト
チョコよりも泣かれてハート奪われる
貧しいが持つて来たのはハートです
脱アフレ豆まき終えて春隣
手を温め気持ち温めて義母を見る
母さんのお腹で決まる晩ごはん
歯を削る医者他人の目をしてる
我儘がつくった壁に叱られる

哲子
藍
トミエ
貴代子
孝一
美籠
いわゑ
武庫坊
年代
義子
君子

順子
歳子
開子
二英
章子
忠
哲男
雅司
宣司
キヨミ
藤朗
光久

お日様の匂いがしない冬いちご

川柳クラブわたの花 井尻

民報

やれやれとそんなに背中押さないで
少しずつ心の垢を消すお経
わがままな孫を横目に犬仕付け

正和
君枝
宏

謎が謎生んでドラマは期待盛る
美容院そまつな髪をふくらます
晩婚の娘の部屋でアクビする

一風
幸枝
晴美

ひと言が言えず後悔抱いている
親父には孫を刺客に送りやい
想定外か死者まで出してライブドア

俊子
浩三
浩三

句読点打って透明になる絆
カルチャアの梯子で退屈を埋める
道祖神雪に埋もれ春の夢

(本)たえ子
(赤)妙子
ますみ

増税にやれやれまたも酒タバコ
びつたりと私好みのLサイズ
よちよちがスリッパ揃え客を待つ

義明
ふりこ
知佐子

苛立ちを埋め続けて五十年
嫉には鬼にも見えた母の愛
勘違いあつて欲しいよ再検査

宏至
愛子
和子

ホリエモン自慢の鼻に大火傷
捜し物また度忘れしてやれやれだ
後悔しないこの一言に夢をかけ

博子
耀一
はじむ

起業家の嫉忘れていた寵児
この世ではやれやれ思う時は無し

正春

嬉しさをビツクリ箱に詰めておく

河内
月報
潤子

慰謝料に犬の養育加算され
CMで俺より稼ぐ偉い犬
鼻歌の出た日の日記オーバーに

愛子
和子
博子

愛情はずつと前から冷めてます
嬉しいと勝手に鼻が歌い出す
相槌のずれた会話が淋しいな

君枝
宏

ここ掘れといつになったら言うんやろ
子が継がぬ家業を孫が継いでくれ
父さんの日記に酒の染みがある

一風
幸枝
晴美

盲導犬に目礼をして追ゆる
赤裸裸にうつぶんはらす日記帳
アトリエのずさん思えぬ冴えた画布

俊子
浩三
浩三

怒られて嬉しい時もありました
姑の介護日記の字の乱れ
みな元氣普通の事がありがたい
トネルを抜けて答えを掴んだ日
喜んでくれはったもん嬉しいわ
負け犬がリベンジ誓う初詣で
体調の良し悪しわかる日記帳
会いたいと犬に賀状が来ています
恋人は心やさしいブルドック
人よりも人をよく知る介助犬
青空にずばりこたえを授けられ
好きなだけ食べて痩せるとい話
覚え書きほどの日記が役に立ち
一日のテンポが早いうれしい日
しつぱ振る犬に見習う事がある
いまま少し生きたい五年日記買う
やむをえず犬のシャンパー借りている

惠勇
公誠
日の出
舞夢
真澄
扶美代
康治
鐘造
像山
時雄
八千代
文
さくら
千代
萌
千代
深雪
朋月
りつえ
冬虹
泰子
好
かりん
玄也
よりこ
梓
半銭
飯子
つづや

第3回 大野風柳賞作品募集

雑詠 五句 (未発表) 審査 大野 風柳

審査方法——4月25日締切・千円

※集句は記名選とします。

※五句一組として総合力で賞を決めます。

表 彰——6月25日 柳都大会

※大野風柳賞一名 (受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通宿泊費 準賞三名 (大野風柳表装半折作品・賞状・副賞一万円) 優秀賞五名 (大野風柳色紙作品額付・賞状) を表彰します。

950-8801 新津局私書箱15号 柳都川柳社宛

ふる里の風に抱かれる無人駅 八重子
東かがわ市川柳塔おつばこ吟社の同人・伊勢八重子さんは、昨年11月、東かがわ市白鳥中央公園に句碑を建立した。

さん立 子建 八重子 伊勢句



いずも川柳会80周年記念川柳大会

とき 6月25日(日) 午前10時開場

ところ ホテル武志山荘

電話 0853-21-1111

出句締切 正午

(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

兼題

「模様」河内 天笑選 (大阪)

「平」天根 夢草選 (大阪)

「陽」木本 朱夏選 (和歌山)

「品」新家 完司選 (鳥取)

「主」佐々木 裕選 (浜田)

「集める」金築 雨学選 (出雲)

「包む」長谷川博子選 (松江)

「ころころ」竹治ちかし 謝選 (出雲)

会費 2000円(昼食・大会誌・記念品呈)

前夜祭 5000円

宿泊 6000円(朝食付) ホテル武志山荘

申込締切 5月末日

(前夜祭出席・宿泊希望:前日・当日)

(住所・氏名・電話明記)

申込先 鳥根県出雲市松寄下町284

吉岡さみえ宛

TEL 0853-22-1068

FAX 0853-23-3201

主催 いずも川柳会

第17回時の川柳交歓川柳大会

日時 5月7日(日)

会場 兵庫県民会館9階ホール

会費 2000円(記念品・発表誌呈)

◎昼食は各自お済ませ下さい(地下に食堂があります)

講演 「幸福の設計図」佐藤 誠氏(NHK大阪放送局編成部アナウンサー)

兼題

「新しい」和歌山 木本 朱夏選

「麦」神戸 長島 敏子選

「遠い」堺 板野 美子選

「発」岡山 貞岡信太郎選

「追う」京都 田中 博造選

「志」摂津 森中恵美子選

「雑詠」神戸 平山 繁夫選

特別課題 1句

「妻」三木 小笠原双城選

特別課題の入選句には景品を進呈します。

席題なし 欠席投句拝辞 各題締切12時

賞 知事賞、市長賞ほか多数(合点方式)

懇親宴 5000円 同館10階 当日受付

◎当日平成17年度時の川柳作家賞ならびに第26回ときとせん賞の表彰を行います。

主催 時の川柳社

後援 兵庫県・神戸市・神戸市教育委員会・兵庫県文化芸術協会・朝日新聞社・神戸新聞社・兵庫県川柳協会・神戸川柳協会

第7回 生駒市民川柳大会

とき 7月16日(日)

12時半開場・出句締切13時半

ところ 生駒市芸術会館「美楽来(みらく)」

生駒市西松ヶ丘2-10

(電話 0743-74-1101)

近鉄奈良線生駒駅から北西へ四百米

祝辞 生駒市長 山下 真氏

生駒市長 磯野いさむ氏

生駒番傘川柳社

宮田 宣子選

「汗」事前投句 生駒番傘川柳社

「叶える」番傘川柳北斗会 松本初太郎選

「積む」川柳文学コミュニティ 赤松ますみ選

「泳ぐ」番傘わかき川柳会 油谷 克己選

「ゆつくり」やまと番傘川柳社 植野美津江選

「スタミナ」川柳塔社 西出 楓葉選

「夢」京都番傘川柳社 本庄 東兵選

会費 1500円(出席者に発表誌呈)

事前投句(1句) 6月16日迄 美楽来宛葉書

懇親宴 大会終了後 会費四千円事前申込み

連絡先 〒630-0247

生駒市光陽台184 吉川 卓

(TEL 0743-74-6019 / FAX 6099)

主催 生駒市・生駒市教育委員会

生駒番傘川柳会

「会報打吹発行三〇〇号」記念大会

とき 6月17日(土)

10時開場 13時開会

ところ 倉吉交流プラザ 2階

視聴覚ホール

(倉吉市昭和町バス停 徒歩1分)

※倉吉未来中心隣り)

兼題と選者

(各題2句、席題なし・出句締切 正午)

「白」 徳田ひろこ選 うぶみ川柳会

「3(三)」 牧野 芳光選 川柳塔打吹

「祝う」 政岡日枝子選 川柳塔きやらほく

「ほろり」 新家 完司選 大山滝

「折り折り」 土橋 螢選 川柳塔野みか月

「あのころ」 但見石花菜選 元赤崎川柳会

表彰 市長賞他(6賞)

会費 2000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1000円(締切 5月31日)

必着 用紙自由

小為替(へ切手可) 作品集呈

事務局(投句・問合わせ先)

〒689-0605 東伯郡湯梨浜町園545-16

竹信照彦 方

(電話)0858)34-3345)

「会報打吹発行300号」

記念大会実行委員会宛

主催 倉吉川柳会

後援 鳥取県川柳作家協会

第21回国民文化祭・やまぐち2006

川柳 作品募集要項(概要)

(維新と川柳胎動のまち萩から)

一、応募受付期間 平成十八年四月一日(土)～六月三十日(金)(当日消印有効)

二、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) 応募方法 山口県市実行委員会作成の「作品募集要項」をご覧いただき、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) 応募先 〒758-8555 山口県萩市江向510

三、宿題・選者(事前投句) 高校生・一般の部

雲 〓 平山繁夫(兵庫) 開く 〓 岩田 笑酔(静岡)

土塀 〓 井上 博(徳島) 走る 〓 黒川正之進(奈良)

雲 〓 波多野五楽庵(青森) 開く 〓 安藤紀楽(東京) 走る 〓 小林由多香(鳥取)

翼 〓 住田英比古(大阪) きらきら 〓 渡辺 梢(埼玉) 夏みかん 〓 堀江加代(千葉)

第二次選者

久保田半蔵門(兵庫) 今川 乱魚(千葉) 木野由紀子(三重)

柏原幻四郎(大阪) 竹本瓢太郎(東京)

四、賞(予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・山口県知事賞・第21回国民文化祭・山口県実行委員会会長賞・山口県教育委員会教育賞・萩市長賞・第21回国民文化祭萩市実行委員会会長賞・萩市教育委員会教育賞・(社)全日本川柳協会会長賞・山口県川柳協会会長賞

五、発表会場 川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成十八年十一月四日(出) 10時30分～15時30分 萩市民館

入選作品は、「作品集」として発刊し、応募された方(小・中・高校生は入賞者)に無料で配布します。

六、問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒758-8555 山口県萩市江向510

第21回国民文化祭萩市実行委員会事務局宛

TEL 〇八三八-二五-二五九〇 FAX 〇八三八-二五-二四二〇

七、主催者 文化庁・山口県・山口県教育委員会・萩市・萩市教育委員会・(社)全日本川柳協会・山口県川柳協会・第21回国民文化祭山口県実行委員会・第21回国民文化祭萩市実行委員会

委員会

柳界展望



大阪市)から、17年川柳塔
賞受賞記念に金一封拝受。

○亀井優子さん(故亀井皎
月夫人)より供養として金
一封拝受。

▽同人動向△

☆川柳塔わかやま吟社では
平成17年度各賞を発表

〈葵水賞〉 西口いわゑ選

1位―批判した父の姿に
似て生きる 堂上 泰女

〈あおい賞〉奥田みつ子選

3位―留守電に宇宙人語
の孫の声 堂上 泰女

☆第55回西大寺会陽川柳大
会は、2月26日西大寺ふれ

あいセンターで248名の参加
で開催された。当日の特選

〈西大寺会陽奉賛会会長賞〉
やさしさに触れて一氣に

咲きました 山本希久子
〈岡山市教育委員会教育長賞〉

一生懸命囃むやさしい人に
なるために 小島 蘭幸

▽芳志御礼△

○三浦千津子さん(誌友・

多数の役員・同人が参列し
た。91歳。(追悼記事は次号
に掲載)



▽訂正とお詫ひ△

2月号 13頁下段5行目、
あつぱれ万々歳→あつぱれ

ガンバ万々歳

3月号 97頁中段8行目、

典子→千恵子 103頁下段8

行目、能弁↓訥弁 丈↓文

常任理事会 3月7日出席

者19名 ①中間会計報告

②川柳塔社役員に関する件

③95号誌上大会進行状況

④各地代表者会議今後の課

題・反省点 ⑤同人承認5

名 ⑥その他

次回 4月8日(土) 13・30

新同人紹介

田中章子
―みつ子・美籠・哲男推薦

石原歳子
―みつ子・美籠・哲男推薦

佐々木満作
―天笑・恭昌推薦

福岡末吉
―岳人・直樹推薦

佐甲昭二
―岳人・直樹推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 暖かい・痛手・歌声・おかしい	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳塔 みちのく	15日(土)午後4時から 涙腺・頑張る・女らしい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
岬川柳会	16日(日)午後1時半締め切り スタート・通勤・引出し	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 藤井寺	16日(日)午後2時半締め切り 詩・派手	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 打つ・反対・ストレス・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)午後1時半締め切り 皮算用・効果・あっさり 狡い・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から カラス・浮く・自信・城	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳 ねやがわ	23日(日) 正午から 礼儀・エプロン・化粧・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
はびきの 市柳 民会	23日(日)午後1時から 遊ぶ・ぎりぎり・ミニ・「板」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	23日(日)午後1時から 奈落・ガス欠・八つ当たり	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	24日(月)午後2時締め切り 役・呆れる・団子	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	24日(月)午後7時半から スイッチ・旗・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	25日(火)午後6時半締め切り キャリア・黒い・信号・疼く	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 反応・紐・几帳面・あっさり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

4 月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	1日(土)午後1時から ソフト・条件・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉柳会	1日(土)午後1時から 水・知恵・教える	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
城北川柳会	1日(土)午後1時半締め切り 机・化ける・そろそろ・自由吟	旭区 老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳塔 な	6日(木)午後1時から ゆったり・昼・新人	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	7日(金)午後2時締め切り 箱・聞く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 打吹	8日(土)午後1時から 音・美人・遊ぶ	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	8日(土)午後2時締め切り 音・卵・びっくり・揃う	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
八尾市民 川柳会	9日(日)午後1時から ドラマ・男・拾う・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 陽気・樹・カード・ 「世界の国名・地名」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から うっかり・抜く・余裕・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
川柳塔 唐津	10日(月)午後1時半から 蛙・湿気・長閑	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼崎 尾浜川柳会	11日(火)午後1時から 荷物・イロイロ・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 川・絶つ・はてな	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
堺川柳会	13日(木)午後1時から 邪魔(共選)・激しい さ・く・ら(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑

編集後記

☆誌上大会の締め切り日が近づいてきました。投句がまだの方は、よろしくお願いします。

☆薫風名誉主幹一周忌特集には、23人の投稿をいただしき有り難うございました。どの文面からも、一年を経て逝去を惜しむ気持が、より一そう強くなっていることが感じられた。

☆晩年のある時期、先生は短気になられ、時折理不尽な言動をされたことがある。そのためからぬ噂が回り回って耳に入り、先生が病気のお毒で悲しい思いをしたこともあった。

☆最後の入院をされた時、偶々看護婦さんから聞いた話によると、先生が普段携帯されていた酸素ボンベは、脳に酸素が過剰になり悪影

響があるという。道理で、病室で使用されていた頭から被る固定型に替えられてから、とてもしつかりされた訳だ。病室へ何度か伺い、お辛そうな中教えていただいた様々な句の解釈は、私のお宝になっている。もつとも「そんな事わからんのかいな、自分で考えなはれ」と叱られもしたが。

☆グルメだった先生は、胃半分のため、食が細く、美味いものを少量、いい雰

囲気で召し上がるのを最高の幸せに感じておられたようだ。投稿の中の町紅氏の卵の殻の話は、食べることを疎かにしない先生の気持の表われで、グルメの面目躍如たるものが窺える。

☆今夜は好物だった水了軒の八角弁当を買って、先生とさし向かいで一献傾けながら食べよう。また叱られるかな。

(ふ)

ひとこと

「きつせん」のひび

「きしせん」とは、岸和田川柳会の略称である。高橋操子先生が、昭和二十四年三月岸和田において会を創立されたのが始まりで、以来今日まで半世紀有余の歴史を持つ由緒ある句会である。昭和五十一年には「ちつぽけな善意でもよし心満つ」の句碑を久米田寺境内に建立されております。

先輩諸公の話によると先生は見

るからに姐御肌タイプで、面倒見がよく「下手でも良い、自分に正直な句を作りや」と申された聞いております。その教えが今も綿と続き、現在会員数四十一名、毎月一回例会を開催しております。今秋には第五十六回の大会を迎える事となり一同今から張り切っております。今後共、この栄えある伝統を守り続けると共に、川柳塔社発展の一翼を担って行きたいと考えております。(井伊 東吉)

★入学の季節は文房具の季節。小学校入学のとき私が選んだ筆箱は、緑色のセルロイドだった。女の子らしい赤やピンクでなかったところに、子供なりにこだわりのあったというべきか。

★文房具とは「筆・紙・硯墨・文鎮・小刀など文房に必要なもの」文房とは「詠書あるいは執筆をする部屋、書齋」と沢野ひとし著『さわの文具店』にある。

★さてわが文房を見渡す。ワープロ、ボールペン、万年筆、鉛筆、物差し、ホックキスにテーブカッター、クリップ、鋏、修正液、糊、退職の時に事務の女性が贈ってくれたプーさんのマンガ付き赤い手動の鉛筆削り、薫風先生から頂いた猫の置物も鎮座します。

★ティーブカッターは昨年、句集を出したときに娘から贈られたもの。銀座は伊東屋の洒落た木製だが、残念

ながら切れ味は百均に劣る。

★小林秀雄の書齋には中川一政の「朝顔」の絵、デスクには愛用の樗彫の小箱と、佗助が似合いそうな白磁の花器。整然とした机の脇の窓からは、緑したたる庭が見え文房と呼ぶに相応しい。

★再びわが文房を見渡して……乱雑さに声もなし。『書齋から春夏秋冬』池が 見え (朱) 薫風

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号)地名

都道府県
市
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「懐かしい」 (4月15日締切)

6月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府

姓
雅号

地名

市都
道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
		〒 —	—	
年 月 日				
年 月 日				
月 月				
から から				
一年 半年				
98000円				
50000円				
〇 〇 該当の方に○をつけて下さい				

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16
 川柳塔社 (電話) 06-6629-6914
 ウエムラ第2ビル202

振替 0098015133368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑選
水煙抄 (8句) 板尾岳選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄 (懐かしい) (2句) 藤田泰子共選
一路集 (3句) 「長」 「湿」 「蛙」 「氣」 「閑」 須郷井蛙選
初歩教室 「歯」 (3句) 西内朋月選
三宅保州担当

6月号発表 (4月15日締切)

檸檬抄 「隣」
一路集 「逢う」「貝」
初歩教室 「いのち」「ガラス」

第24年度 夜市川柳募集

第11回 「恥」 大野風柳選
ハガキに3句 4月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇〇六年(平成十八年)四月一日発行
発行人 河内権治
編集人 西出楓楽
印刷所 美研アール
〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 (〇六)六六二九一六九一四番
振替 〇〇九八〇一五一三三三六八番

薫風 本社4月句会

とき 4月8日(出) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間が変わりましたので御注意下さい。
ところ アウイーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし
兼題 「簫」「笛」 奥田みつ子選
「暮」「う」 米澤 椒子選
「凄」「い」 海老池 洋選
「ひよいと」 長浜美籠選
「島」 三宅保州選
河内天笑選
会費 1000円 投句料 500円
席題 1題 当日発表(各題2句以内)

本社5月句会

8日(月) 午後5時半から
兼題 「赤」「知る」「タッチ」
「悟る」「火」

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護 2 A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

診療時間

・放射線科・ホスピス

月～金 8:30～16:00

・デイサービスセンター

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>